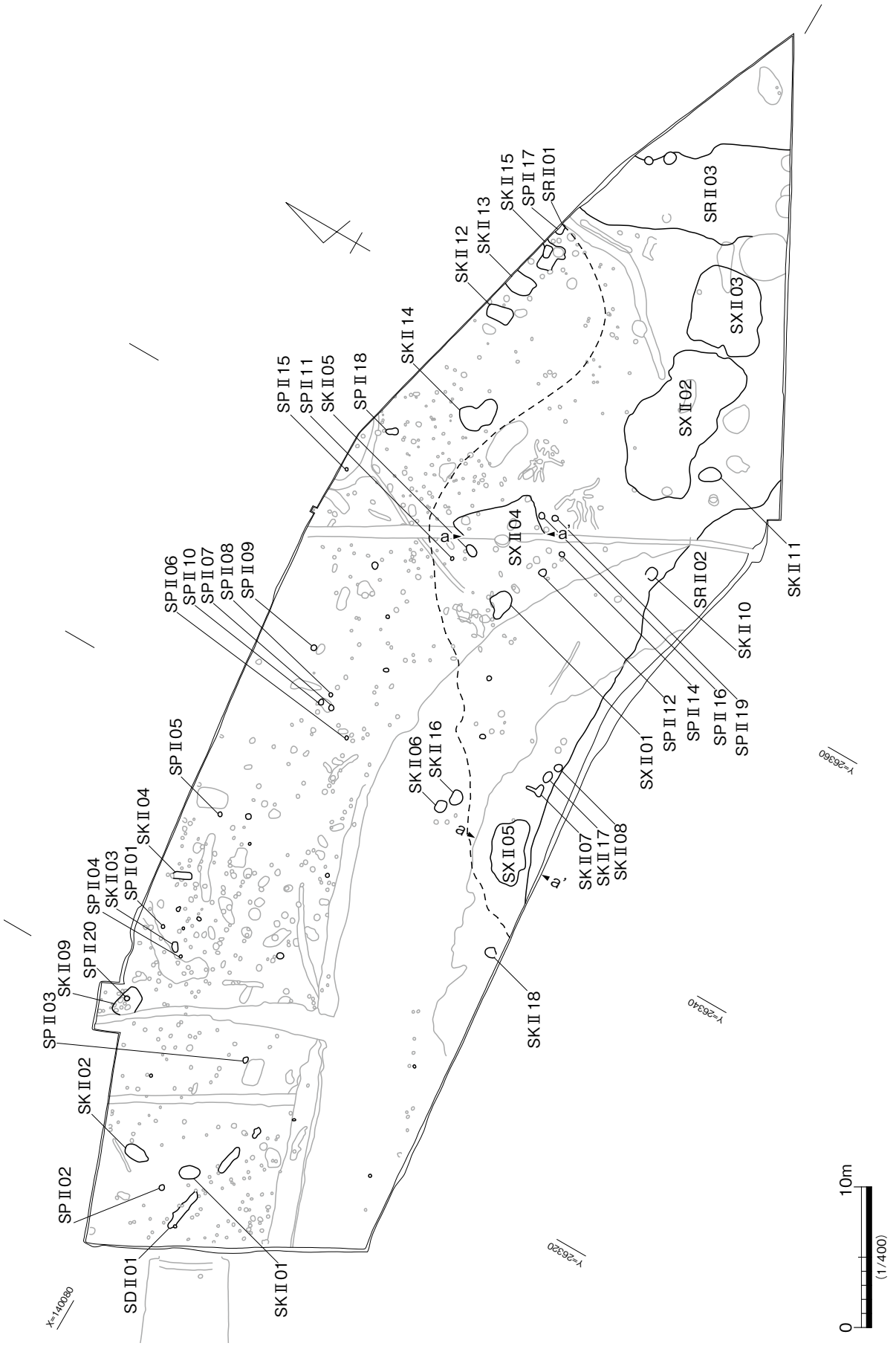
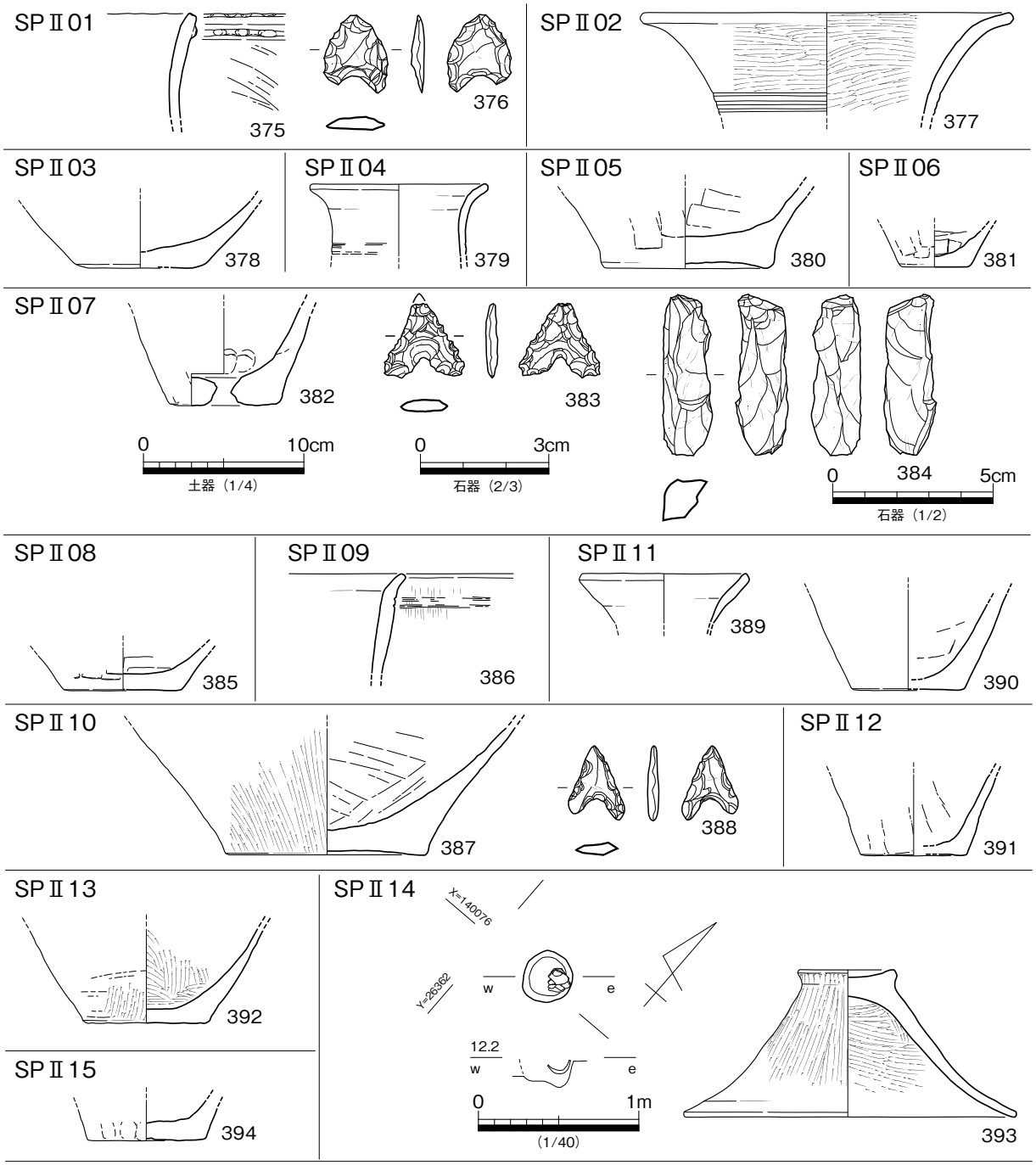


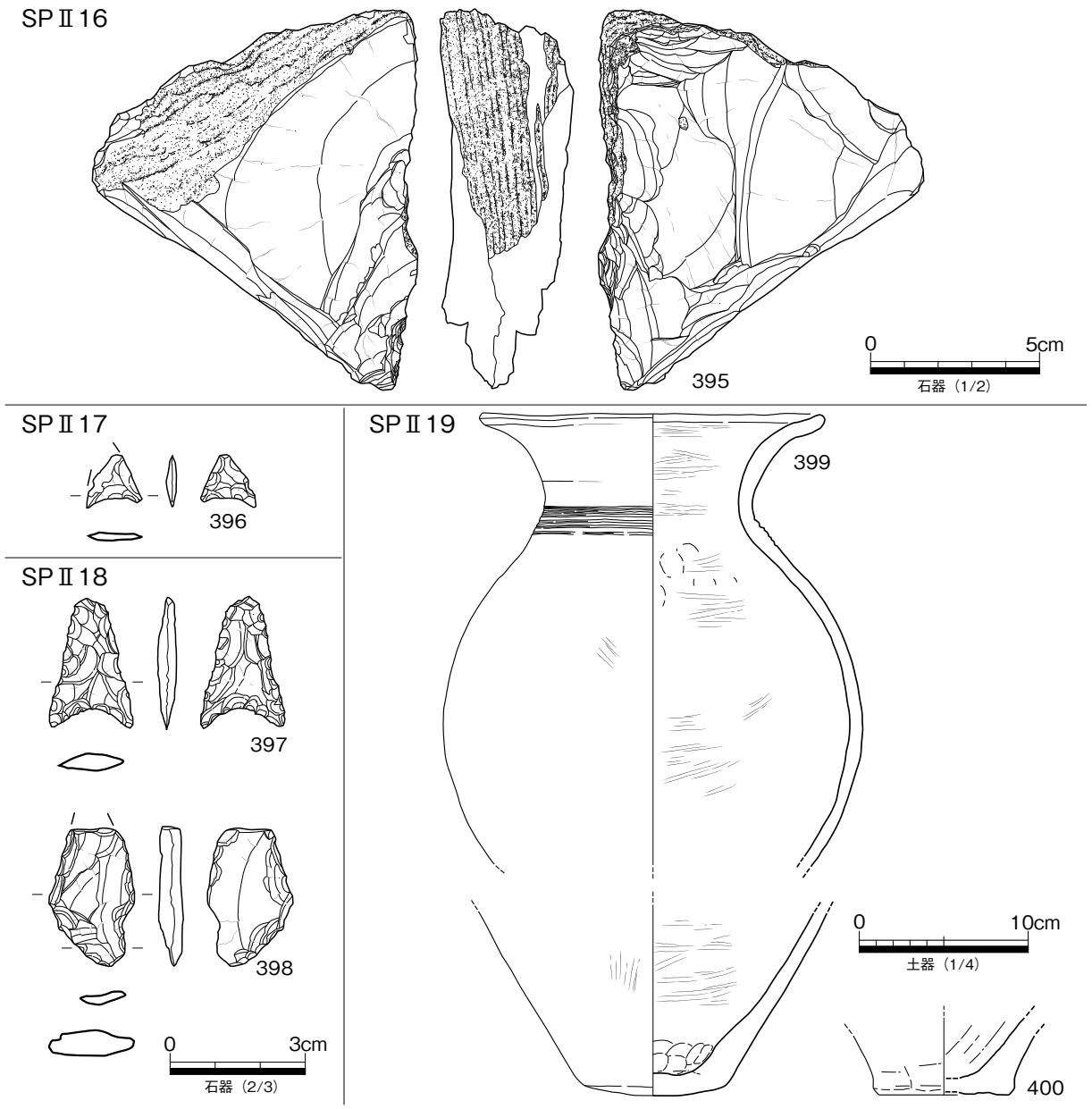
第 63 図　Ⅱ区弥生時代前期遺構　平面図



第 64 図　SP Ⅱ 01 ～Ⅱ 15　出土遺物実測図

377 は SP Ⅱ 02 出土のもので、壷口縁部である。頸部に３条以上のヘラ描き沈線が巡る。378 は SP Ⅱ 03 出土、379 は SP Ⅱ 04 出土の壷である。380 は SP Ⅱ 05 出土の壷、381 は SP Ⅱ 06 出土の甕、382 ～ 384 は SP Ⅱ 07 出土のもので、382 は焼成後に穿孔した甑、383 は凹基式の石鏃、384 は形態から剝片化した楔形石器と考える。385 は SP Ⅱ 08 出土の壷、386 は如意状口縁の甕である。SP Ⅱ 10 からは壷底部と風化した凹基式の石鏃が出土している。389 は SP Ⅱ 11 出土の壷の口縁部と甕底部である。391 は SP Ⅱ 12 出土の甕、392 は SP Ⅱ 13（位置不明）出土の壷である。SP Ⅱ 14 からは完形に近い蓋が倒立した状態で出土している。SP Ⅱ 15 からは甕（394）が出土している。

第 65 図 395 ～ 398 は、伴出した遺物細片の胎土が砂粒の多い前期の特徴を示すことから弥生時代前



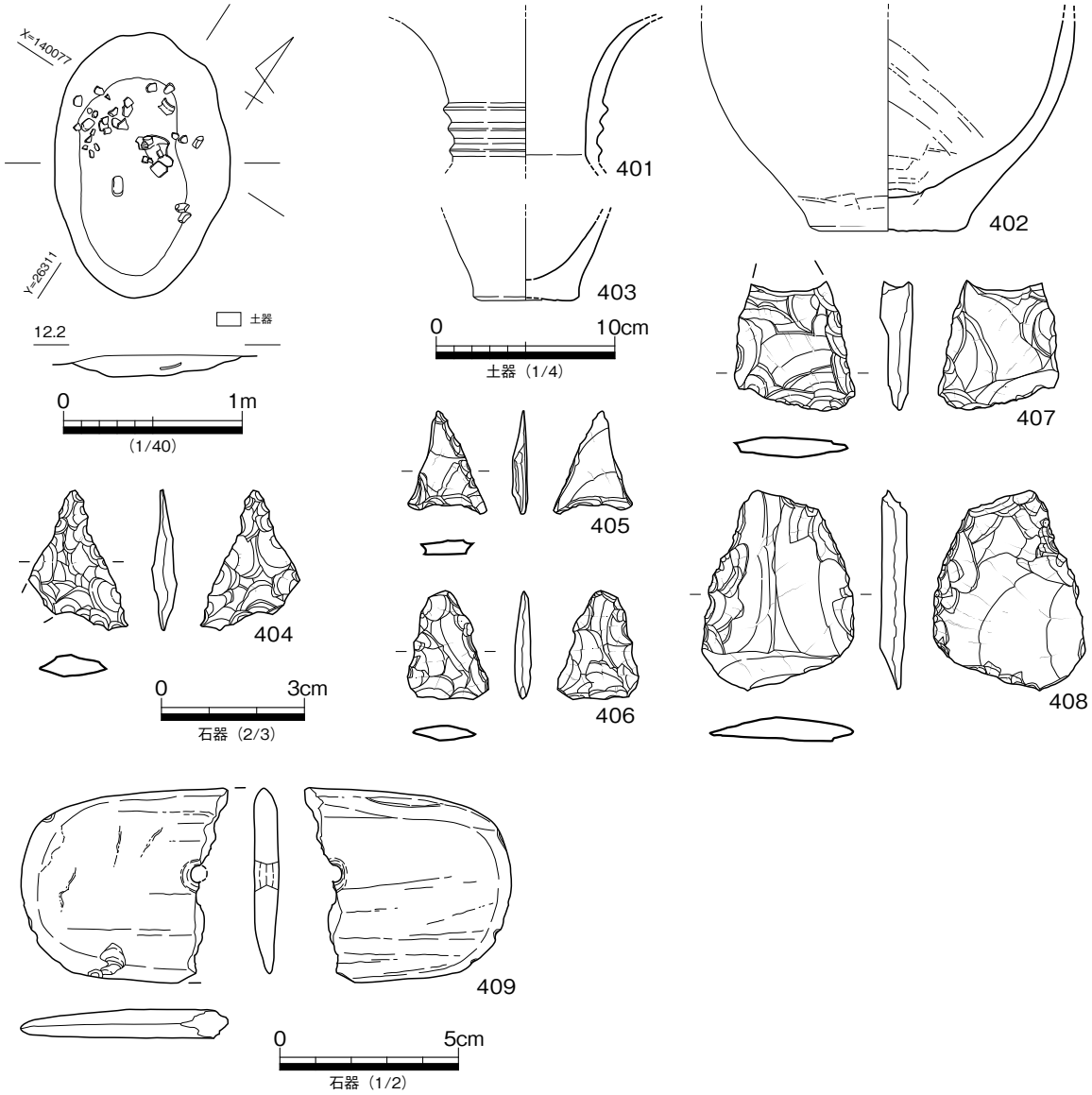
第 65 図　SP Ⅱ 16 ～Ⅱ 19　出土遺物実測図

期の遺構出土と判断したものである。SP Ⅱ 16 の 395 は石核、396（SP Ⅱ 17）、397（SP Ⅱ 18）は凹基式の石鏃、398（SP Ⅱ 18）は形状から凸基式の石鏃の未成品と考える。SP Ⅱ 19 からは完形に近い壷（399）が出土している。出土状況の写真によると破砕して破片となったものが折り重なって埋まっている。SP Ⅱ 19 からは甕の底部（400）も出土している。399 の壷は胴部中央付近に最大径があり、縦に長い楕円形の胴部から頸部中央を境に対称となる形状に外反する口縁となる。頸部中央下側にヘラ描き沈線６条を巡らす。

土坑

SK Ⅱ 01

Ⅱ区（平成７年度調査区）西北隅付近で検出した土坑である。長軸 1.5、短軸 0.92 ｍの楕円形の平面形で、断面形は浅い皿形、深さ 11cmを測る。小ザル１杯分ほどの遺物が拳大以下の砂岩礫多数と共に出土し



第 66 図　SK Ⅱ 01　平・断面図、出土遺物実測図

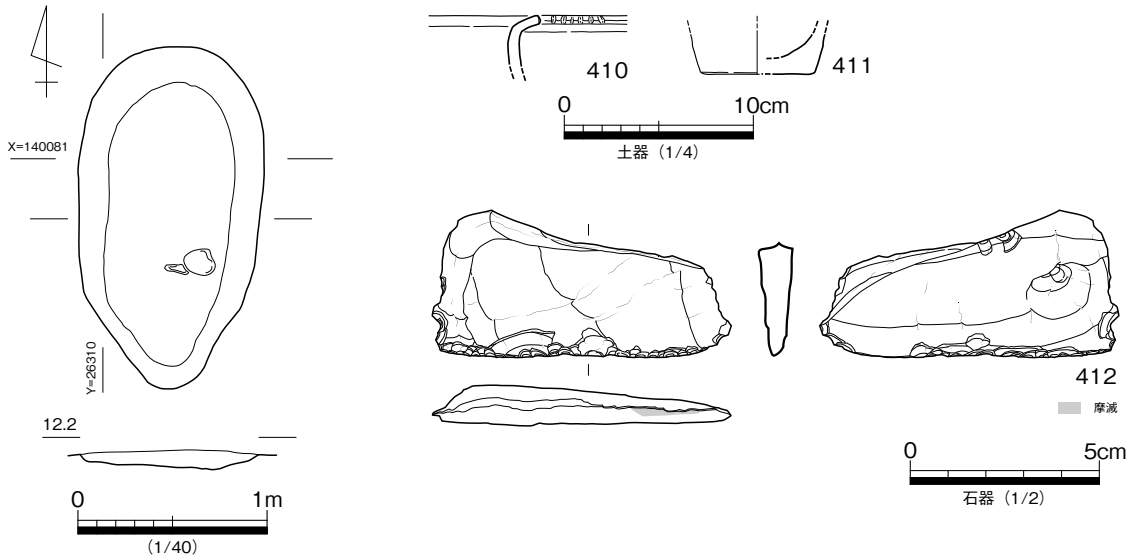
ている。土器片は胎土の特徴からすべて弥生時代前期と見られる。第 66 図 401 ～ 409 は、SK Ⅱ 01 出土の遺物実測図である。401 は壷の頸部である。３条の突帯を巡らせている。402 は壷、403 は甕の底部である。404 は凹基式の石鏃である。405 は両側縁ともに剝片の割れ面の状態で、細部調整の行われていない未成品である。406 は平基式の石鏃。剥離が全体的に粗く、整った形状となっていない。407 は下方から刃部の細部調整中に折損し放棄した未成品と見られる。408 も石鏃の未成品である。各側縁とも片面から押圧剥離を加えているのみである。全体として歪んだ形状であることも未成品と考える根拠である。409 は結晶片岩製の磨製石庖丁の破片である。

SK Ⅱ 01 出土遺物で注目されるのは、石鏃の未成品が複数含まれていることである。未図化遺物には 40 点弱のサヌカイトの剝片、チップが含まれており、石器製作にかかわる不要物を廃棄している可能性が考えられる。東北東に 16 m離れた位置にある SK Ⅱ 03 は後述するように多量のサヌカイトのチップとともに未成品と考えられるものが出土しており、また、東北に 13 m離れた位置にある SK Ⅱ 09 にも多量のサヌカイトのチップが含まれており、弥生時代前期に石器が製作されていた可能性が高いこと

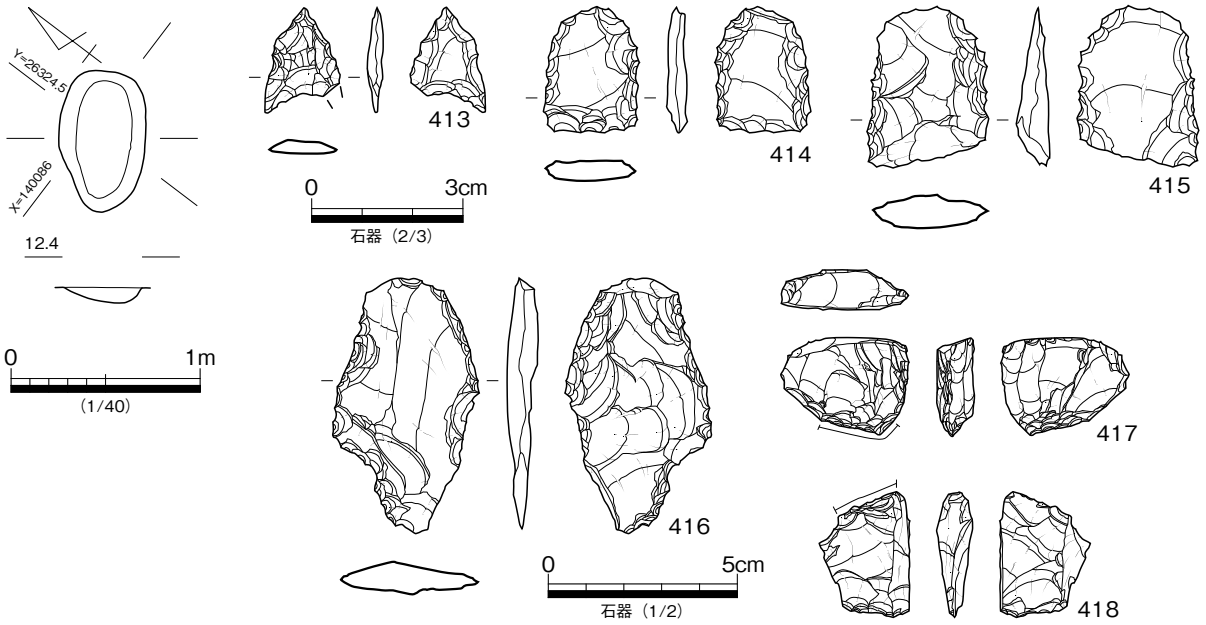
を示している。

SK Ⅱ 02

Ⅱ区（平成７年度調査区）の西北隅付近で検出した土坑である。長軸をほぼ南北方向にむけ、長軸 1.8、短軸 0.9 mの楕円形の平面形、断面形は浅い皿状で深さは 10cmを測る。底は下層の砂礫層が露出する。小破片を主体とする遺物が少量出土している。第 67 図 410 は口縁端部に刻み目を施す如意状口縁の甕、411 は甕の底部である。412 は削器、背面から側縁は剥片の割れ面のままである。また、刃部は潰れている。



第 67 図　SK Ⅱ 02　平・断面図、出土遺物実測図



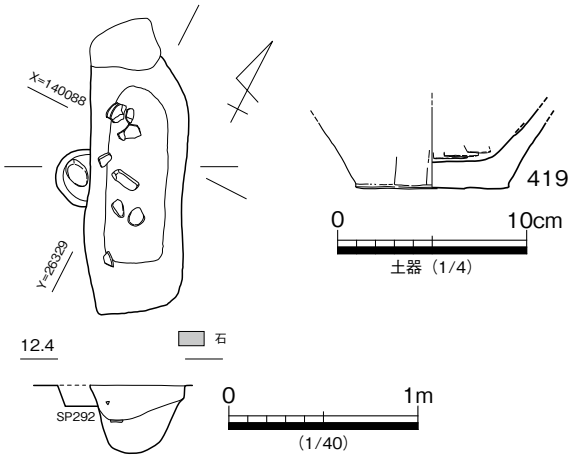
第 68 図　SK Ⅱ 03　平・断面図、出土遺物実測図

SK Ⅱ 03

Ⅱ区（平成７年度調査区）の西北部で検出した土坑である。長軸 74、短軸 43cmの楕円形の平面形で、断面は浅い椀状を呈し、深さ８cmを測る。埋土は粒径２～３cmのベースブロックを少量含む黒褐色粘質シルトの単層である。SK Ⅱ 03からは数点の弥生土器小片と数点の石器および石器未成品のほか、約3,000点のサヌカイトの剥片・チップが出土している。

第 68 図 413 ～ 418 は SK Ⅱ 03 出土の遺物実測図である。413 は凹基式の石鏃、側縁に抉りを入れた五角形鏃である。414、415 は石鏃未成品と考える。414 は先端部の折損、415 は側縁の細部調整中に放棄されたようである。416 は打製石斧とした。基部の側縁は仕上げられているが、刃部が折損している。未成品である可能性もある。417、418 は楔形石器である。417 の打撃痕は不明瞭であるが、下辺に微細な階段状剥離が見られる。418 は上辺に敲打による階段状剥離、刃潰れ、下辺に微細な階段状剥離が見られる。

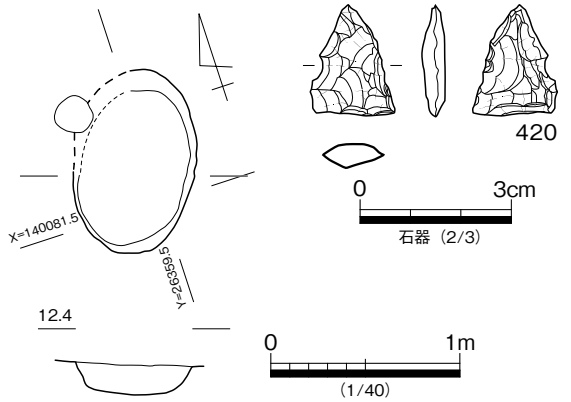
SK Ⅱ 03 は石器製作時に生じた不用物を廃棄した土坑と考えられる。出土土器片から年代を知ることはできないが、近辺において石鏃未成品複数を出土した SK Ⅱ 01 や、剥片・チップを多く検出している SK Ⅱ 09 との類似性から弥生時代前期の遺構と判断できる。なお、出土したサヌカイトチップの石材同定分析を行っている。



第 69 図　SK Ⅱ 04　平・断面図、出土遺物実測図

SK Ⅱ 04

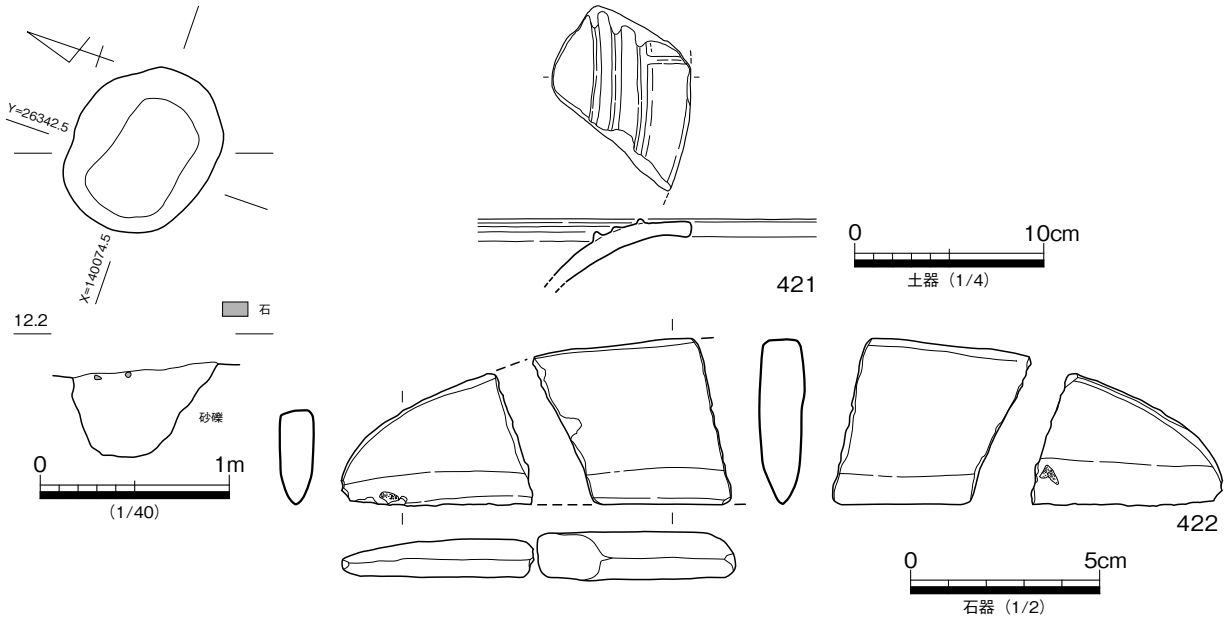
Ⅱ区（平成７年度調査区）西部で検出した土坑である。長辺 155、短辺 50cmの隅丸長方形を呈し、断面形はＵ字形、深さ 35cmを測る。微量の遺物と数点の砂岩亜円礫が出土している。壷底部（第 69 図 419）が出土しており、未図化遺物の様相と合わせ弥生時代前期の遺構と判断する。



第 70 図　SK Ⅱ 05　平・断面図、出土遺物実測図

SK Ⅱ 05

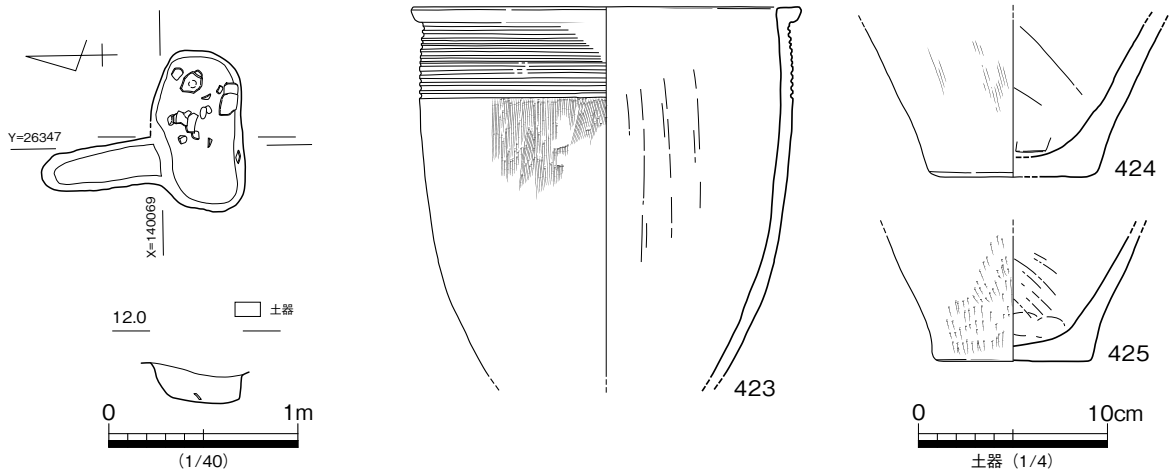
Ⅱ区（平成７年度調査区）東部で検出した土坑である。長軸 94、短軸 60cmの楕円形の平面形で、断面形は浅いＵ字形、深さ 15cmを測る。微量の弥生土器片と石鏃（420）が出土している。第 70 図 420 は平基式の石鏃で、側縁に抉りを入れた五角形鏃である。出土遺物の胎土の様相から弥生時代前期の遺構と判断する。



第 71 図　SK Ⅱ 06　平・断面図、出土遺物実測図

SK Ⅱ 06

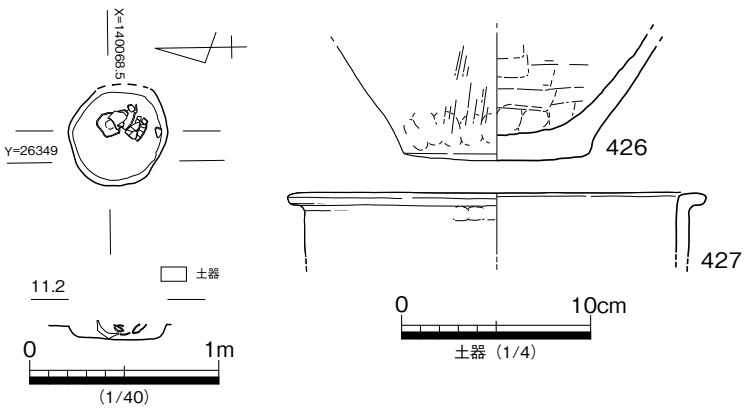
Ⅱ区（平成 7 年度調査区）で検出した土坑である。中世の SD Ⅱ 04 の溝底で検出した。径 80 ～ 98 cmの不整円形の平面形で、断面形は U 字形、深さ 45cmを測る。検出面の 10cmほど下に砂礫層が現れ、この砂礫層を掘り込んでいる。このため微量であるが湧水が見られる。第 71 図 421 は壷の口縁部である。内面に突帯を貼付け文様帯を構成する。422 は半月形の磨製石庖丁の破片である。このほか微量の遺物が出土している。未図化遺物の胎土の様相も合わせて、SK Ⅱ 06 は弥生時代前期の遺構と判断する。



第 72 図　SK Ⅱ 07　平・断面図、出土遺物実測図

SK Ⅱ 07

Ⅱ区（平成 7 年度調査区）南端の SR Ⅱ 02 北岸付近で検出した土坑である。長軸 88、短軸 50cmの楕円形の平面形で、断面形は浅い U 字形、深さ 15cmの規模である。第 72 図 423 ～ 425 は SK Ⅱ 07 出土の遺物実測図である。423 は逆 L 字状口縁の甕で 11 条のヘラ描き沈線を巡らす。424、425 は甕の底部である。このほか 40 片弱の土器細片が出土しているが、胎土の様相から見て弥生時代前期の遺構と判断する。



第 73 図　SK Ⅱ 08　平・断面図、出土遺物実測図

SK Ⅱ 08

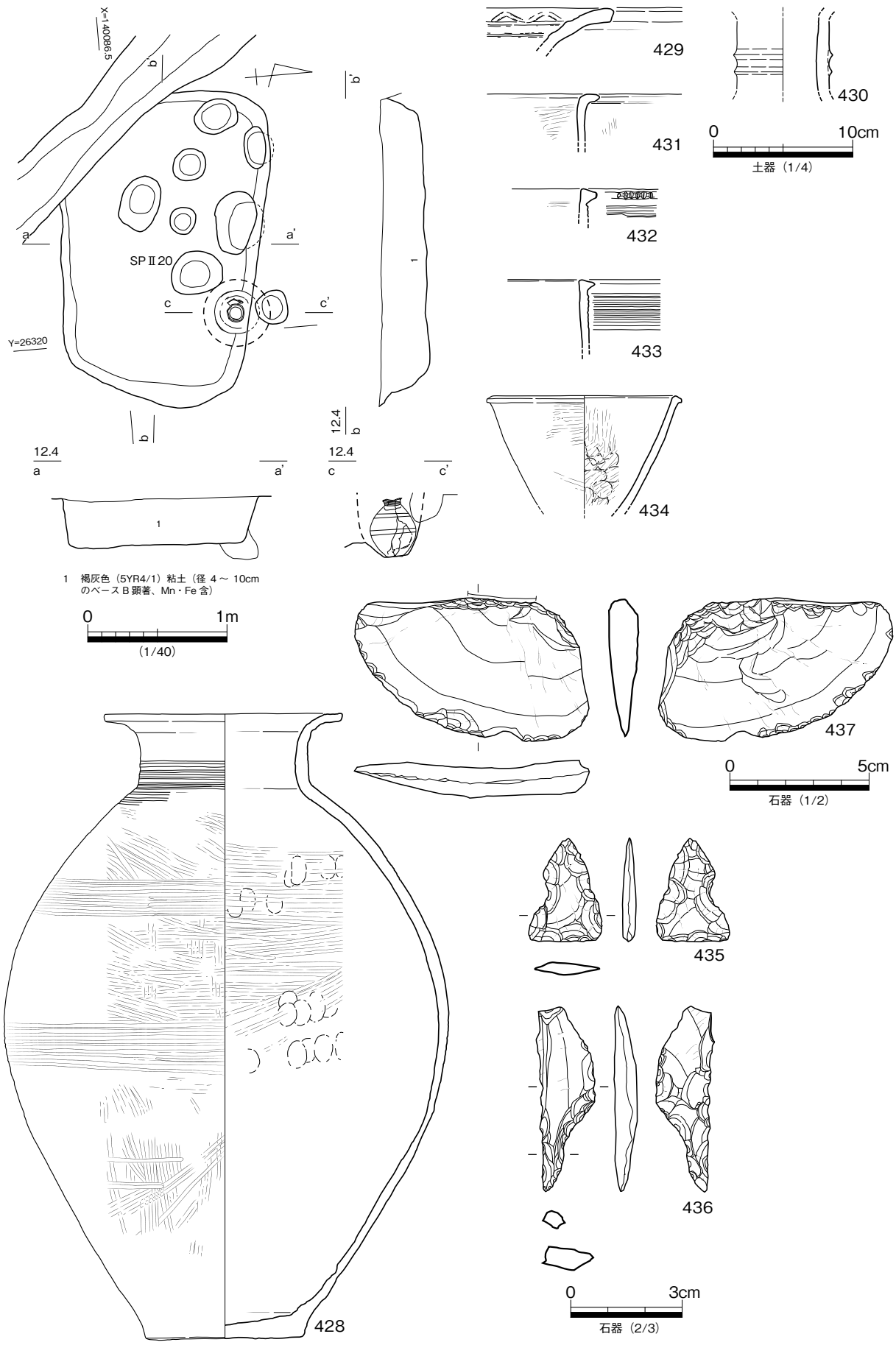
Ⅱ区（平成７年度調査区）の南端の SR Ⅱ 02 北岸付近で検出した土坑である。径 52 ～ 60cmの円形で、断面形は皿状、深さ７cmを測る。壷の底部の上部に甕が破片となって出土している。第 73 図 426 は壷底部、427 は逆Ｌ字状口縁の甕である。このほか少量出土している遺物片から見て弥生時代前期の遺構と判断する。

SK Ⅱ 09

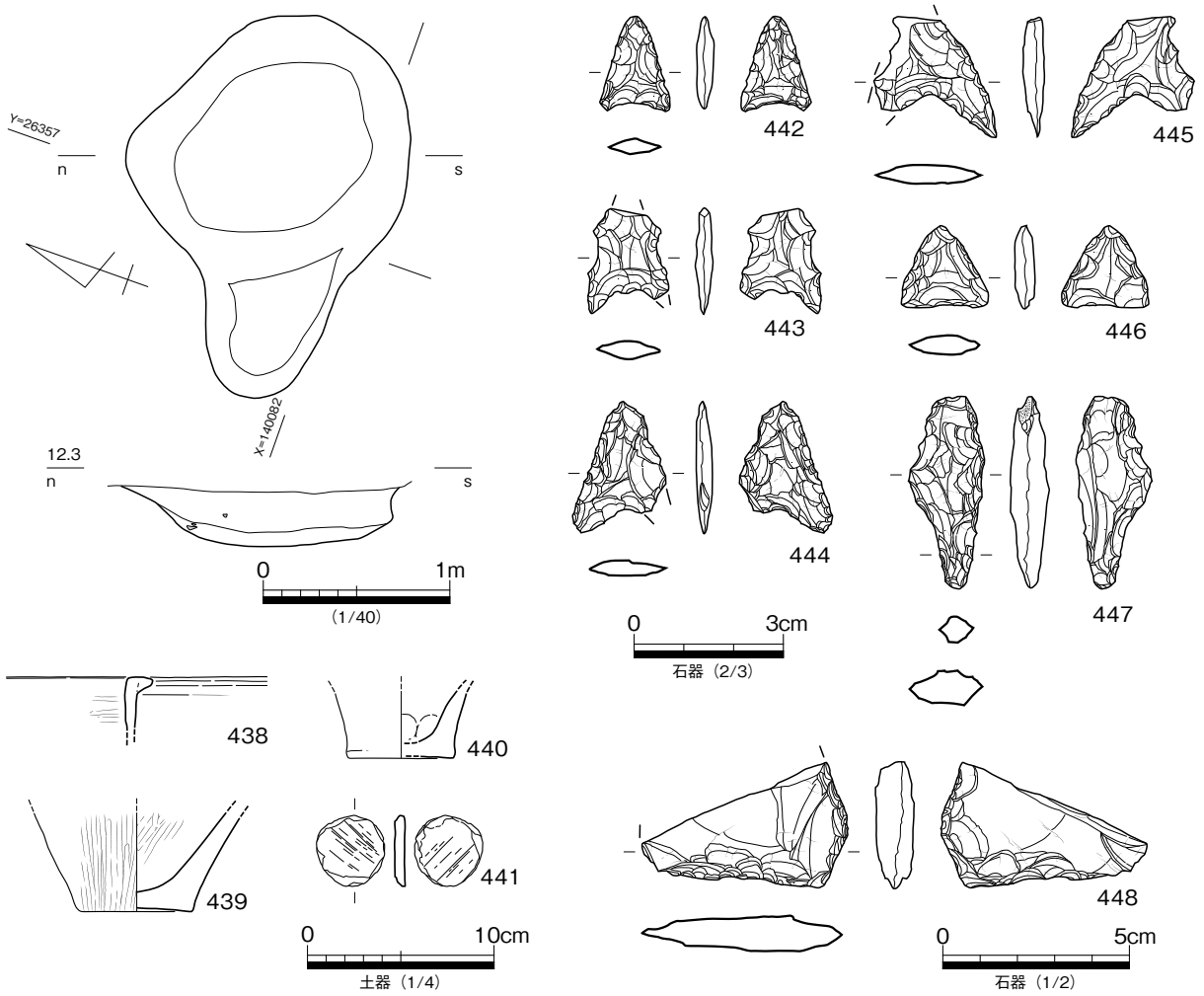
Ⅱ区（平成７年度調査区）の西北部で検出した土坑である。長辺 225、短辺 142cmほどの規模でややいびつな隅丸長方形の平面形である。断面は鋭角の掘り込みで底部が広く水平をなす深い皿状を呈する。深さは 32cmを測る。本土坑の底場から７基のピットを検出している。さらに北辺付近で弥生時代前期の完形の壷が据え置かれた状態で出土している（428）。この土器も底場を 10cmほど掘り込んで据えられていることからピットに伴うと考えられる。全体で小ザル一杯ほどの弥生土器細片が出土しているほか、約 860 点に及ぶサヌカイトの剥片・チップが出土している。土器片の胎土は弥生時代前期の様相を示す。

SK Ⅱ 09 のように検出段階で土坑と認識したものを掘り上げると複数のピットが検出されるものが弥生時代前期の遺構に見られるが、本例は石器製作に係る不要物を廃棄した土坑という性格も合わせもつようである。

第 74 図 428 ～ 437 は SK Ⅱ 09 出土の遺物実測図である。428 は先述した完形の壷である。頸部は直立し短く外反する口縁を有する。胴部最大径は中位にあり、頸部と同程度の径の平底の底部をもつ。胴部は長胴である。頸胴部の境界に５条ほど、胴部最大径部に８条、両者の中間の肩部に７条のヘラ描き沈線を巡らせている。429 は口縁内面に２条の突帯を貼付け、その外周にヘラ描きによる鋸歯文を描く壷である。430 は頸部に２条の突帯を付す壷、431 は逆Ｌ字状口縁の甕である。431 は土坑底で検出した SP Ⅱ 20 から出土した。434 は鉢である。435 は平基式の石鏃、436 は石錐、437 は外湾する刃部をもつ削器である。



第 74 図　SK Ⅱ 09　平・断面図、出土遺物実測図



第 75 図　SX Ⅱ 01　平・断面図、出土遺物実測図

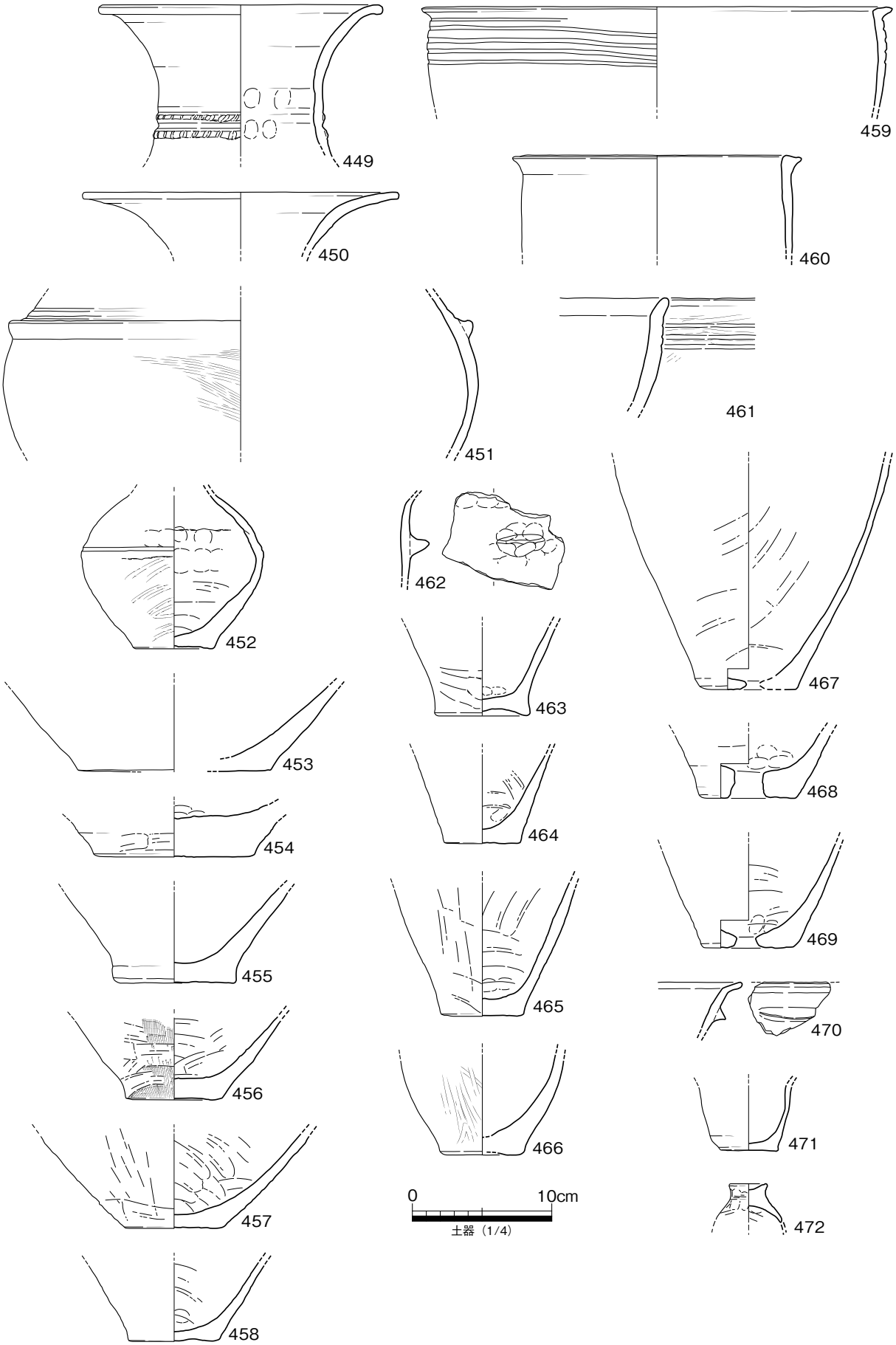
その他の遺構

SX Ⅱ 01

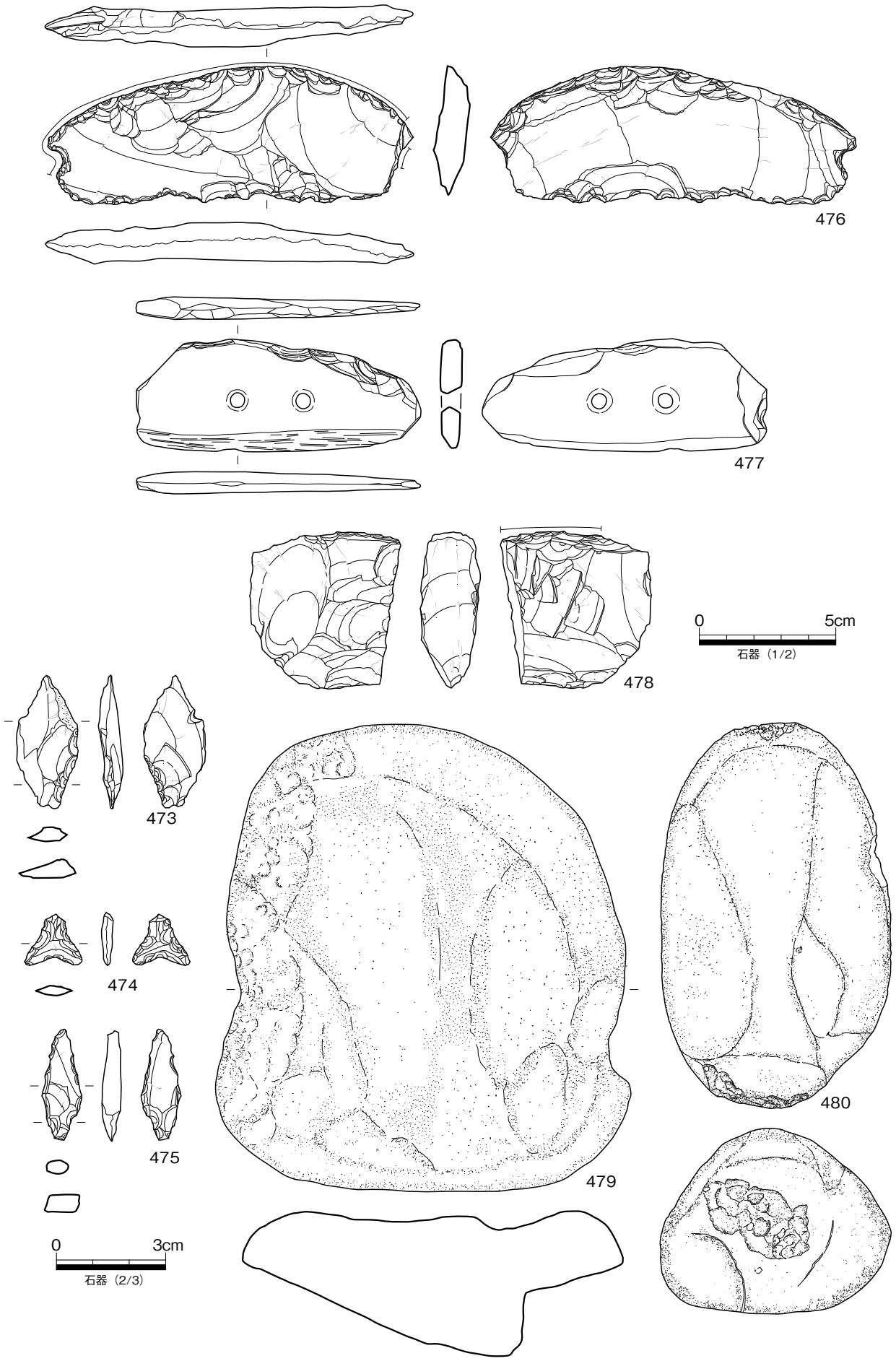
Ⅱ区（平成７年度調査区）で検出した落ち込みである。長軸 150、短軸 120cmほどの楕円形の落ち込みの西側に長さ 80、幅 70cmほどの突出が付く平面形である。断面形は浅い椀状で、楕円形部で 30、突出部で 12cmほどの深さである。図化した遺物のほかに微量の土器片が出土しているが、弥生時代前期の遺構と判断する。

第 75 図 438 ～ 448 は SX Ⅱ 01 出土の遺物実測図である。438 ～ 440 は甕、441 は円盤状土製品である。442 ～ 446 は石鏃、443 は側縁に抉りを入れた五角形鏃である。447 は、一側縁は割れ面をそのまま利用した石錐である。448 の下辺は階段状剥離が卓越するが、摩滅が見られることから打製石斧の刃部と考える。

第 76 図　SX Ⅱ 02　平・断面図



第 77 図　SX Ⅱ 02　出土遺物実測図 (1)



第 78 図　SX Ⅱ 02　出土遺物実測図 (2)

SX Ⅱ 02

SX Ⅱ 03 の西側に位置する不整形の落ち込み (第 76 図）である。長軸約 11 m、短軸約５ｍの不整形な隅丸長方形の平面形で、深さ 10 ～ 30㎝ほどの規模である。28㍑コンテナ８箱分の遺物と拳大以下の砂岩亜円礫多数を包含する。遺物の出土に偏在する傾向は無く、全体に破片が散在する様相である。

第 77、78 図 449 ～ 480 は SX Ⅱ 02 出土の遺物実測図である。449、450 は広口壷、449 は頸部に刻み目のある突帯２条を貼り付けている。451 は壷の胴部である。最大径より上位に突帯を貼付け、その上位に２条以上のヘラ描き沈線を巡らせている。459 ～ 462 は甕の口縁部である。461 の口縁端部は剥落している。462 は口縁直下に把手状の小突起を付している。470 も把手状の小突起を付すもので、鉢と考える。471 も鉢、472 はミニチュアの台付鉢である。473 は石鏃の未成品、476 は背部が円弧状をなす打製石庖丁である。477 は磨製石庖丁、478 は上辺に顕著な潰れ、下辺には鋭利な刃部の一部に微細な階段状剥離が見られることから楔形石器とした。なお、形状から打製石斧の基部が転用されていると思われる。479 は凹石である。偏平な砂岩亜円礫の中央部に凹みが見られる。480 は砂岩亜円礫の敲石である。

SX Ⅱ 02 も、SX Ⅱ 03 と同様に落ち込みに遺物や自然石を投棄した性格が推定できる。

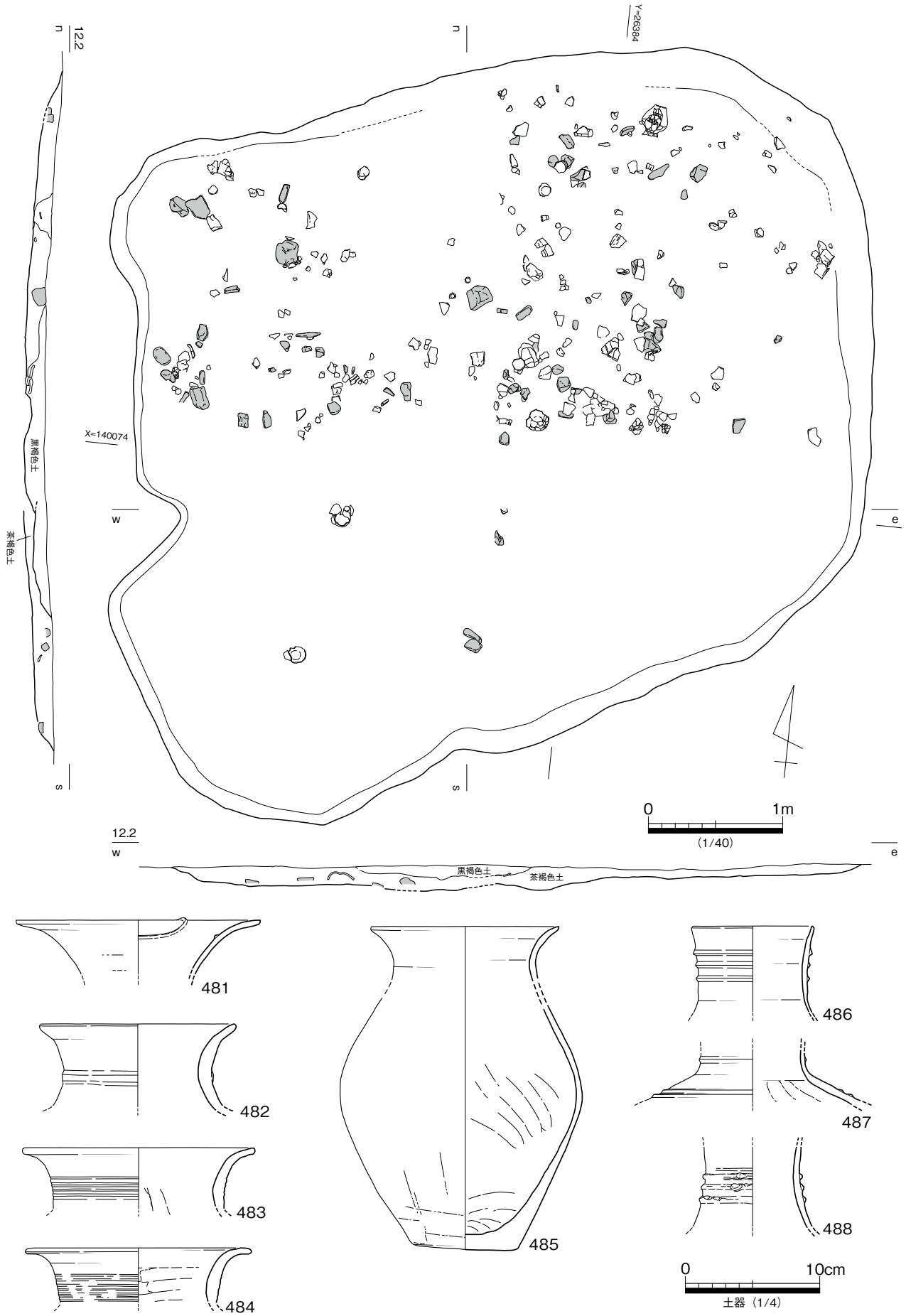
SX Ⅱ 03

Ⅱ区の東部では、平面形が整わず、浅い落ち込みを２基並んで検出している。このうち東側のものは、東辺を上底、西辺を下底とする不整形な隅丸台形の平面形を呈する。東辺 3.5、西辺 5.0、東西幅 5.5 m ほどの規模である。断面形は非常に浅い皿状で、深さは 10 ～ 15㎝程度である。SX Ⅱ 03 には北半部を中心に完形の土器や石器を含む遺物と拳大の砂岩亜円礫多数を検出している。出土遺物量は 28㍑コンテナ５箱である。

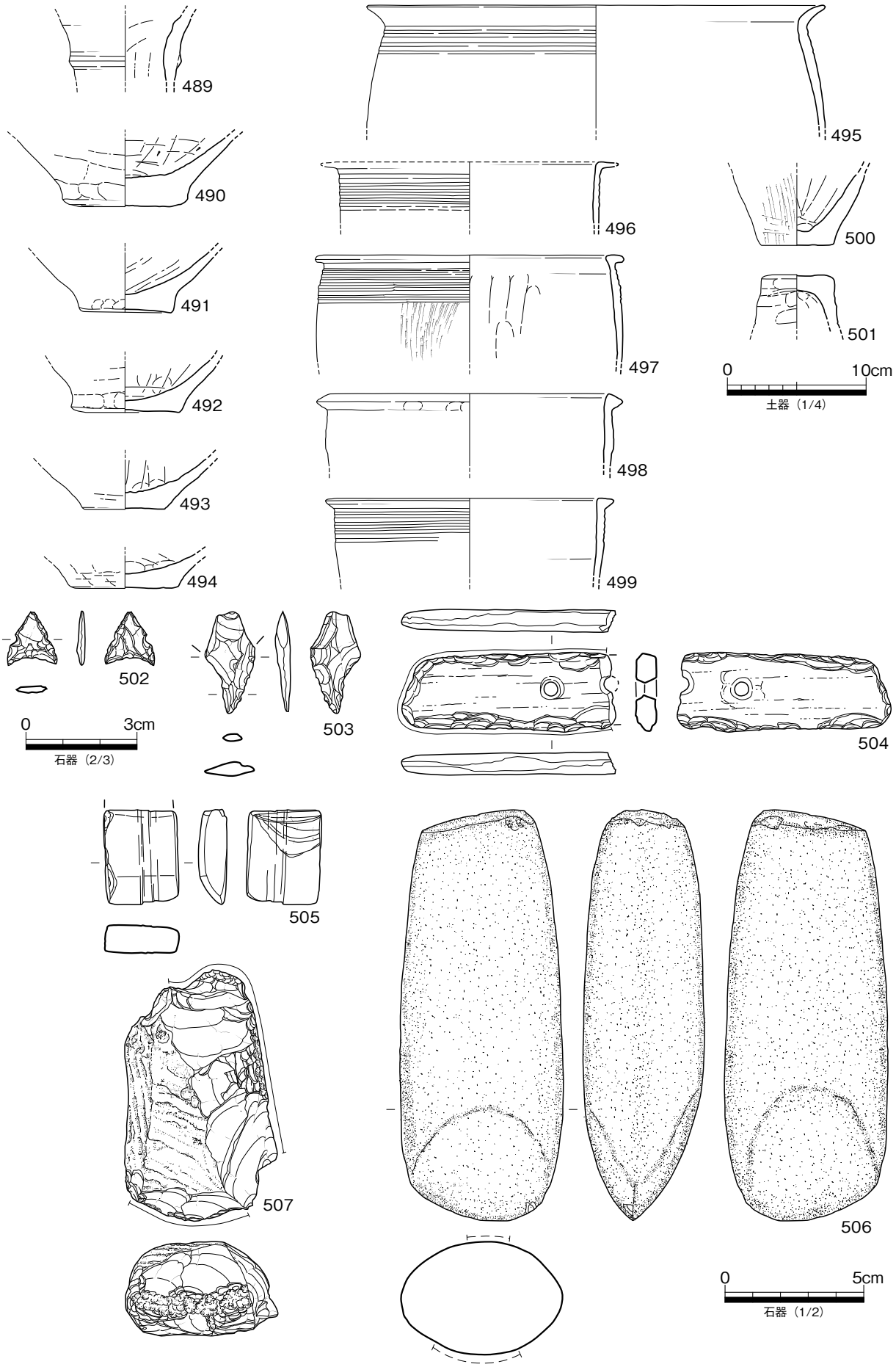
第 79 図 481 ～ 485 は広口壷である。481 は口縁部内面に貼付け突帯による文様帯が見られる。482 は頸部に幅広の貼付け突帯を１条巡らせている。483 は頸部に５条以上、484 は７条以上のヘラ描き沈線が巡る。485 はほぼ完形で出土したもので、胴部中位に最大径をもち、明瞭な頸部をもたずに短く開く口縁に移行している。486 は短頸壷である。３条の貼付け突帯を巡らせている。487 は胴部に比し細い頸部を有する長頸壷である。胴部上半に２条、頸部に１条（現状）の貼付け突帯が巡る。488 も長頸壷の頸部と思われる。刻み目のある貼付け突帯を３条巡らせている。第 80 図 495 ～ 499 は甕の口縁部である。495 が如意状口縁であるほかは逆Ｌ字状口縁、沈線はすべてヘラ描きである。

502 は側縁に抉りを入れた五角形鏃、503 は石錐、504 は緑泥片岩製の石庖丁である。504 の背面と刃部は剥離によって整形する。505 は緑泥岩製の扁平片刃石斧、506 は厚さ 4.1㎝を測る太型蛤刃石斧である。507 はサヌカイトの敲石。短側面の上下辺と一長側縁が潰れている。第 81 図 508 ～ 510 は石核とした。511 ～ 513 は砂岩亜円礫の敲石である。

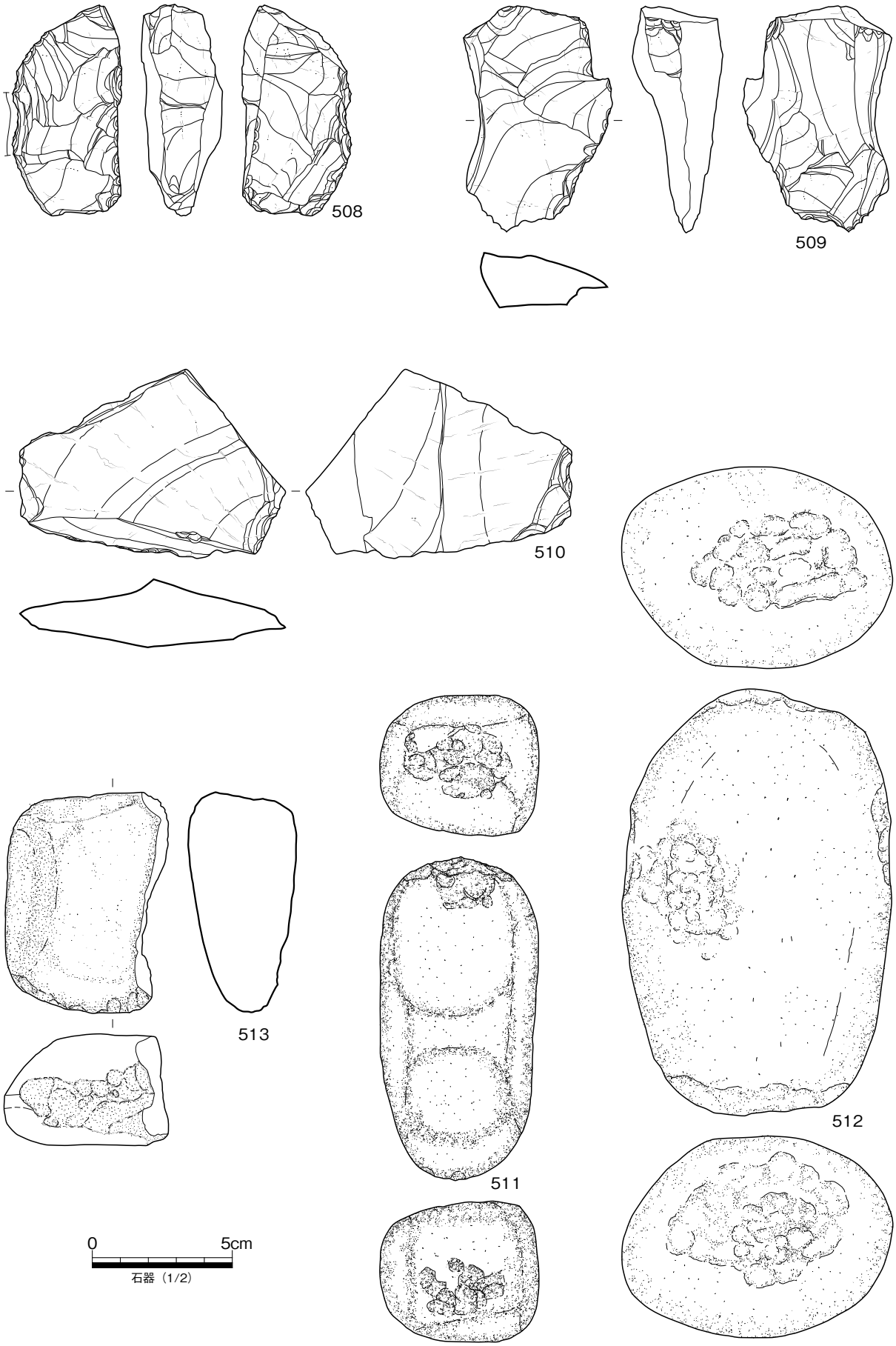
SX Ⅱ 03 は、北半部に遺物および自然石が集中する様子が見られることから、微高地にあたる北側から遺物を落ち込みに廃棄した性格を推定できる。遺物は長頸壷や短頸壷が含まれることから真鍋Ⅰ -5 期に所属する。



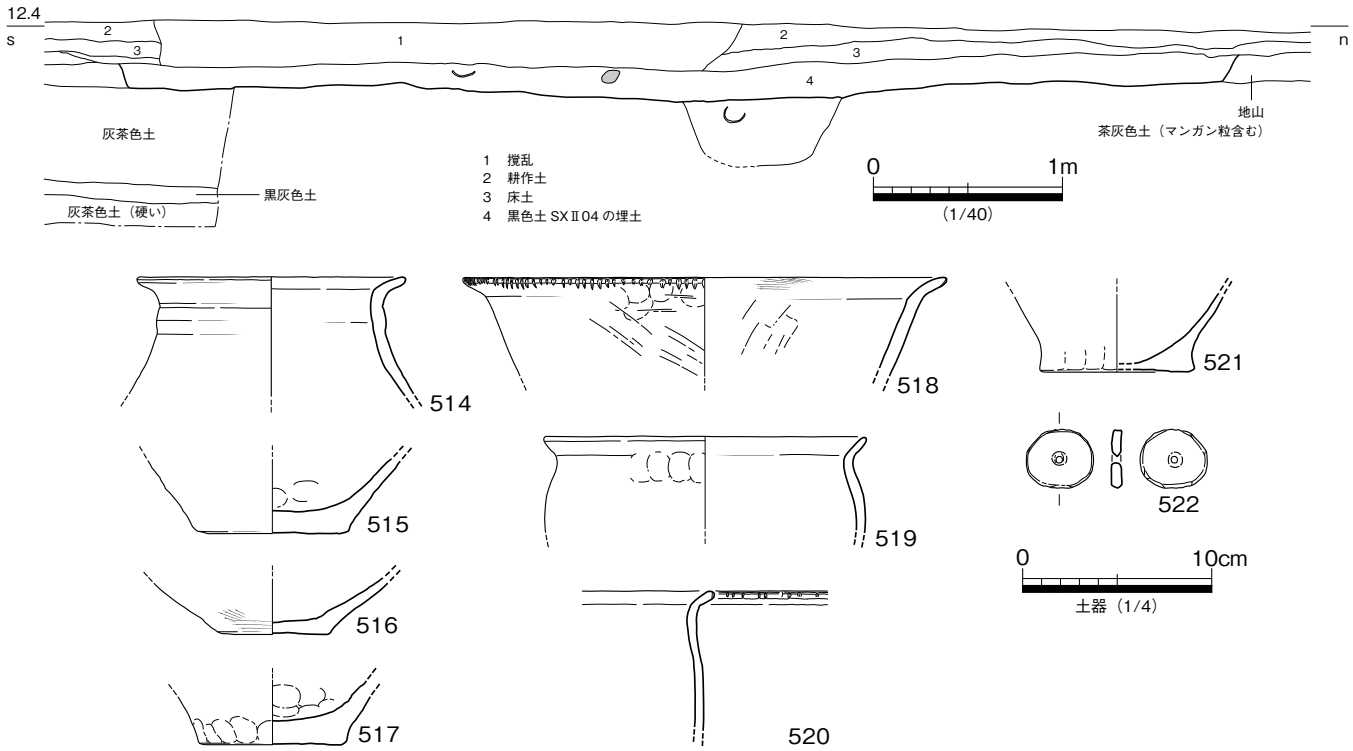
第 79 図　SX Ⅱ 03　平・断面図、出土遺物実測図 (1)



第 80 図　SX Ⅱ 03　出土遺物実測図 (2)



第 81 図　SX Ⅱ 03　出土遺物実測図 (3)



第 82 図　SX Ⅱ 04　断面図、出土遺物実測図 (1)

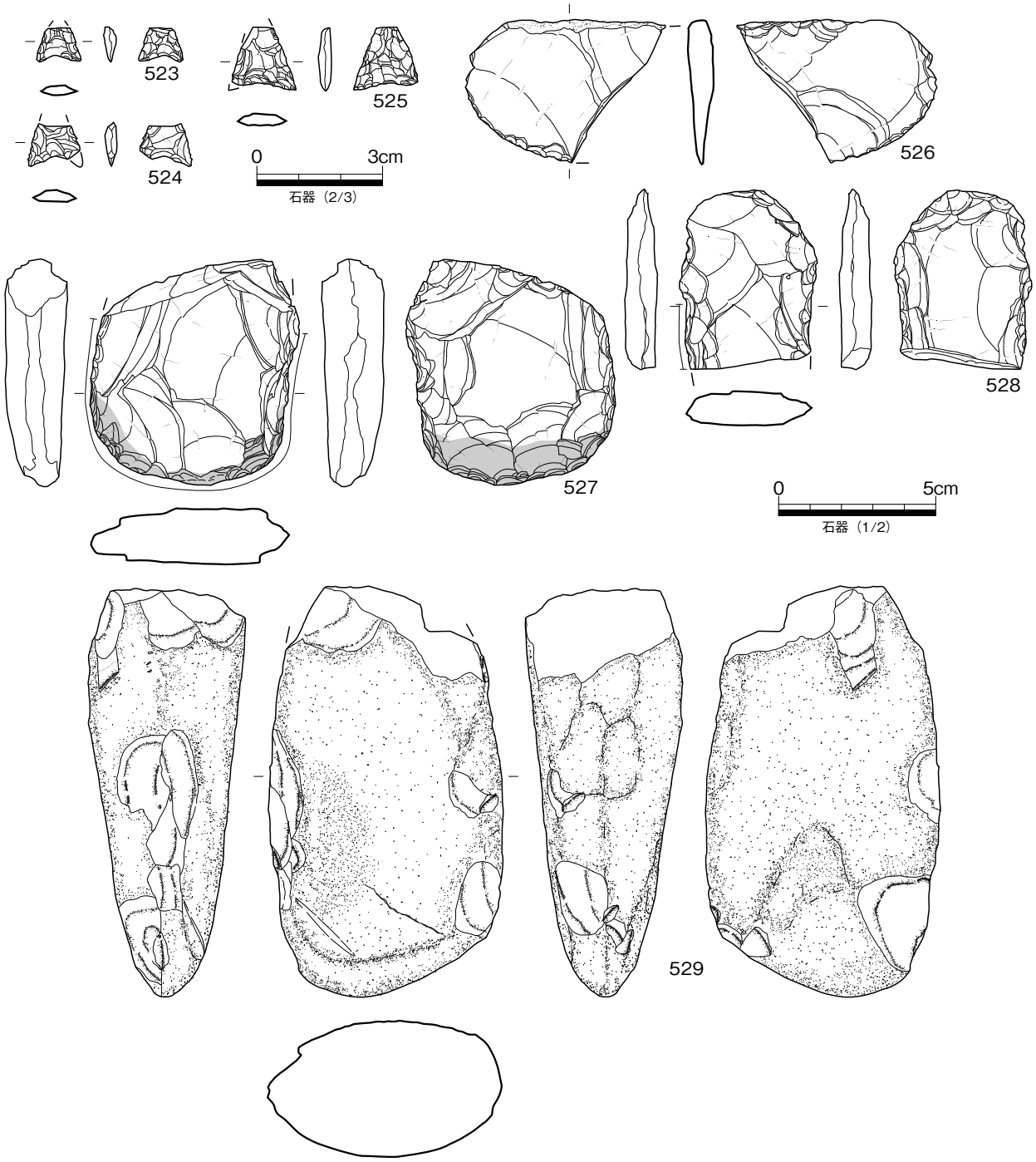
SX Ⅱ 04

Ⅱ区（平成６年度調査区）で検出した落ち込みである。平成６年度調査では方形の掘り込みの可能性を考えて調査しているが、平成７年度調査では包含層として調査している。平成７年度に調査した西側は急速に浅くなり、面的に把握できなかったようである。平成６年度調査では東辺で 5.6 m、南辺で３m以上の隅丸方形をなす平面形が確認されている。ただし平面形状は整った形態ではない。深さは 15 cmほどで、断面形は浅い皿状、底部は水平ではなくわずかに凹凸がある。黒色土で埋まっていた。28㍑コンテナ１箱ほどの遺物と拳大以下の砂岩亜円礫多数とともに破片が散在する状況で出土している。

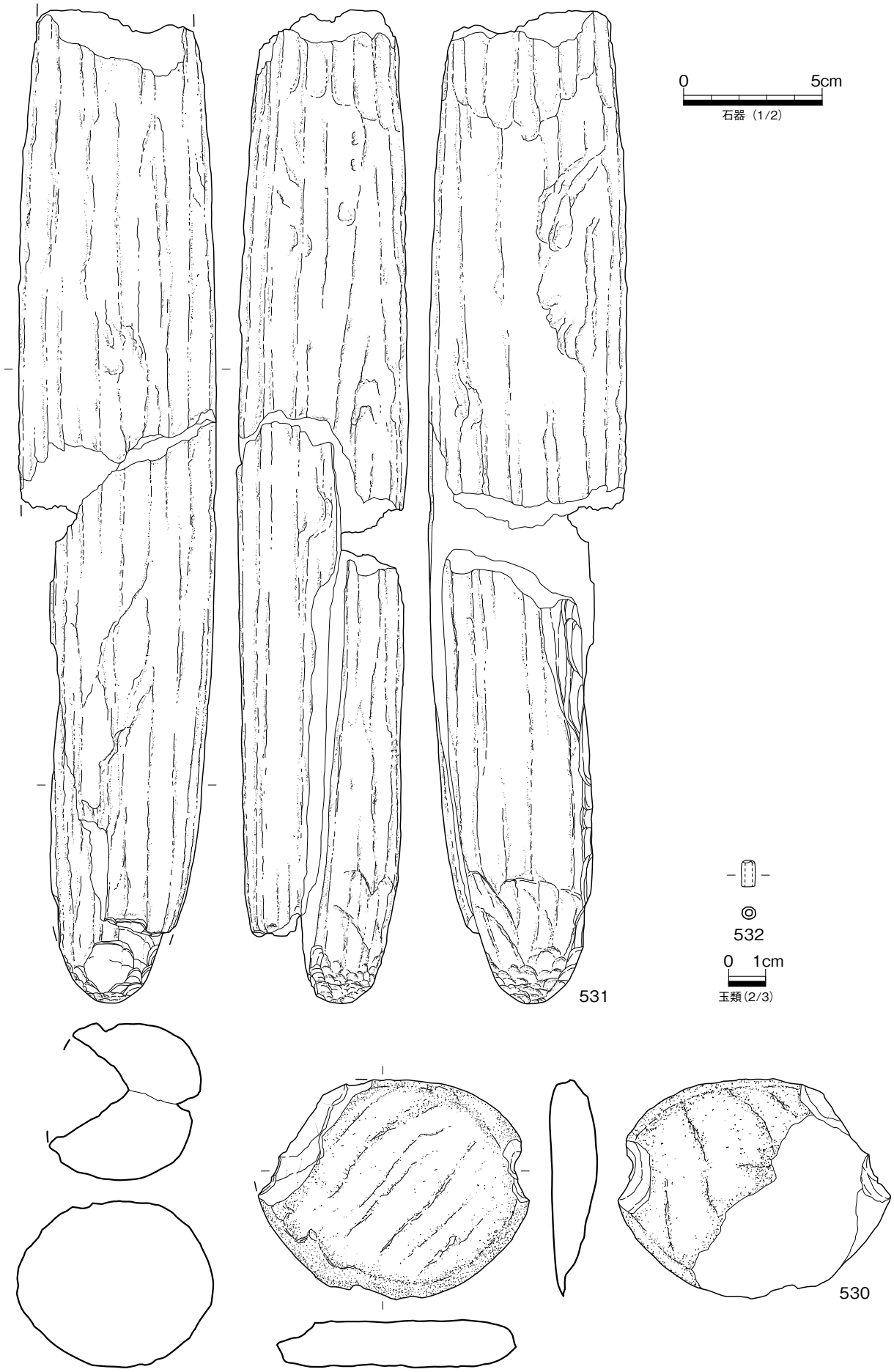
第 82 ～ 84 図 514 ～ 532 は SX Ⅱ 04 出土の遺物実測図である。514 の壷は頸部に突帯を削り出している。518 は尖り気味の口縁端部に刻み目を施す甕である。522 は紡錘車である。526 は側縁に矮小な抉りを入れていることから打製石庖丁とする。527、528 は打製石斧の破片、529 は厚さ 4.3cm以上の砂岩製の太型蛤刃石斧である。530 は緑泥片岩製の石錘である。偏平な亜円礫を利用し、両側縁に抉りを入れている。531 は緑泥片岩製の石棒である。先端部も一部遺存している。本資料は SX Ⅱ 04、SR Ⅱ 02 上層およびⅣ区スタジアム部分の弥生時代の包含層の上面で出土した破片が接合した。Ⅳ区スタジアム部分の詳細は不明であるものの、SR Ⅱ 02 上層は弥生時代前期の堆積層であり、弥生時代前期の段階で破片となったものが、最大で 70 mほど離れて埋没していることがわかる。また、管玉（532）１点が出土している。

第 85 図 533 ～ 541 は、平成７年度調査区の SX Ⅱ 04 相当層から出土した遺物実測図である。口縁端部に刻み目を施した如意状口縁の甕（533、534）、逆Ｌ字状口縁の甕などが出土している。540 は刃部に摩滅の見られる打製石斧の刃部、541 は石核と考える。

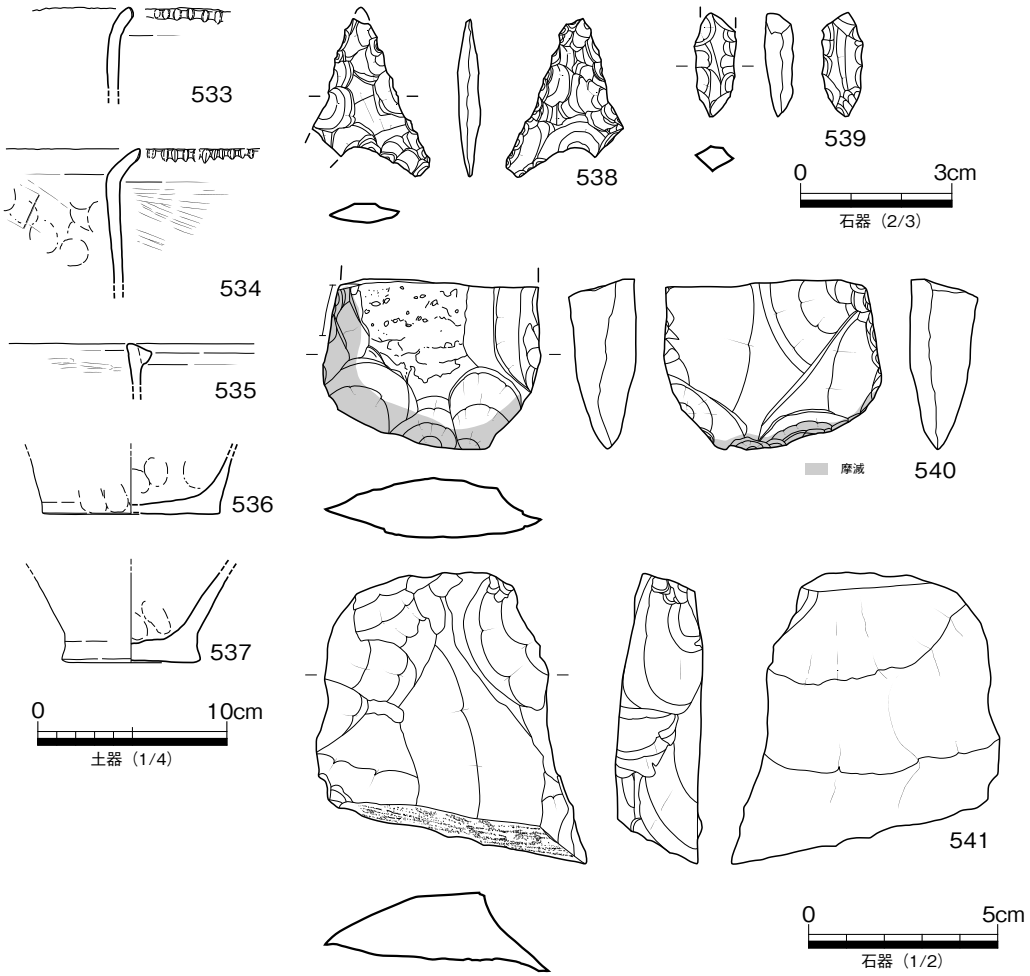
SX Ⅱ 04 も何らかの人為的な掘り込みに、遺物や自然石を廃棄した性格が想定される。



第 83 図　SX Ⅱ 04　出土遺物実測図 (2)



第 84 図　SX Ⅱ 04　出土遺物実測図 (3)

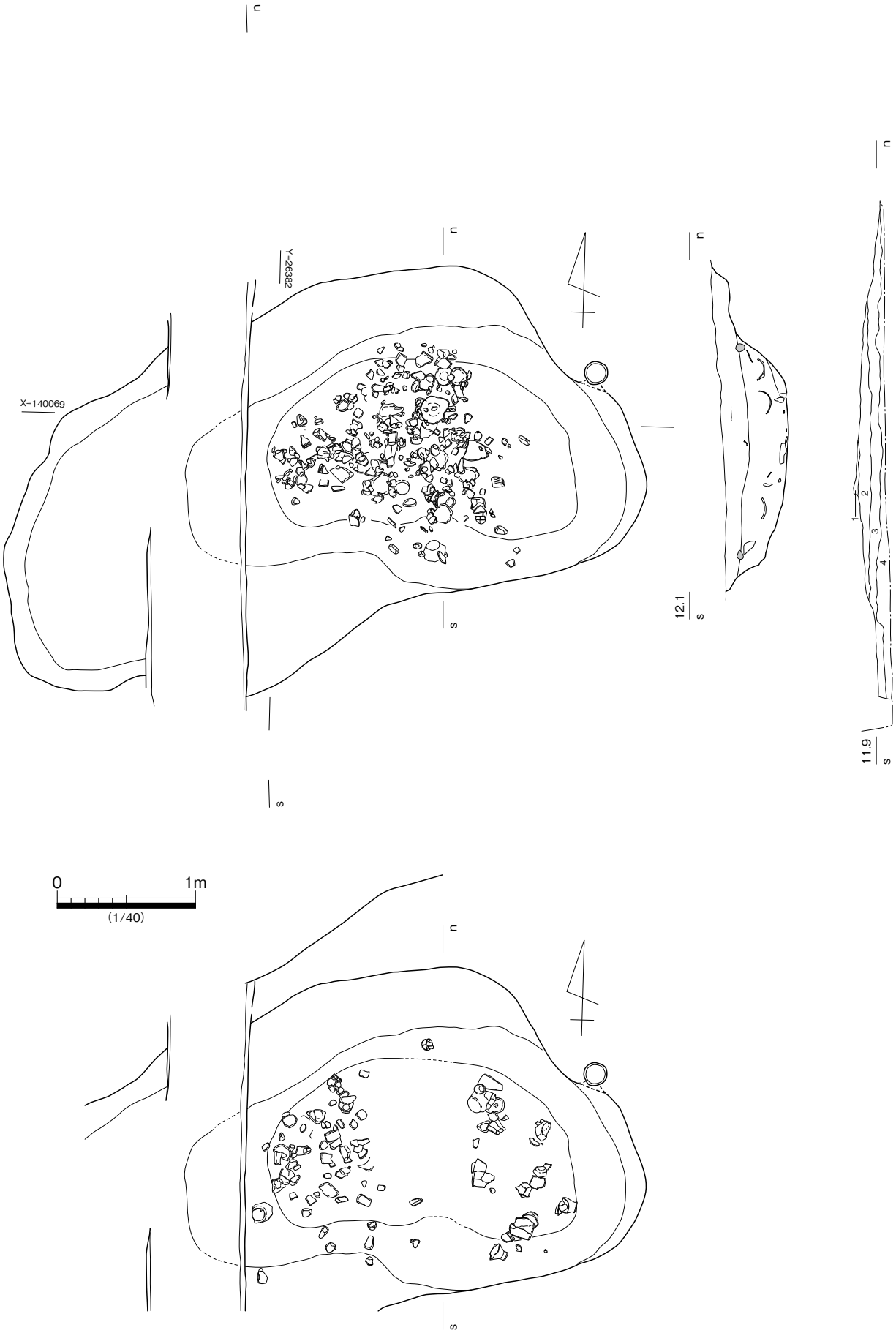


第 85 図　SX Ⅱ 04　出土遺物実測図 (4)

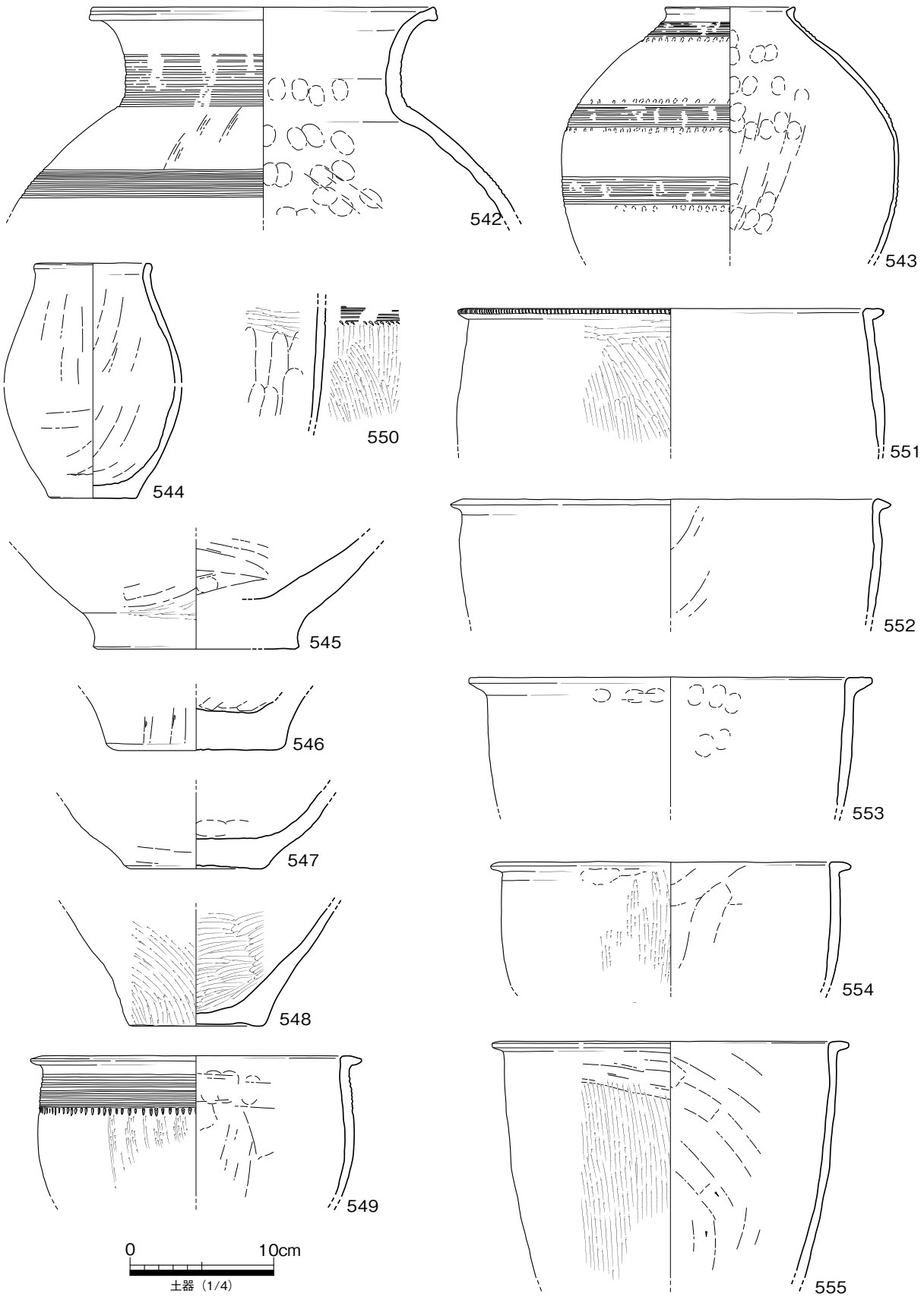
SX Ⅱ 05

Ⅱ区（平成７年度調査区）南半の SR Ⅱ 02 北側で検出した落ち込み (第 86 図）である。長軸 4.7、短軸 2.3 mほどのソラ豆のような平面形の落ち込みの東側に、長軸 3.3、短軸 1.9 mほどの楕円形の落ち込みが重複する。断面は上部が浅い皿状で深さ 40cmほど、下部が椀状で深さ 53cmを測る。SX Ⅱ 05 からは土器破片、石器、自然礫が多量に出土した。土器は破片が多く、土器と石器合わせて 28㍑コンテナ７箱出土している。

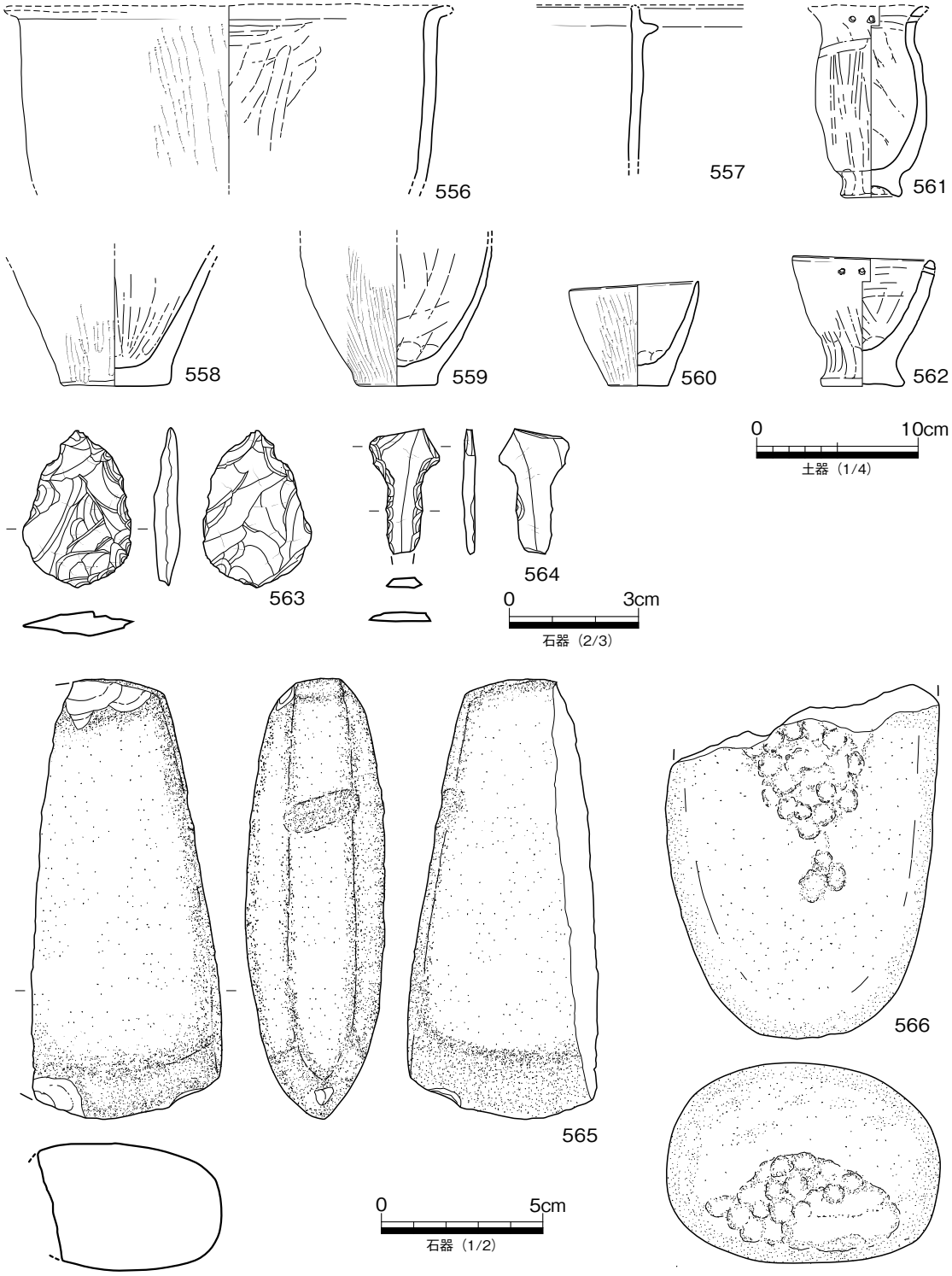
第 87 ～ 89 図 542 ～ 567 は下層出土の遺物実測図である。542 ～ 548 は壷である。542 は広口壷で、胴部から直立気味の頸部、短く外反して端部をわずかに肥厚させている。端部に１条、頸部に 11 条、胴部上半に８条の多条化したヘラ描き沈線を巡らせている。543 は無頸壷である。球状の胴部からわずかに摘み上げて口縁部をつくる。口縁部下と、胴部最大径付近の上下に櫛描き直線文と刺突列点文からなる文様を巡らせている。544 は胴部中央付近に最大径をもつが、あまり胴は張らない。胴部からわずかに外反する口縁をもつ。549 ～ 559 は甕である。550 は胴部の破片で櫛描き直線文を施す。560 は平底からやや急な角度で外傾する胴部でそのまま口縁に至る鉢、561 は台付小壷とした。上げ底、側面を指押さえし円柱状の底部をつくる。円筒状の胴部からわずかに外反する口縁をもつ。口縁直下に並列



第 86 図　SX Ⅱ 05　平・断面図



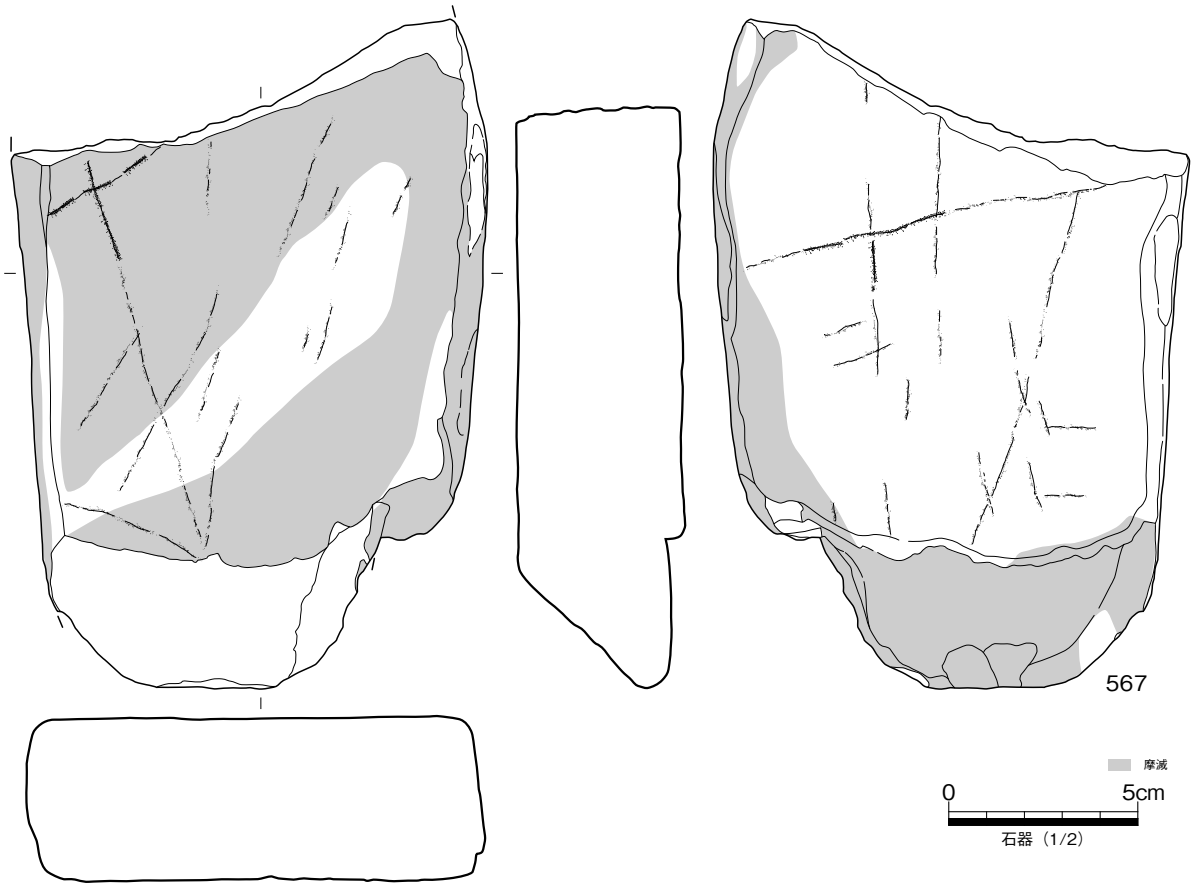
第 87 図　SX Ⅱ 05 下層　出土遺物実測図 (1)



第 88 図　SX Ⅱ 05 下層　出土遺物実測図 (2)

する２個の穿孔がある。562 は横方向に突出し肥厚する底部から急角度で外傾する胴部をもち、口縁はそのままおさめる台付鉢である。口縁直下に並列する２個の穿孔がある。563 は無茎の凸基式石鏃であるが、先端部の剥離が不充分であるため未成品と考える。565 は厚さ 3.9㎝を測る太型蛤刃石斧である。一側縁は折損する。566 は砂岩の敲石、567 は砂岩の砥石である。表裏面に砥面がある。

第 90、91 図 568 ～ 590 は上層出土の遺物実測図である。568 ～ 572 は壷である。568 は頸部の破片

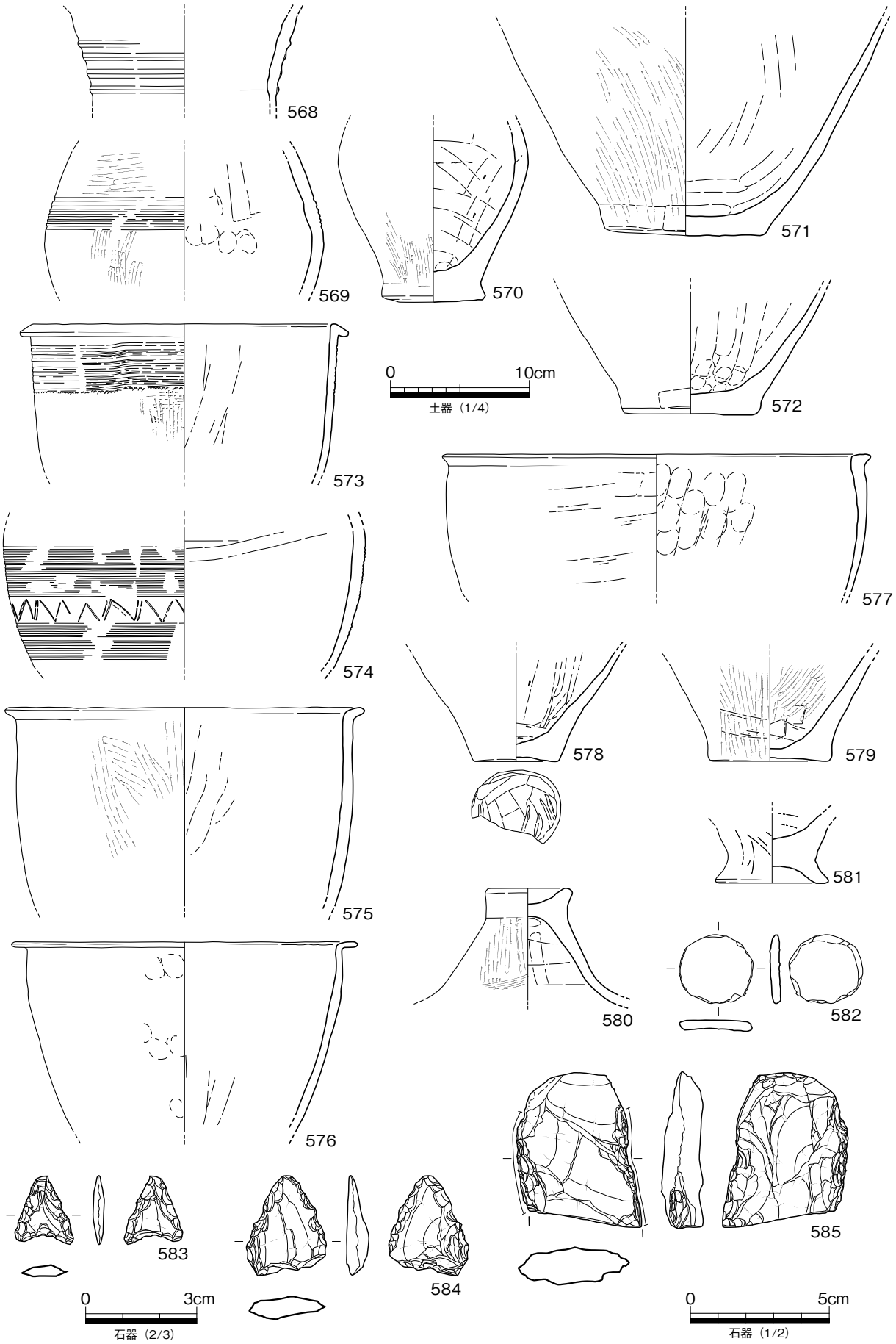


第 89 図　SX Ⅱ 05 下層　出土遺物実測図 (3)

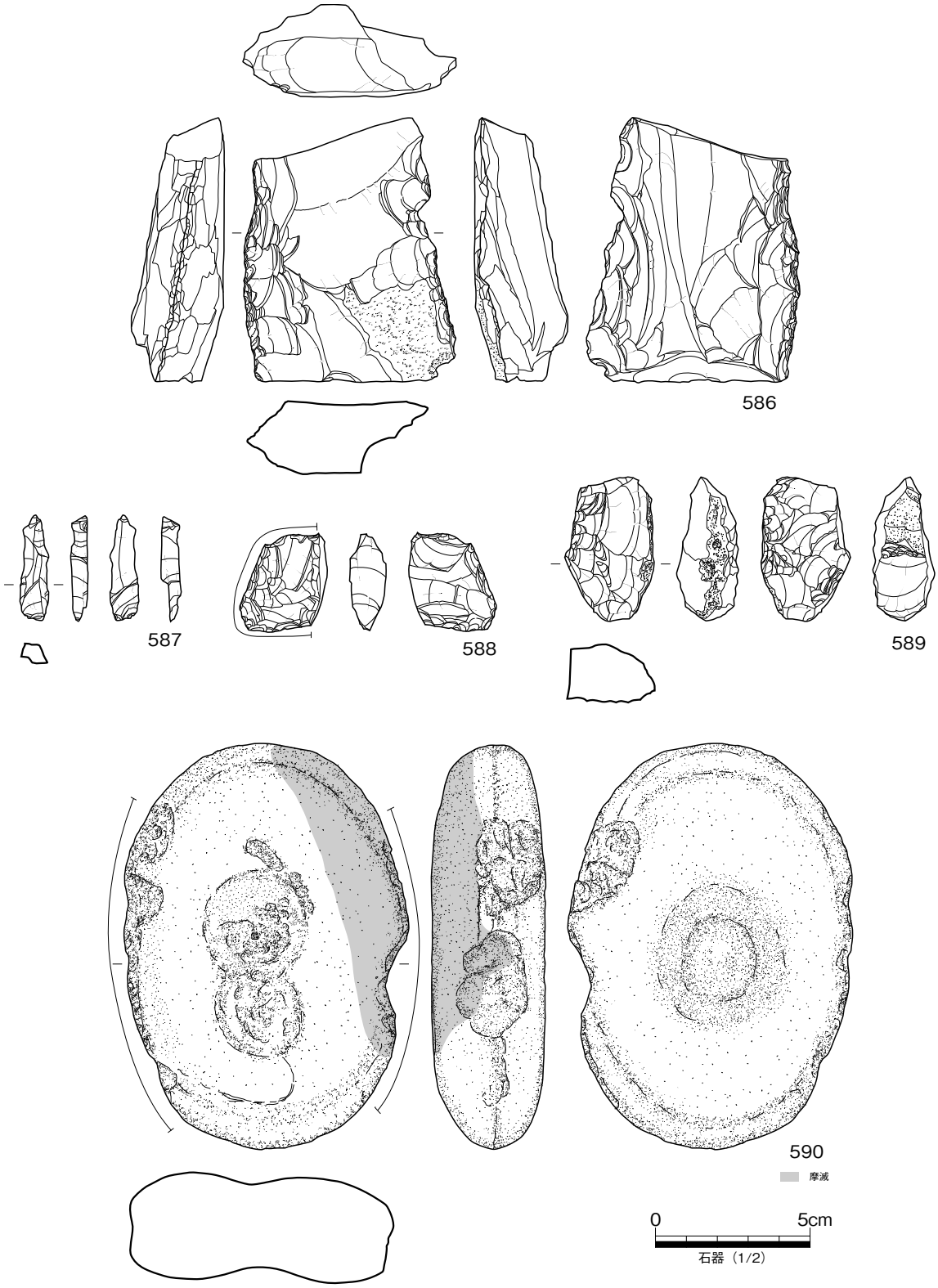
で、貼付け突帯 4 条以上を巡らせている。569 は胴部の破片、最大径より上位に 6 条のヘラ描き沈線を巡らす。573 から 579 は甕である。573 は逆 L 字状口縁で、櫛描き直線文、刺突列点文を巡らせている。574 は胴部の破片、櫛描き直線文と山形文が施されている。580 は蓋形土器、581 は杯部との接合部から「ハ」字形に開き端部を丸くおさめる高杯の脚部である。

584 は一部剥離の不充分な部分があることから未成品と考える。586 も一側縁は丁寧に整形しており、打製石斧未成品と考える。587、588 は楔形石器、589 は貝殻状の割れ口から石英（水晶）を打ち欠いたもので、石核とした。590 は偏平な砂岩亜円礫の凹石である。表裏面に凹みが見られ、側面に凹みや敲打痕が見られる。

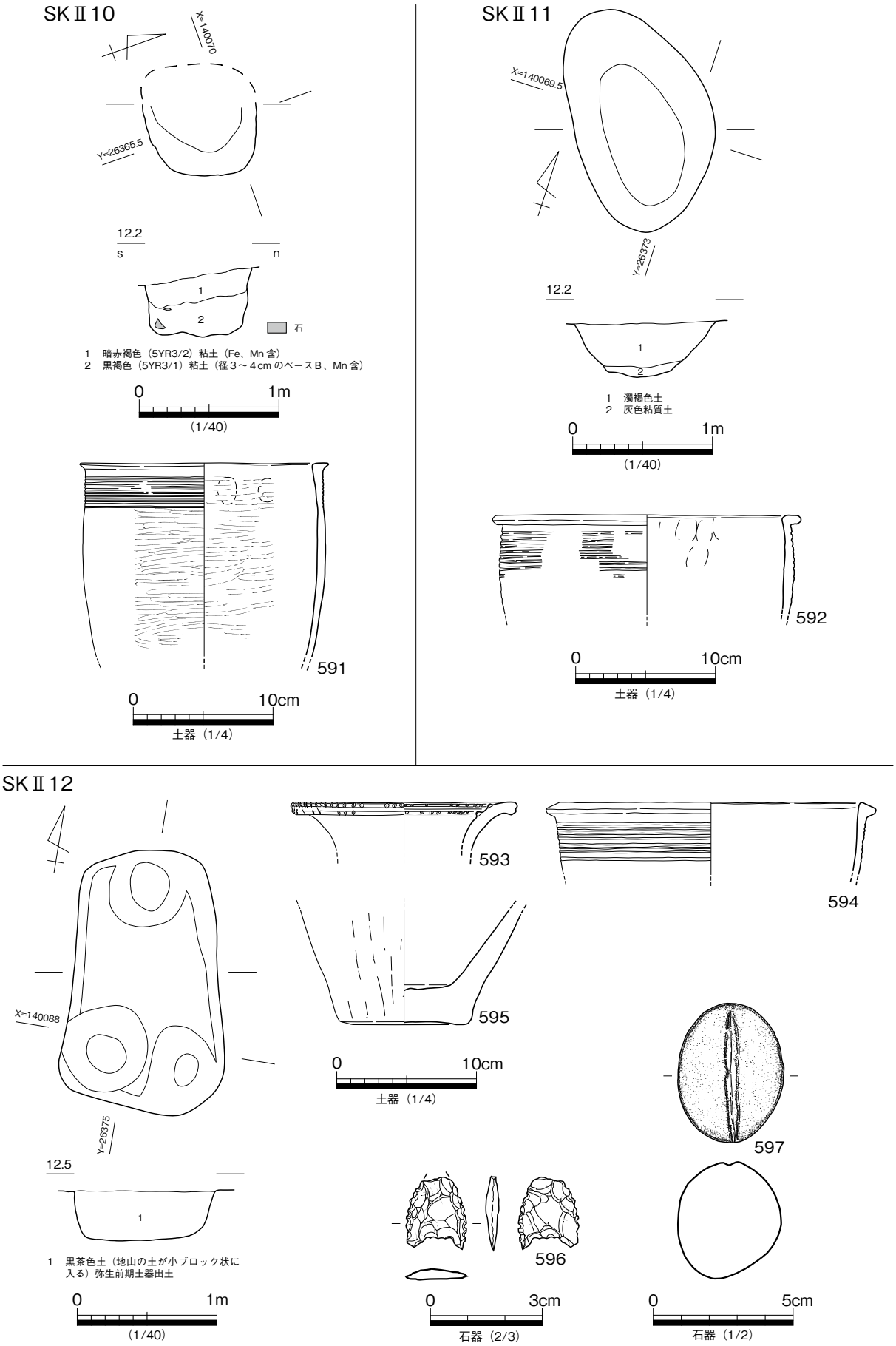
SX Ⅱ 05 出土遺物はやや時期幅があるが、上下層ともに櫛描き直線文をもつ個体があり、また、無頸壷が存在するなど新しい要素が見られる遺構である。真鍋編年のⅡ -1 期に属すると考えられる。



第 90 図　SX Ⅱ 05 上層　出土遺物実測図 (1)



第 91 図　SX Ⅱ 05 上層　出土遺物実測図 (2)



第 92 図　SK Ⅱ 10 ～Ⅱ 12　平・断面図、出土遺物実測図

土坑

SK Ⅱ 10

Ⅱ区（平成７年度調査区）の SD Ⅱ 04 の溝底で検出した土坑である。西側は壊されており東端のみの検出であるが、一辺 80cmほどの隅丸方形の平面形と考えられる。断面はＵ字形で、深さ約 50cmである。埋土は２層に分けられ、両層から微量の遺物片が出土している。第 92 図 591 は逆Ｌ字状口縁の甕である。出土層位は不明である。ほかの出土遺物片の胎土から見ても、SK Ⅱ 10 は弥生時代前期の遺物のみが出土していると判断できる。

SK Ⅱ 11

Ⅱ区（平成６年度調査区）の SX Ⅱ 02 の南側で検出した土坑である。長軸 162、短軸 102cmのそら豆状の平面形で、断面形は椀状で深さ 38cmを測る。図化した土器のほかに 20 点あまりの細片が出土しているが、胎土の様子から弥生時代前期の遺構と考えられる。第 92 図 592 は逆Ｌ字状口縁の甕である。

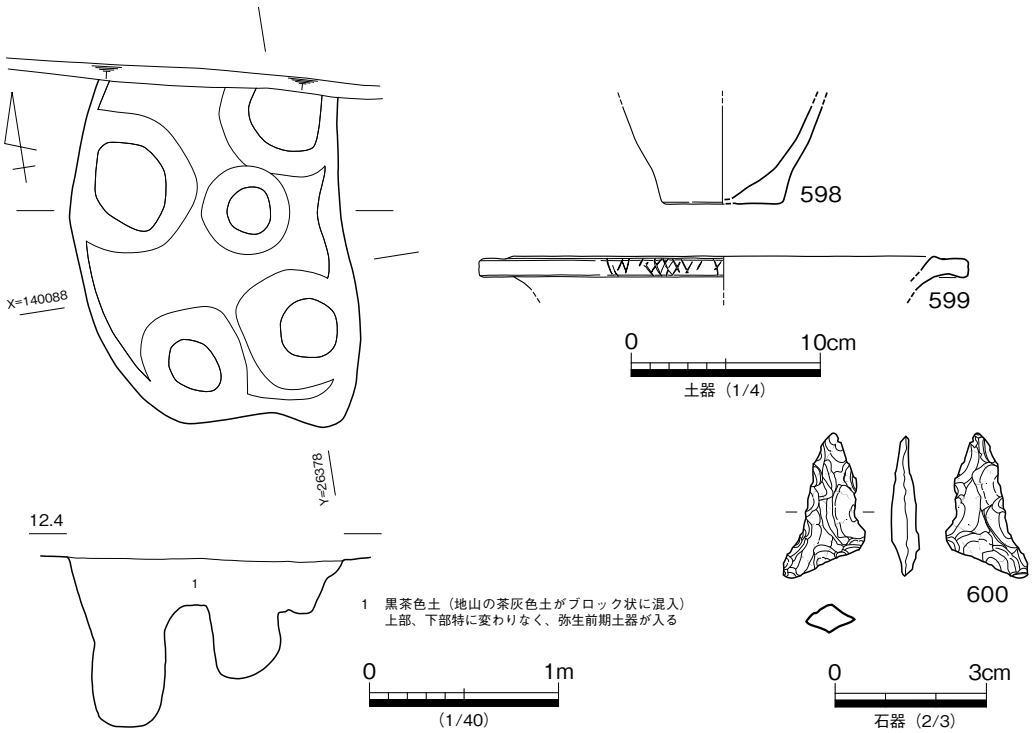
SK Ⅱ 12

Ⅱ区（平成６年度調査区）の北東部で検出した土坑である。長辺 185、短辺 95 ～ 120cmの隅丸台形の平面形で、断面は深い皿状、深さ 35cmを測る。さらに底に 40 ～ 68cmの深さの３基のピットがある。東に隣接する SK Ⅱ 13、Ⅱ 15 も同様で、複数のピットを一つの土坑が共有する構造の遺構は、弥生時代前期に特徴的に見られるものである。

28㍑コンテナ１／８箱ほどの遺物片が出土しているが、弥生時代前期の様相を示している。第 92 図 593 の壷は口縁端面に刻み目を施したのち、ヘラ描き沈線１条を巡らせている。口縁内面には刻み目のある突帯を巡らせている。このほか弥生時代前期の甕、凹基式石鏃のほか、砂岩円礫を利用した石錘が出土している（597）。全円の 1/3 程度の長さに凹みが掘られている。

SK Ⅱ 13

Ⅱ区（平成６年度調査区）で検出した土坑である。長辺 170cm以上、短辺 145cmの不整形の平面形で、深さ 25cmの皿状の断面形である。SK Ⅱ 13 も底から５基のピットを検出している。このうちの１基は調査区北壁に接しているが、写真を見ると土坑を切っているようで、土坑上面でピットの輪郭が見えるはずのものが埋土が類似するために認識できなかった場合もあるようである。ピットの深さは底から 44 ～ 68cmを測る。28㍑コンテナ１／８箱ほどの遺物片が出土しており、弥生時代前期～中期初めのものと見られる。第 93 図 599 は高杯の口縁部の破片である。羽釜のような形態で口縁端部にヘラ描きの斜格子文を刻んでいる。真鍋編年のⅢ -1 期まで下る可能性がある資料である。

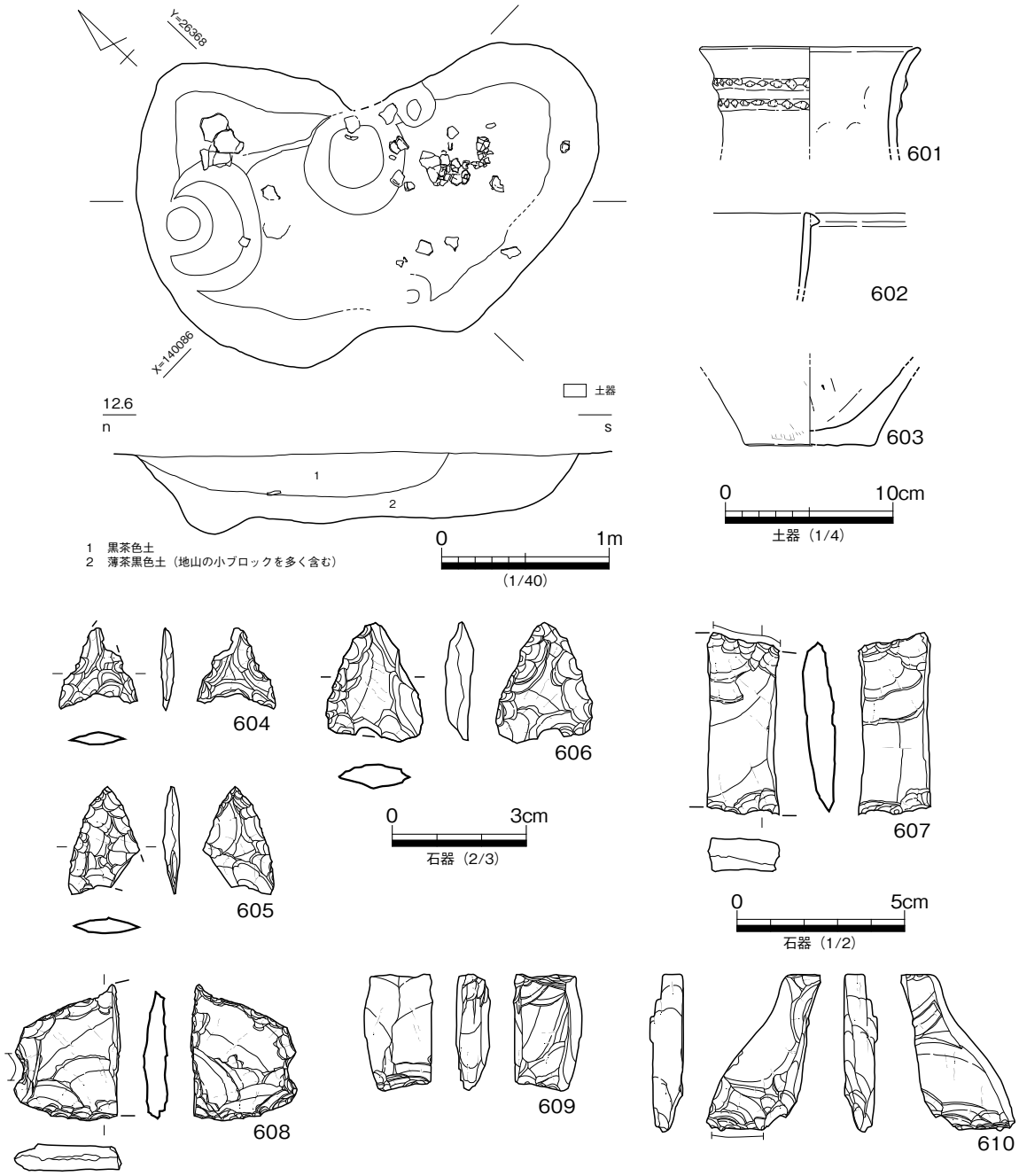


第 93 図　SK Ⅱ 13　平・断面図、出土遺物実測図

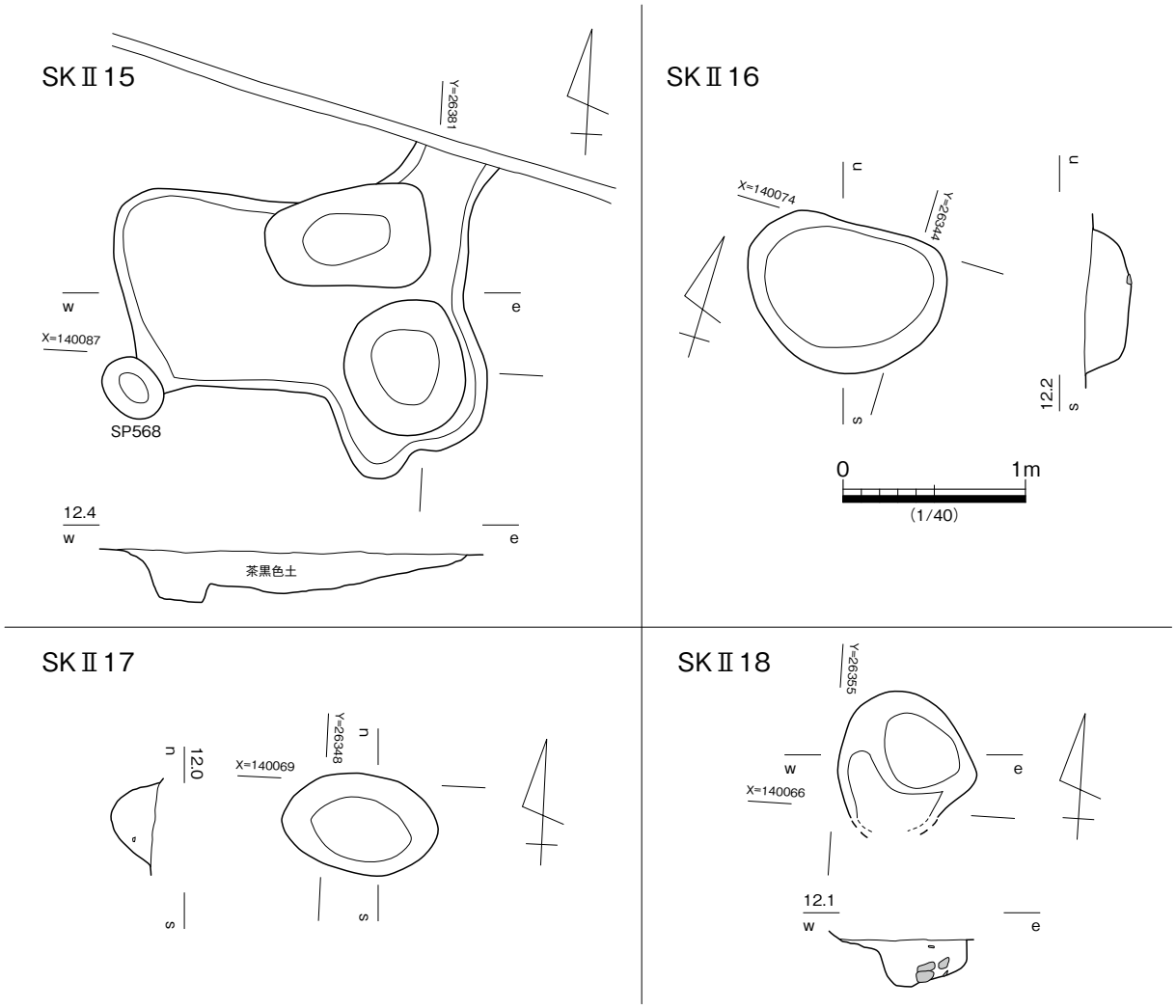
SK Ⅱ 14

Ⅱ区（平成６年度調査区）で検出した土坑である。長軸 280、短軸 135cmほどのそら豆状の不整形な平面形で、深さ 38cmほどの皿状の断面形である。底に深さ 23、18cmのピットが存在する。28㍑コンテナ１／４箱ほどの遺物が出土している。図化遺物の様相と合わせて弥生時代前期の遺構である。第 94 図 601 ～ 610 は SK Ⅱ 14 出土の遺物実測図で、刻み目のある突帯２条を貼り付ける長頸壷、甕、石鏃、削器、打製石庖丁、剝片化した楔形石器が出土している。

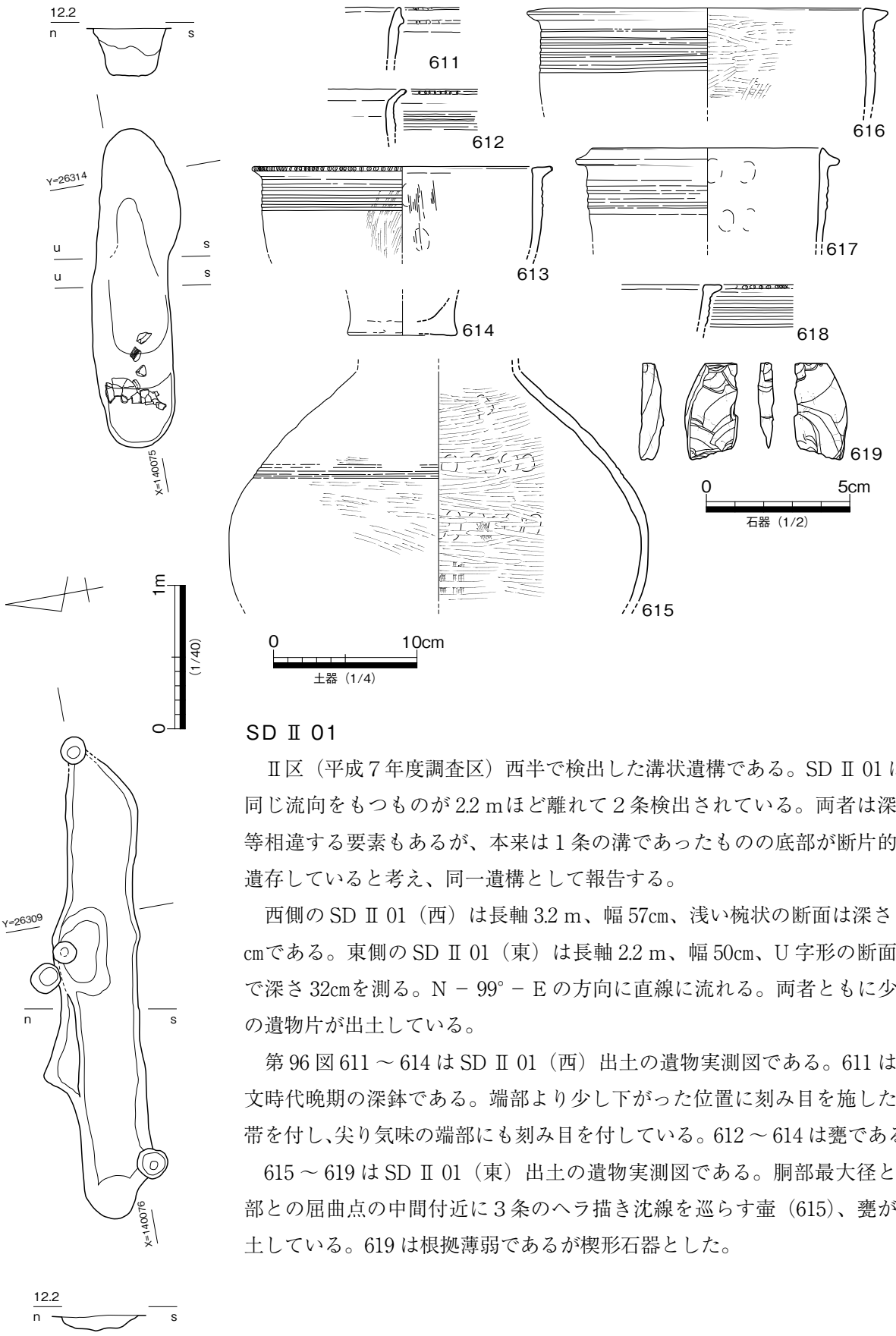
このほか、SK Ⅱ 15 は 10 片あまりの土器細片が出土したのみであるが、土坑の底に複数のピットをもつ構造から弥生時代前期の遺構と考える。また、SK Ⅱ 16、SK Ⅱ 17、SK Ⅱ 18 は図化不能の土器細片が微量出土したのみであるが、胎土の様子が弥生時代前期のものに限定され、前期の遺構と判断する（第 95 図）。



第 94 図　SK Ⅱ 14　平・断面図、出土遺物実測図



第 95 図　SK Ⅱ 15 ～Ⅱ 18　平・断面図



SD Ⅱ 01

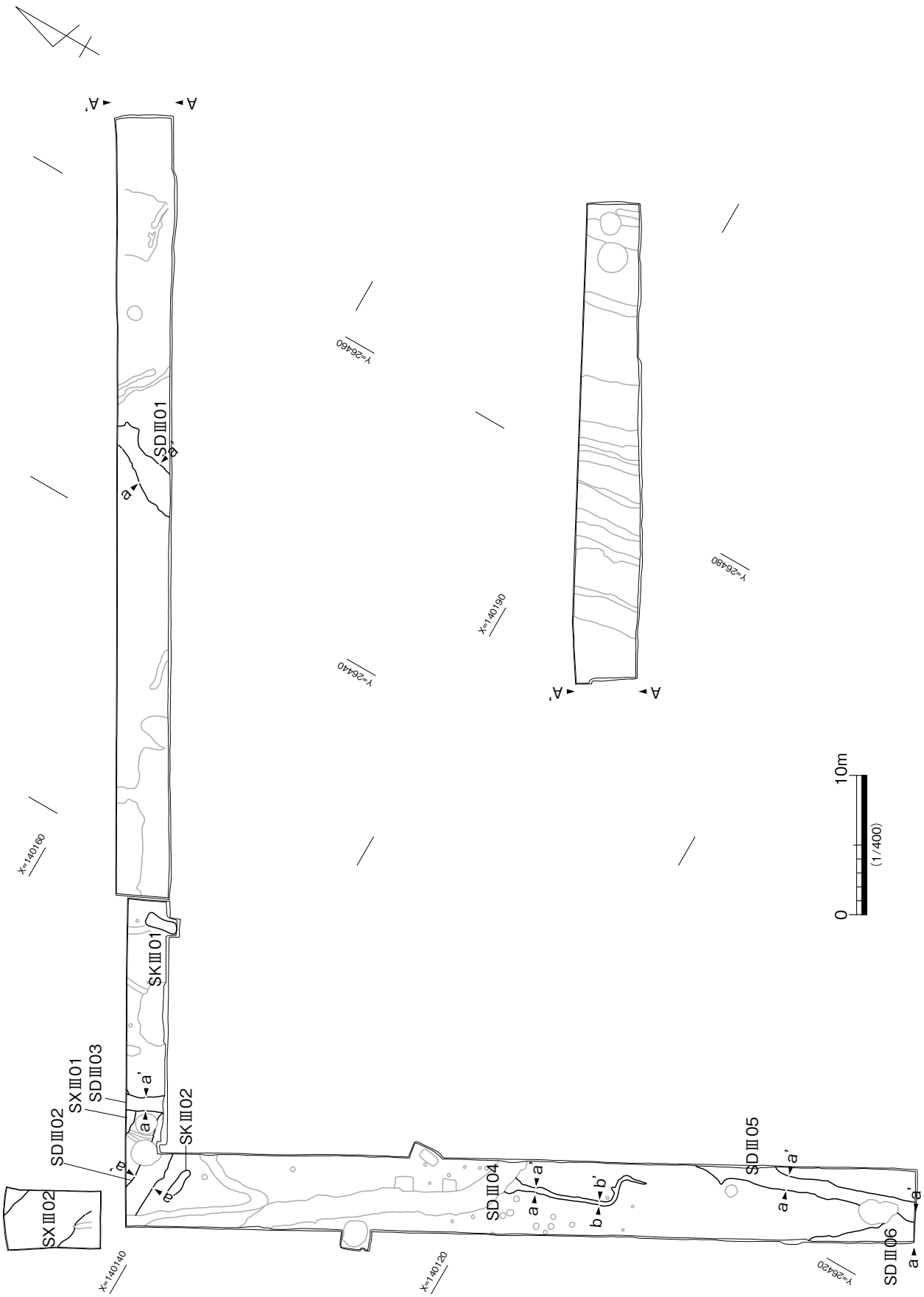
Ⅱ区（平成７年度調査区）西半で検出した溝状遺構である。SD Ⅱ 01 は、同じ流向をもつものが 2.2 mほど離れて２条検出されている。両者は深さ等相違する要素もあるが、本来は１条の溝であったものの底部が断片的に遺存していると考え、同一遺構として報告する。

西側の SD Ⅱ 01（西）は長軸 3.2 m、幅 57cm、浅い椀状の断面は深さ 10 cmである。東側の SD Ⅱ 01（東）は長軸 2.2 m、幅 50cm、U 字形の断面形で深さ 32cmを測る。N － 99° － E の方向に直線に流れる。両者ともに少量の遺物片が出土している。

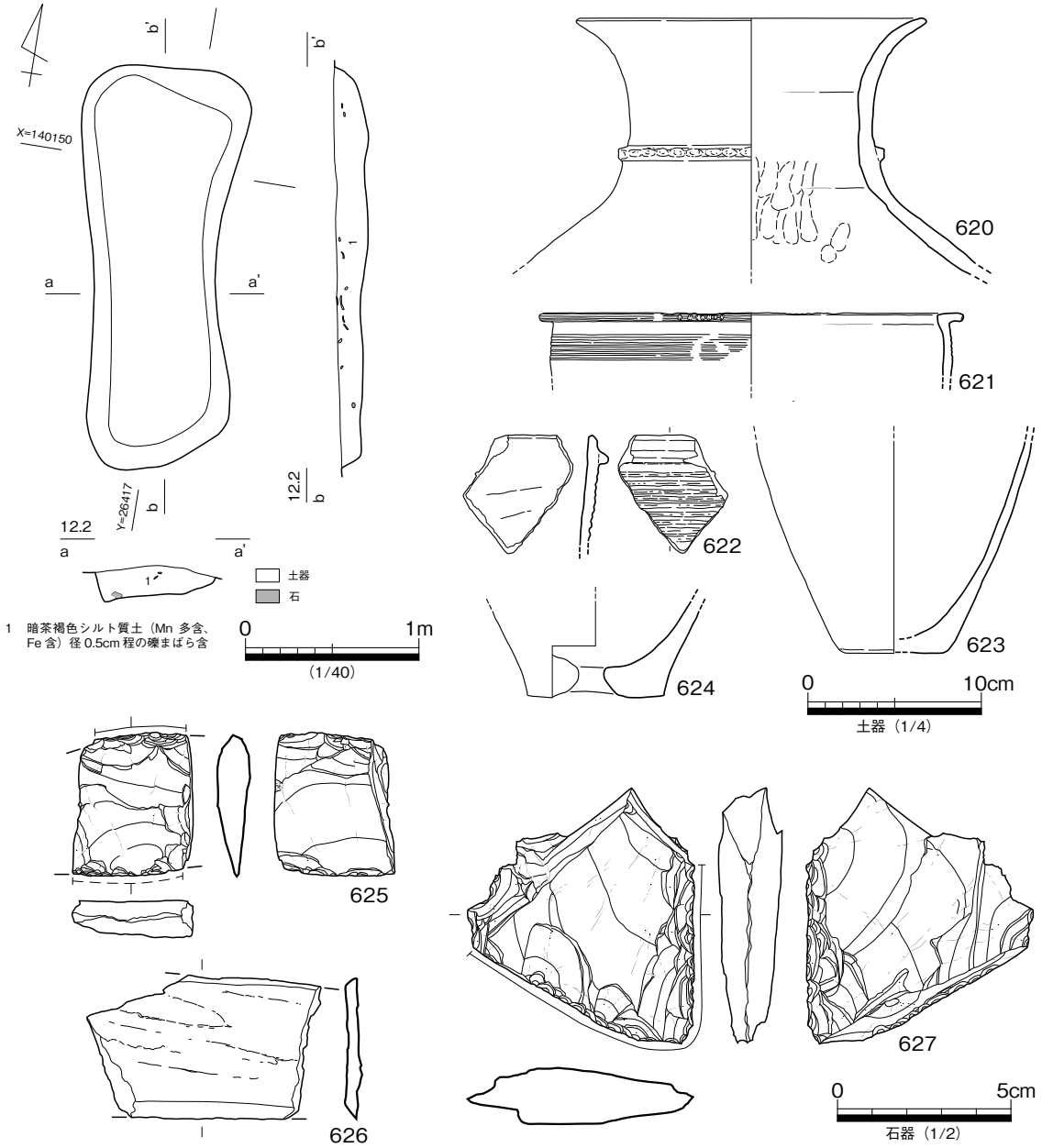
第 96 図 611 ～ 614 は SD Ⅱ 01（西）出土の遺物実測図である。611 は縄文時代晩期の深鉢である。端部より少し下がった位置に刻み目を施した突帯を付し､尖り気味の端部にも刻み目を付している。612 ～ 614 は甕である。

615 ～ 619 は SD Ⅱ 01（東）出土の遺物実測図である。胴部最大径と頸部との屈曲点の中間付近に３条のヘラ描き沈線を巡らす壷（615)、甕が出土している。619 は根拠薄弱であるが楔形石器とした。

第 96 図　SD Ⅱ 01　平・断面図、出土遺物実測図



第 97 図　Ⅲ区弥生時代前期遺構　平面図



第 98 図　SK Ⅲ 01　平・断面図、出土遺物実測図

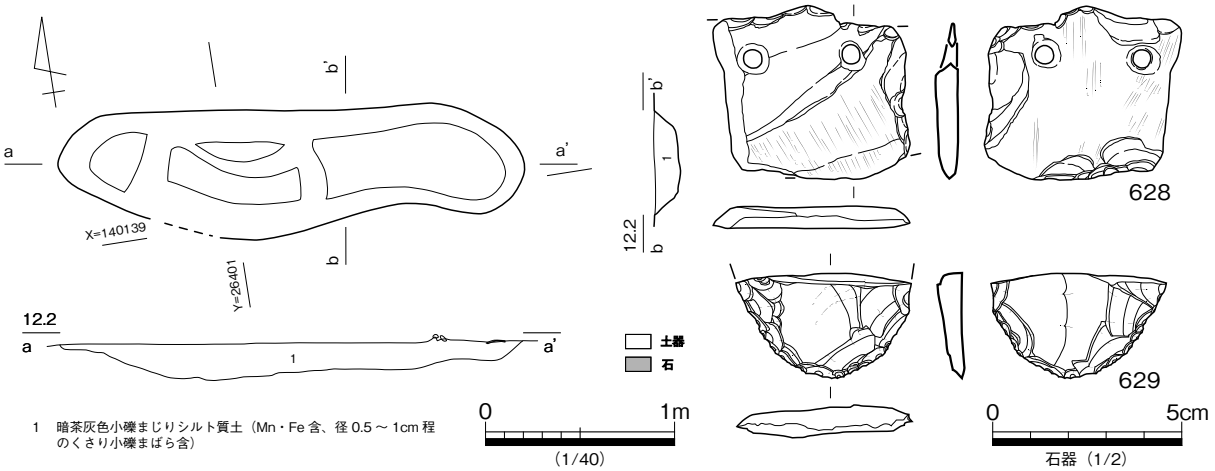
Ⅲ区（第 97 図）

Ⅲ区で検出した弥生時代前期～中期前葉の遺構（SK Ⅲ 01、Ⅲ 02、SX Ⅲ 01、SD Ⅲ 01 ～ Ⅲ 06）について報告する。なお、SX Ⅲ 02 は調査対象地外の工事中に発見された遺構である。

土坑

SK Ⅲ 01

Ⅲ区で検出した土坑である。長辺 2.3、短辺 0.7、深さ 0.2 mで、平面形は長辺中央がやや内側にすぼまる隅丸長方形、断面形は長短辺とも一端は箱形を呈するが、一端は緩やかに立ち上がる形状である。28㍑コンテナ１／８箱ほどの遺物破片が散在して出土している。第 98 図 620 は頸部の中央部付近に「O」字形の押捺突帯文を貼り付けた壷である。621、622 は甕、623、624 は焼成後に穿孔した甑である。625 は上辺に刃潰れ、下辺はわずかに摩滅が見られることから削器とした。626 は緑泥片岩製の石器片であ

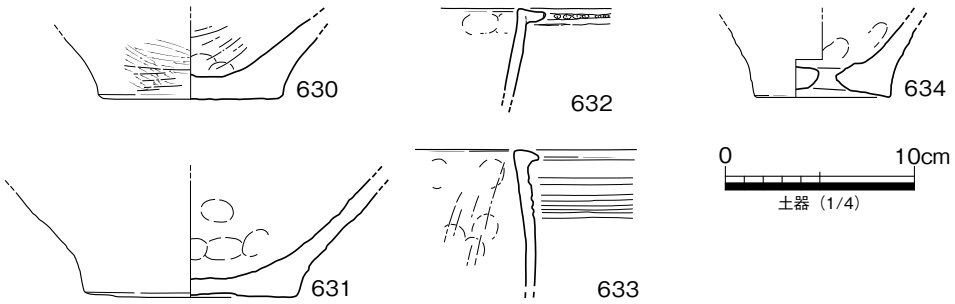


第 99 図　SK Ⅲ 02　平・断面図、出土遺物実測図

る。下辺に刃部を作り出していることから磨製石庖丁の残欠と考える。627 は器種不明、２次加工のある剝片とした。SK Ⅲ 01 は図化遺物、未図化遺物の様相から弥生時代前期の遺構である。

SK Ⅲ 02

Ⅲ区で検出した土坑である。長軸 2.5、短軸 0.6 mほどの不整形な長楕円形を呈する。断面形状は深さ 18cmで浅い椀状を呈する。弥生土器片が少量出土しているが、時期の特定は難しい。SD Ⅲ 02 と平行する位置関係にあることから弥生時代前期の遺構と考える。緑泥岩製の磨製石庖丁の残欠（第 99 図 628）、打製石斧の刃部の破片（第 99 図 629）が出土している。



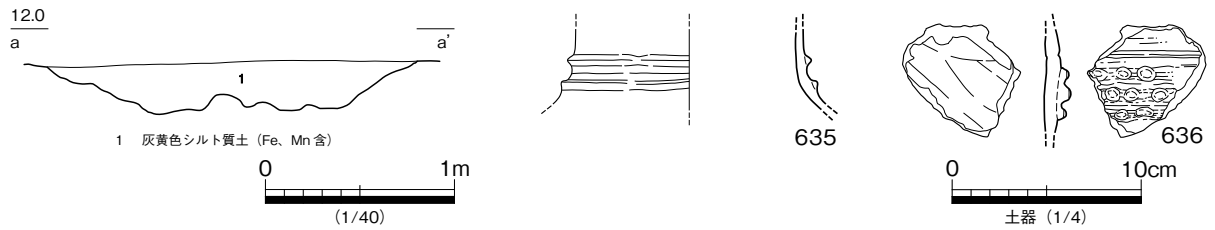
第 100 図　SX Ⅲ 01　出土遺物実測図

その他の遺構

SX Ⅲ 01

Ⅲ区で検出したもので、大半が調査区外に延びることから性格不明の遺構である。検出部分の平面形は円弧状を呈する。深さ 24cmを測る。他の遺構との関係で断面の立ち上がり形状は不明であるが、底は平坦である。28㍑コンテナ１／８箱ほどの遺物片が散在する状況で出土している。弥生時代前期の遺構と考えられる。

第 100 図 630 ～ 634 は SX Ⅲ 01 出土の遺物実測図である。弥生時代前期の壷の底部、甕の口縁部、甑の破片が出土している。

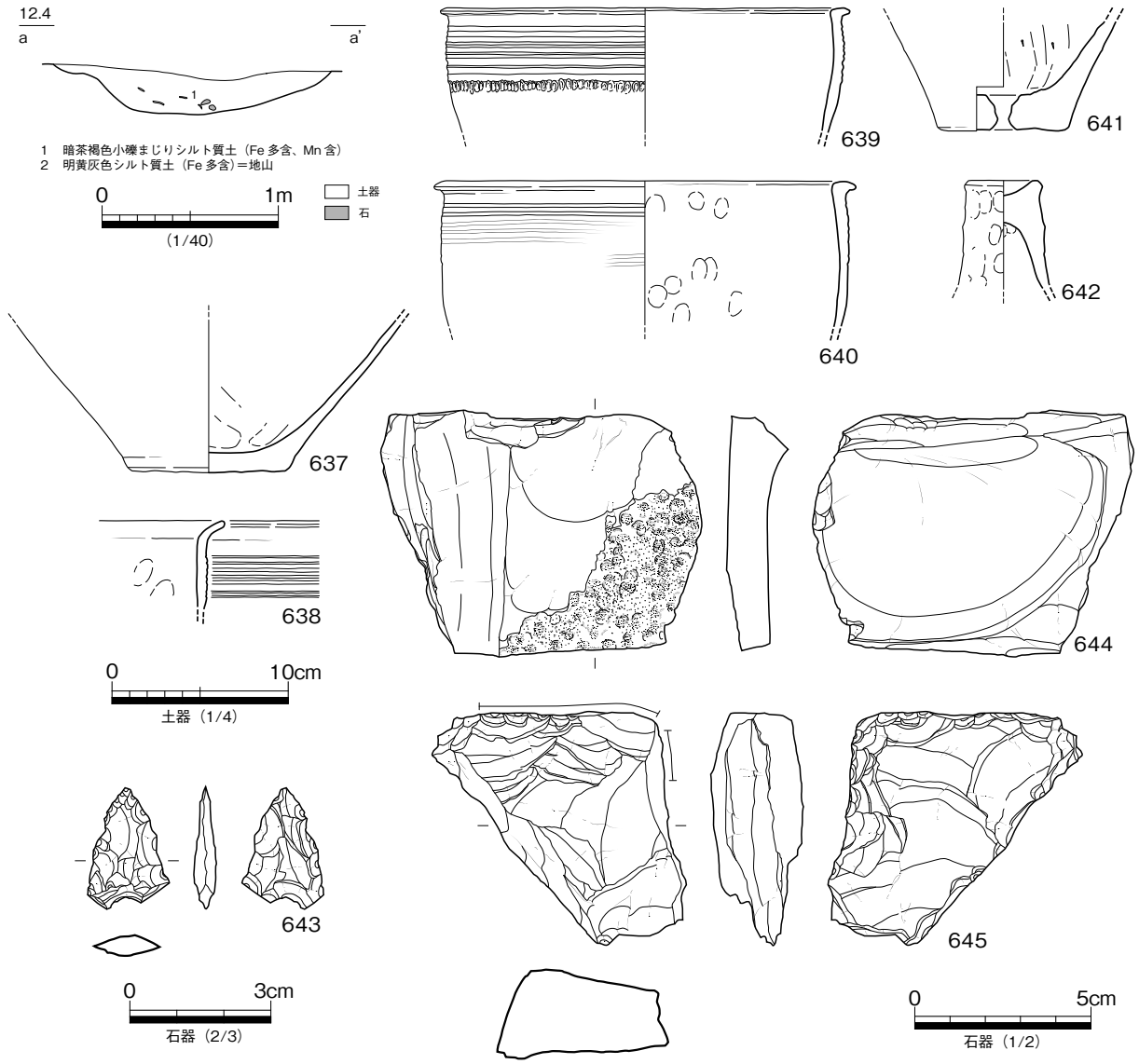


第 101 図　SD Ⅲ 01　断面図、出土遺物実測図

溝状遺構

SD Ⅲ 01

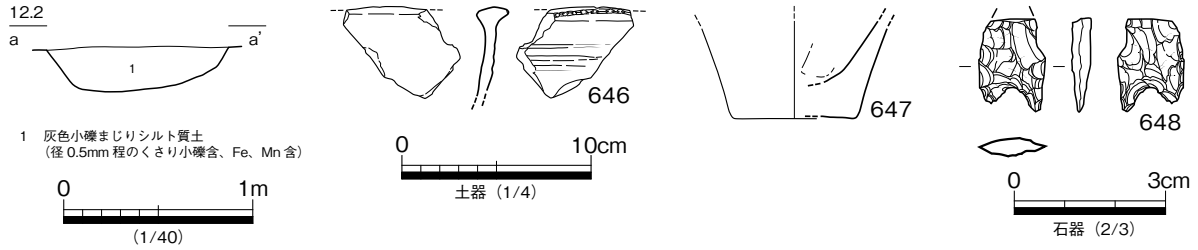
Ⅲ区で検出した溝状遺構である。N － 24° － E 方向に直線状に流れる。検出長は 5.3 m、幅 200、深さ 26cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。少量の遺物が出土している。２点を図化した。第 101 図 635 の壺は頸胴部の境に２条の貼付け突帯を付したもの、636 は「O」字形の指頭圧痕文を施した貼付け突帯３条、その上部に１条のヘラ描き沈線を巡らした壺体部の破片である。



第 102 図　SD Ⅲ 02　断面図、出土遺物実測図

SD Ⅲ 02

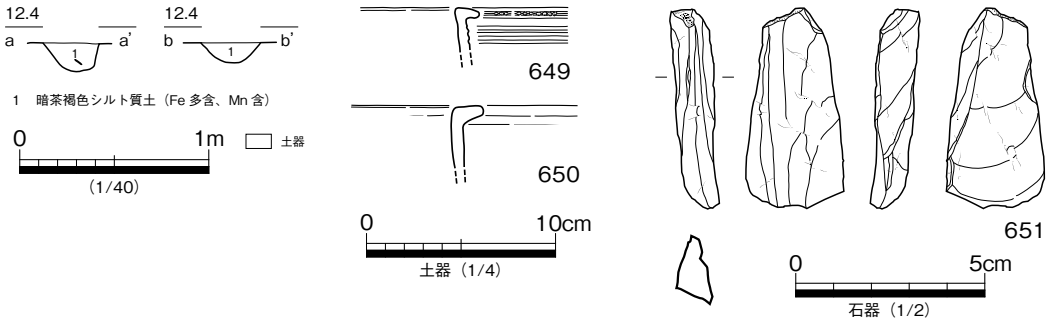
Ⅲ区で検出した溝状遺構である。N － 88° － W 方向に直線状に流れるもので、幅 160、深さ 24cmほどの規模である。断面形は浅い椀状を呈する。検出長は約５ｍで、28ﾘｯﾄﾙコンテナ１箱分の遺物が出土している。土器は弥生時代前期の壷、甕、甑、蓋が、石器は石鏃、石核が出土している。第 102 図 644、645 は石核とした。



第 103 図　SD Ⅲ 03　断面図、出土遺物実測図

SD Ⅲ 03

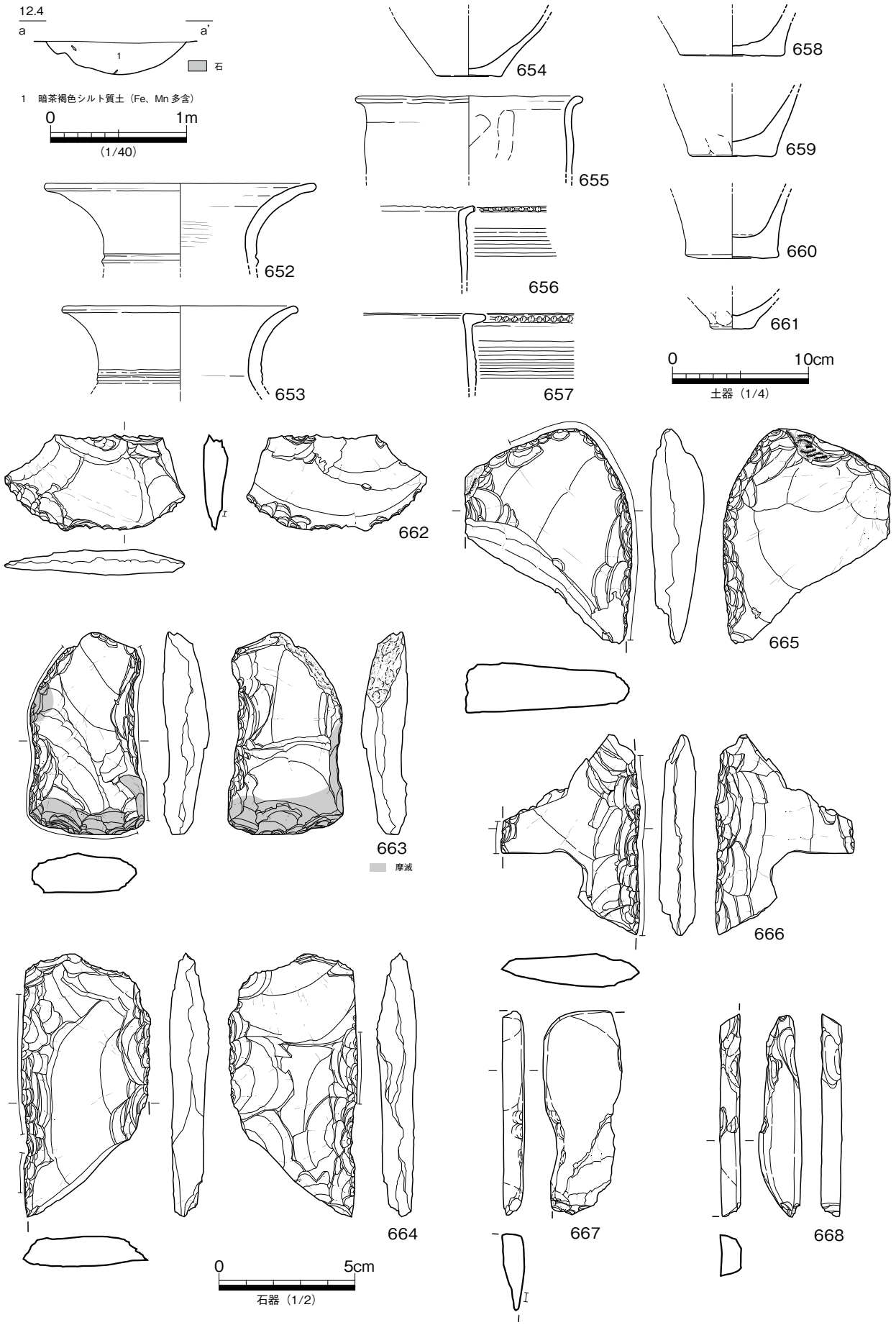
Ⅲ区で検出した溝状遺構である。N － 25° － W の方向に直線状に流れ、検出長約 2.8 m、幅 100、深さ 25cmほどの規模で断面形は椀状を呈する。SD Ⅲ 02､SX Ⅲ 01 より新しい。少量の遺物が出土している。須恵器片が１点含まれるが混入と考えられ、以外は弥生時代前期とみられる。第 103 図 646 は内面にも突出部をもつ断面 T 字形を呈する逆 L 字状口縁の甕である。



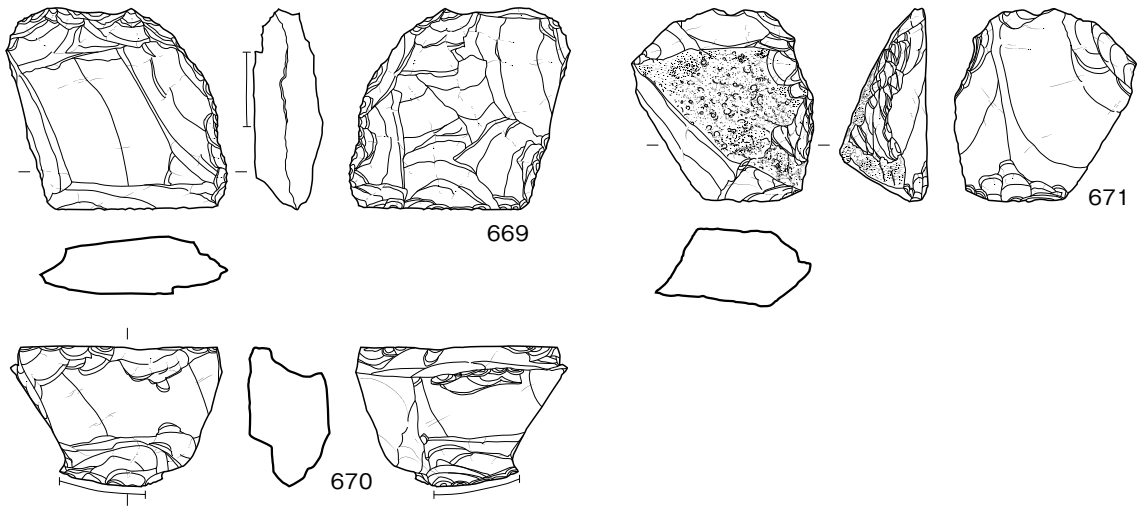
第 104 図　SD Ⅲ 04　断面図、出土遺物実測図

SD Ⅲ 04

Ⅲ区で検出した溝状遺構である。途中クランク状に折れ曲がるが、全体として N － 18° － W 方向に流れる。北側は SD Ⅲ 08 に壊される。検出長は約 11.3 mで、規模は幅 30、深さ 15cm、断面形は椀状である。少量の遺物が出土しているが弥生時代前期とみられる。第 104 図 651 は剝片化した楔形石器と考えるが、SD Ⅲ 08 出土のものと遺構間で接合した。



第 105 図　SD Ⅲ 05　断面図、出土遺物実測図 (1)

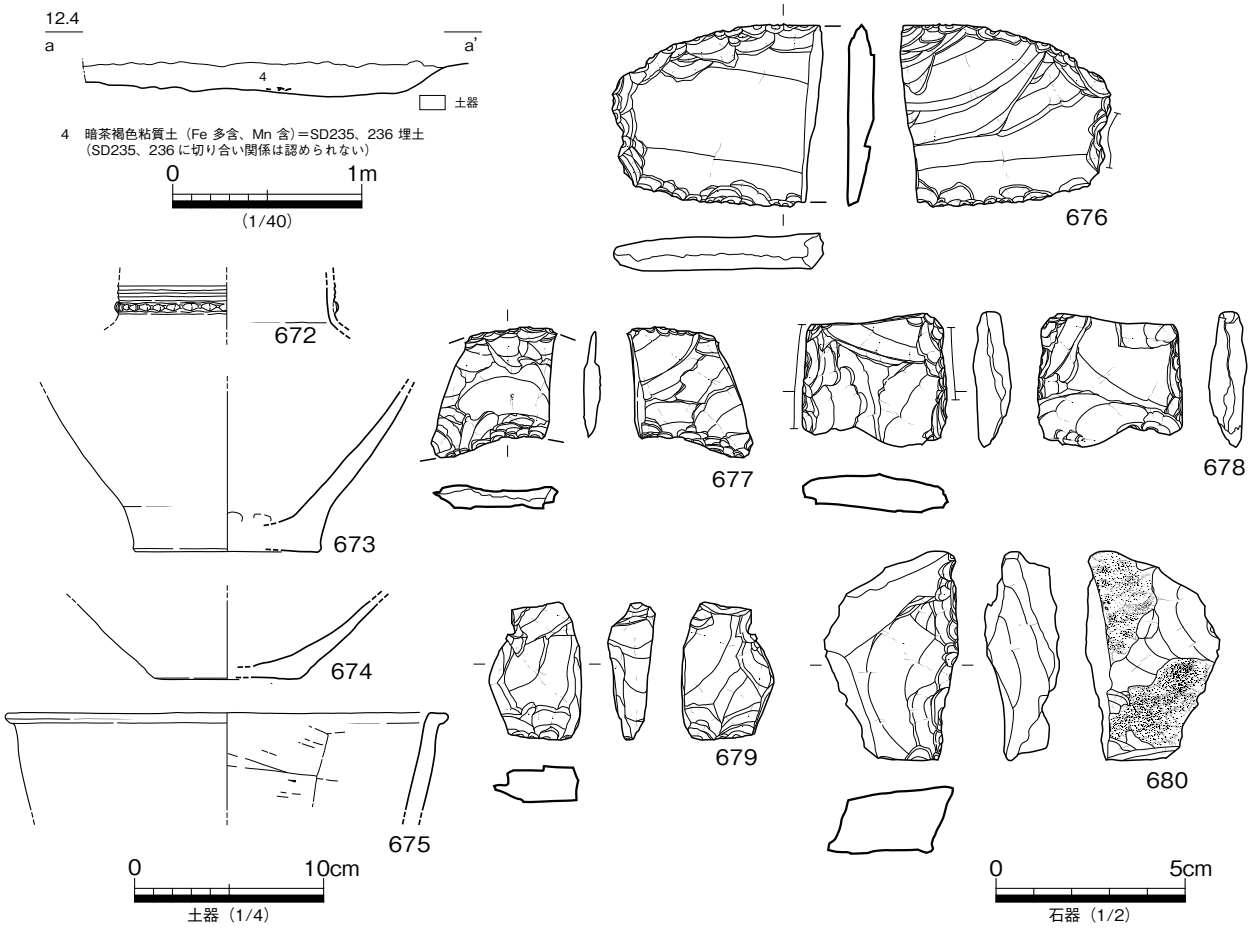


第 106 図　SD Ⅲ 05　出土遺物実測図 (2)

SD Ⅲ 05

Ⅲ区で検出した溝状遺構である。N － 17.5° － W 方向に直線状に流れる。南で SD Ⅲ 06 と接するが明瞭な前後関係は認められない。検出長は約 13.5 m、規模は幅 100、深さ 20㎝で、断面形は椀状である。28㍑コンテナ 1 箱の遺物が出土しているが、弥生時代前期と考えられる破片が大半を占める。

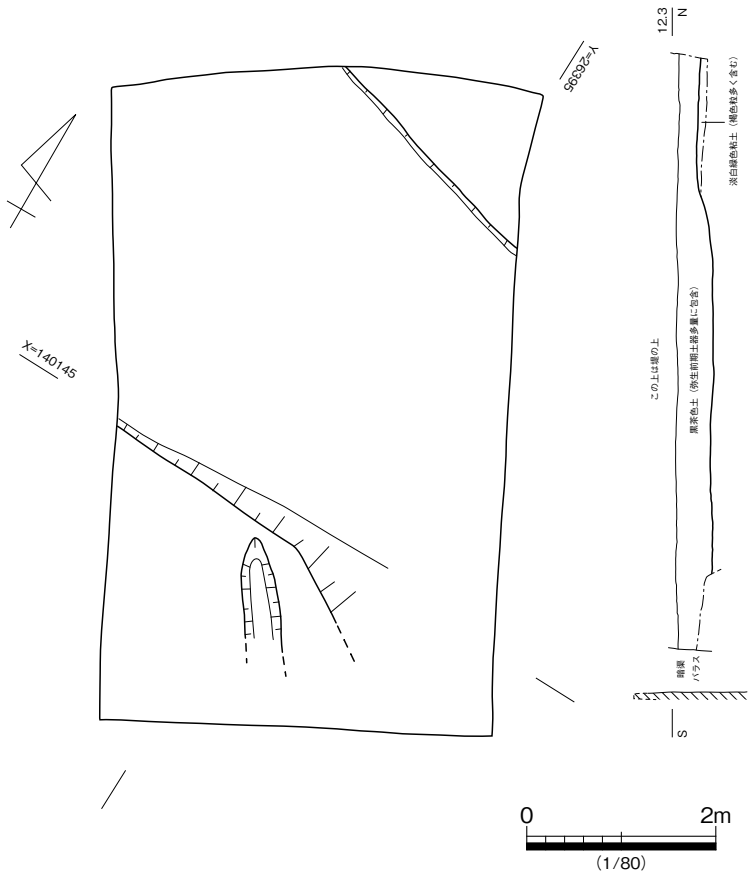
第 105、106 図 652 ～ 671 は SD Ⅲ 05 出土の遺物実測図である。弥生時代前期の広口壷、如意状や逆 L 字状口縁の甕が出土している。661 は摩滅のため詳細不明であるが、弥生時代後期の鉢の可能性がある。混入か。663 は基部から側縁に礫面が残ることから完形に近い形状の打製石斧である。664 の一側縁は一定の厚みのある割れ面の大半をそのまま利用し、一部を敲打によって整形した打製石斧である。666 は両側縁に押圧剥離、刃潰しが見られることから基部、刃部を折損した打製石斧と考える。667 は緑泥岩製の柱状片刃石斧片、668 も緑泥片岩製の偏平片刃石斧片である。669 は下辺の割れ面の縁に微細な階段状剥離、上辺には割れ面と打撃に伴う階段状剥離が見られることから楔形石器と考える。なお、整形の様子から打製石斧を転用したものと思われる。671 は石核とした。



第 107 図　SD Ⅲ 06　断面図、出土遺物実測図

SD Ⅲ 06

Ⅲ区南端で検出した溝状遺構である。なお、位置関係から SR Ⅱ 02 河岸部である可能性も考えられる。少量の出土遺物から弥生時代前期の遺構と考える。図化した土器はいずれも摩滅する小片である。第 107 図 677 は形状から石鎌と考えている。680 は石核とした。

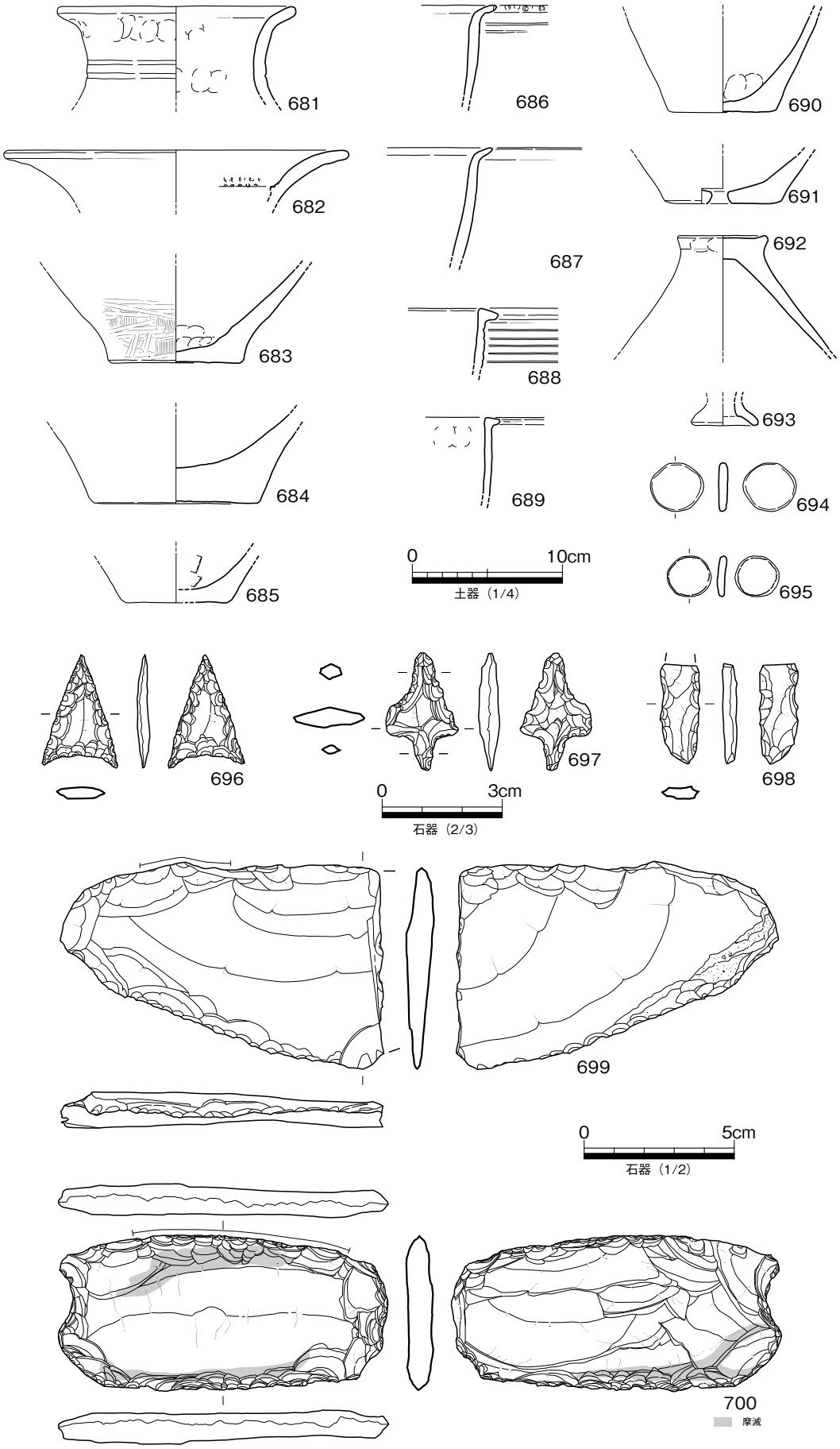


第 108 図　SX Ⅲ 02　平・断面図

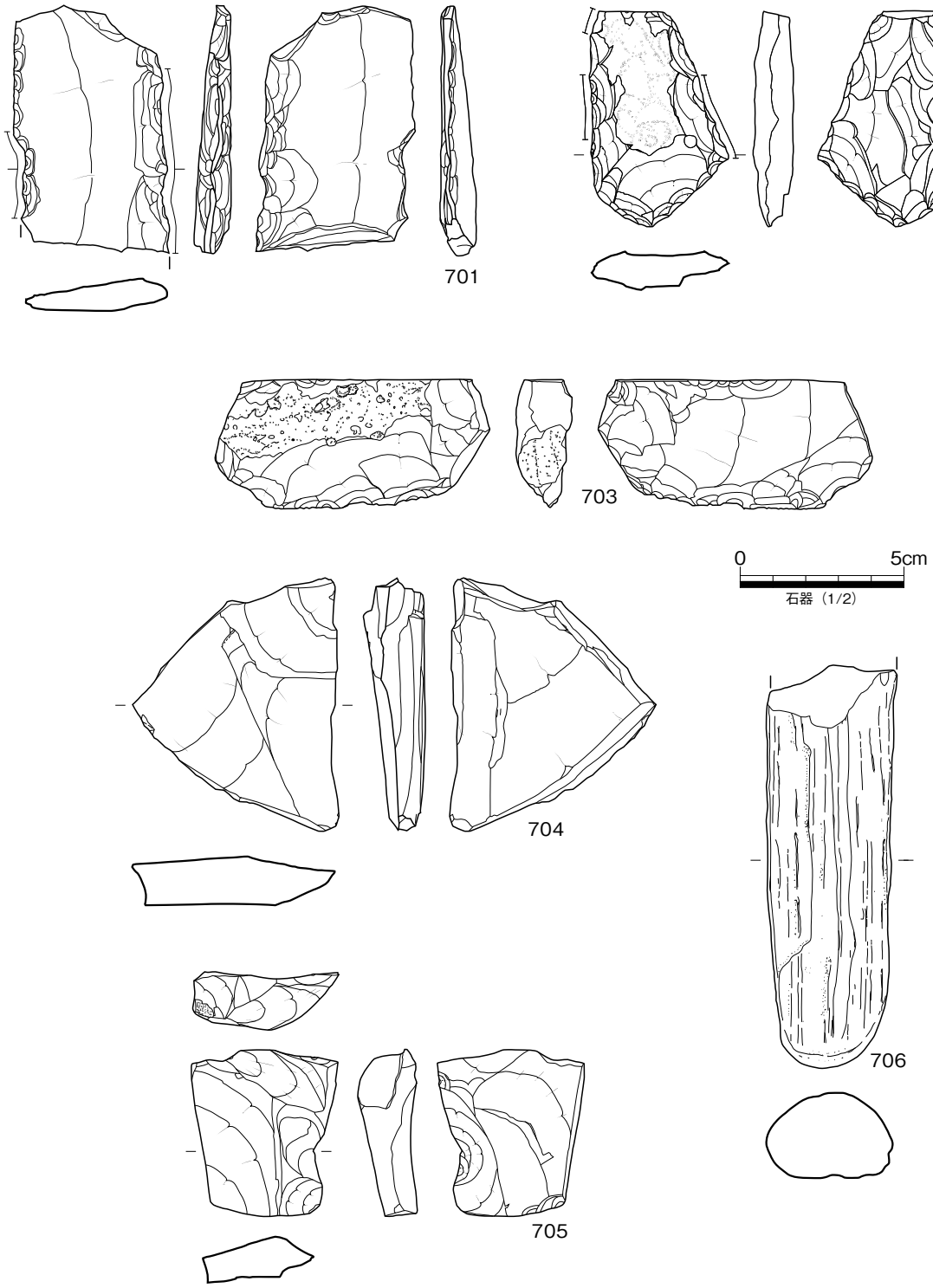
その他の遺構

SX Ⅲ 02

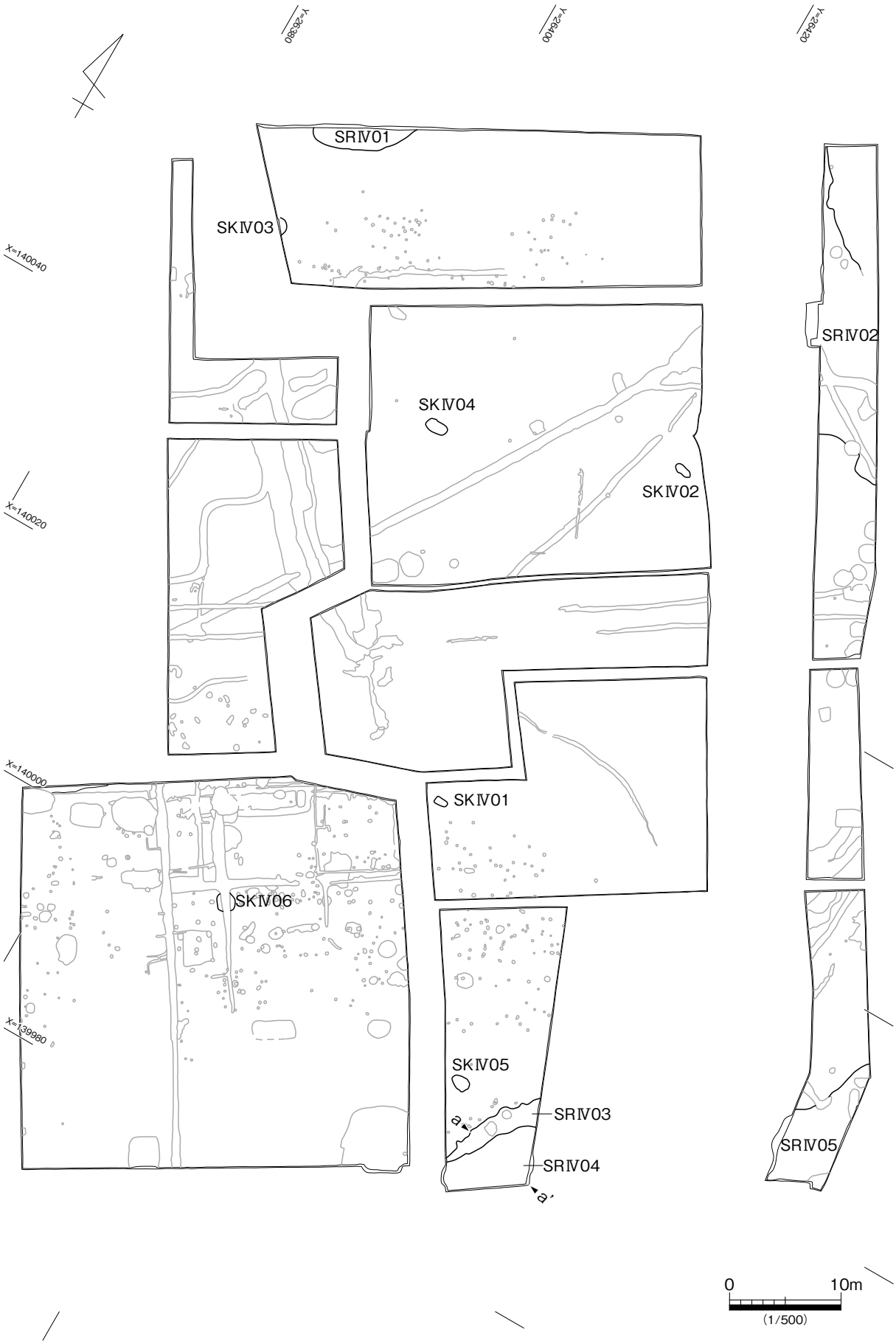
Ⅲ区の南北方向の調査区の北側延長と平池南岸堤防の交点で行われた取水口工事の際に遺構が検出されている。工事範囲は南北 6.8、東西 4.2 ｍの長方形で、幅約４ｍ、深さ 40㎝の黒茶色土で埋まる凹地 (第 108 図）である。弥生時代前期の土器片、石器が散在する状態で包含されていた。第 109、110 図 681 ～ 706 は SX Ⅲ 02 出土の遺物実測図である。広口壷、如意状や逆Ｌ字状口縁の甕、蓋などが出土している。682 の壺は口縁部内面に貼り付け突帯を付し、その上部を２列の竹管による列点文で飾る。693 は小型の高杯形土器の脚部と思われる。694、695 は円盤状土製品である。697 は凸基有茎式の石鏃、700 は完形の打製石庖丁、702 は側縁に刃潰しが見られることから打製石斧片とした。703 は楔形石器、704、705 は石核、706 は緑泥片岩製の石棒の残欠である。



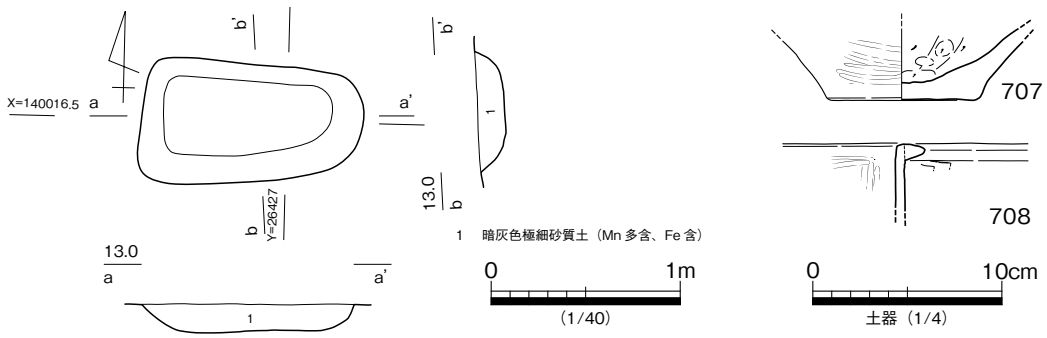
第 109 図　SX Ⅲ 02　出土遺物実測図 (1)



第 110 図　SX Ⅲ 02　出土遺物実測図 (2)



第 111 図　Ⅳ区弥生時代前期遺構　平面図



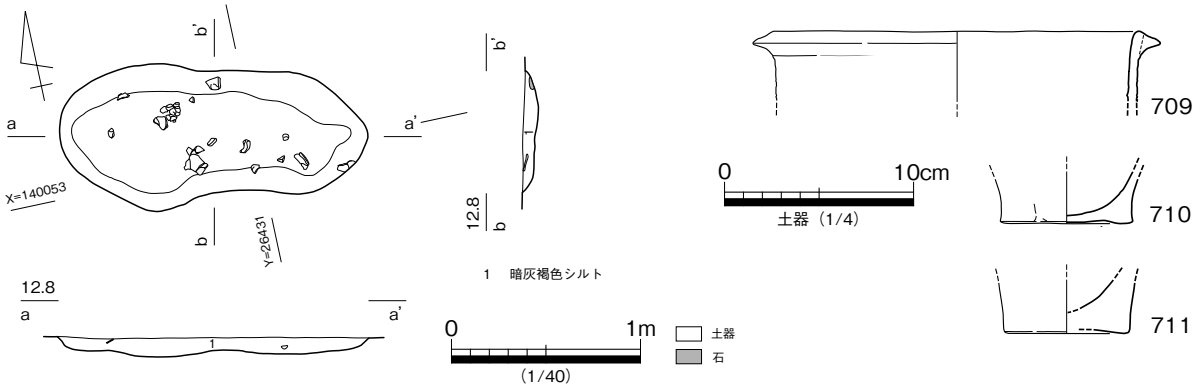
第 112 図　SK Ⅳ 01　平・断面図、出土遺物実測図

Ⅳ区

土坑

SK Ⅳ 01

Ⅳ区スタジアム部分で検出した土坑である。長軸 118、短軸 64cm、東側は楕円状、西側は隅丸方形状の不整な平面形で、断面形は皿状で深さ 14cmを測る。第 112 図の弥生時代前期の壷底部（707）と甕（708）の図化遺物のほかに数点の土器片が出土している。未図化遺物では時期の特定はできないが、埋土の状況もくわえて弥生時代前期の遺構と判断する。



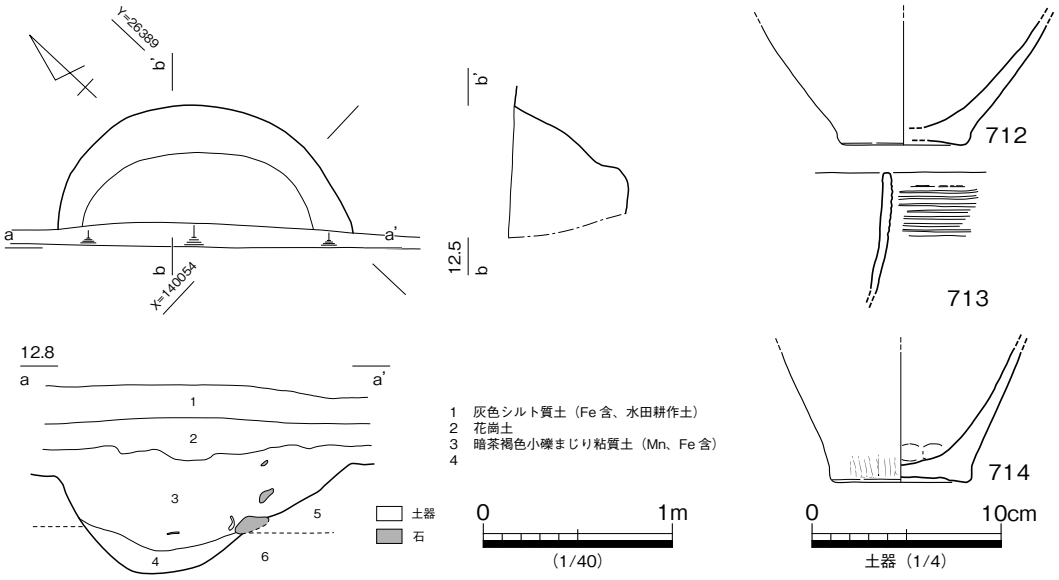
第 113 図　SK Ⅳ 02　平・断面図、出土遺物実測図

SK Ⅳ 02

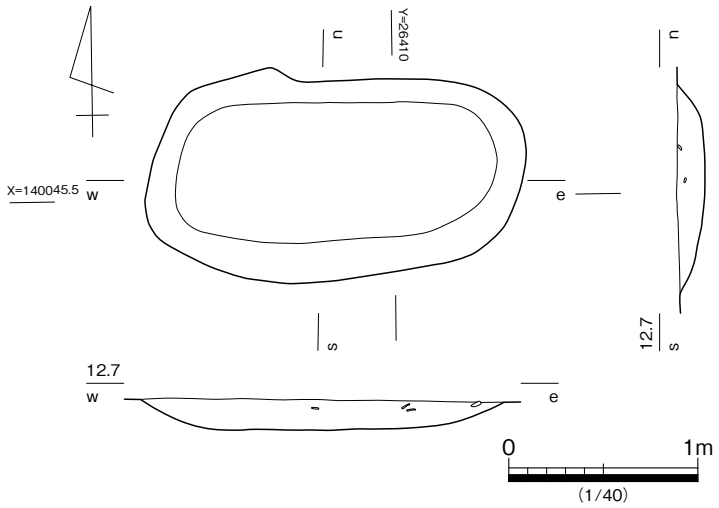
Ⅳ区スタジアム部分で検出した土坑である。長軸 162、短軸 65cmほどの長軸中央部が少し凹むそら豆状の平面形である。深さ 10cmで浅い皿状を呈する。第 113 図の弥生時代前期の甕（709 ～ 711）のほかに 25 点ほどの弥生土器細片が出土している。細片の大多数は砂粒を多く含むもので、SK Ⅳ 02 は弥生時代前期の遺構と判断する。

SK Ⅳ 03

Ⅳ区スタジアム部分で検出した土坑である。東端のみ検出し、西側は調査区外である。検出部分は径 1.6 mほどの円弧状の平面形で、深さ 0.6 mほどの U 字形の断面形である。第 114 図の弥生時代前期の壷底部（712）、口縁端部を欠損した甕（713）、甕底部（714）のほかに 20 点あまりの土器細片および砂岩円礫が出土している。未図化遺物の様相もあわせて SK Ⅳ 03 は弥生時代前期の遺構と判断する。



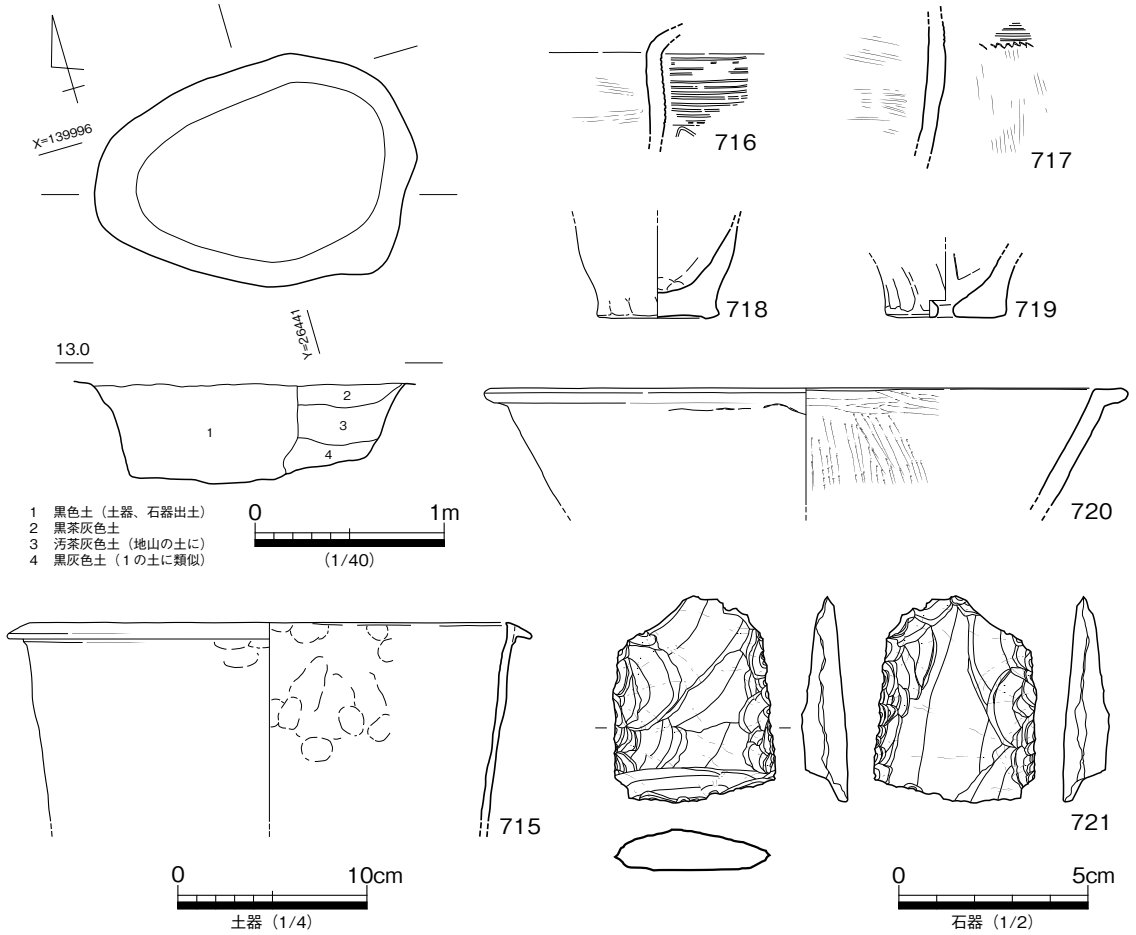
第 114 図　SK Ⅳ 03　平・断面図、出土遺物実測図



第 115 図　SK Ⅳ 04　平・断面図

SK Ⅳ 04

Ⅳ区スタジアム部分で検出した SK Ⅳ 04（第 115 図）は、長軸 200、短軸 108cmで短辺は円弧状、長辺は直線状の長円形の平面形で、深さ 16cmほどの浅い椀形の断面形の土坑である。20 点ほどの土器細



第 116 図　SK Ⅳ 05　平・断面図、出土遺物実測図

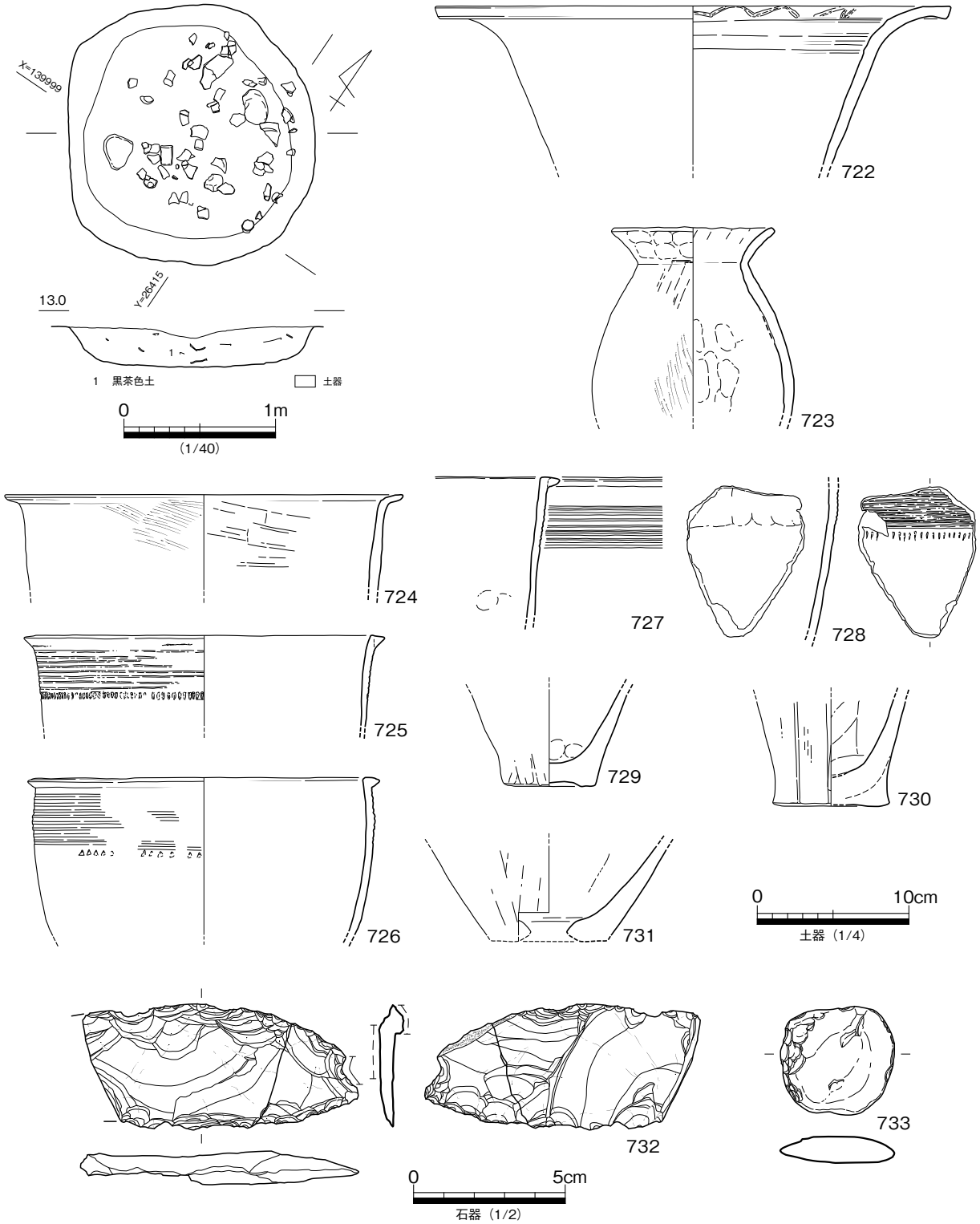
片が出土し、図化可能な遺物はないが、弥生時代前期の遺構と判断する。

SK Ⅳ 05

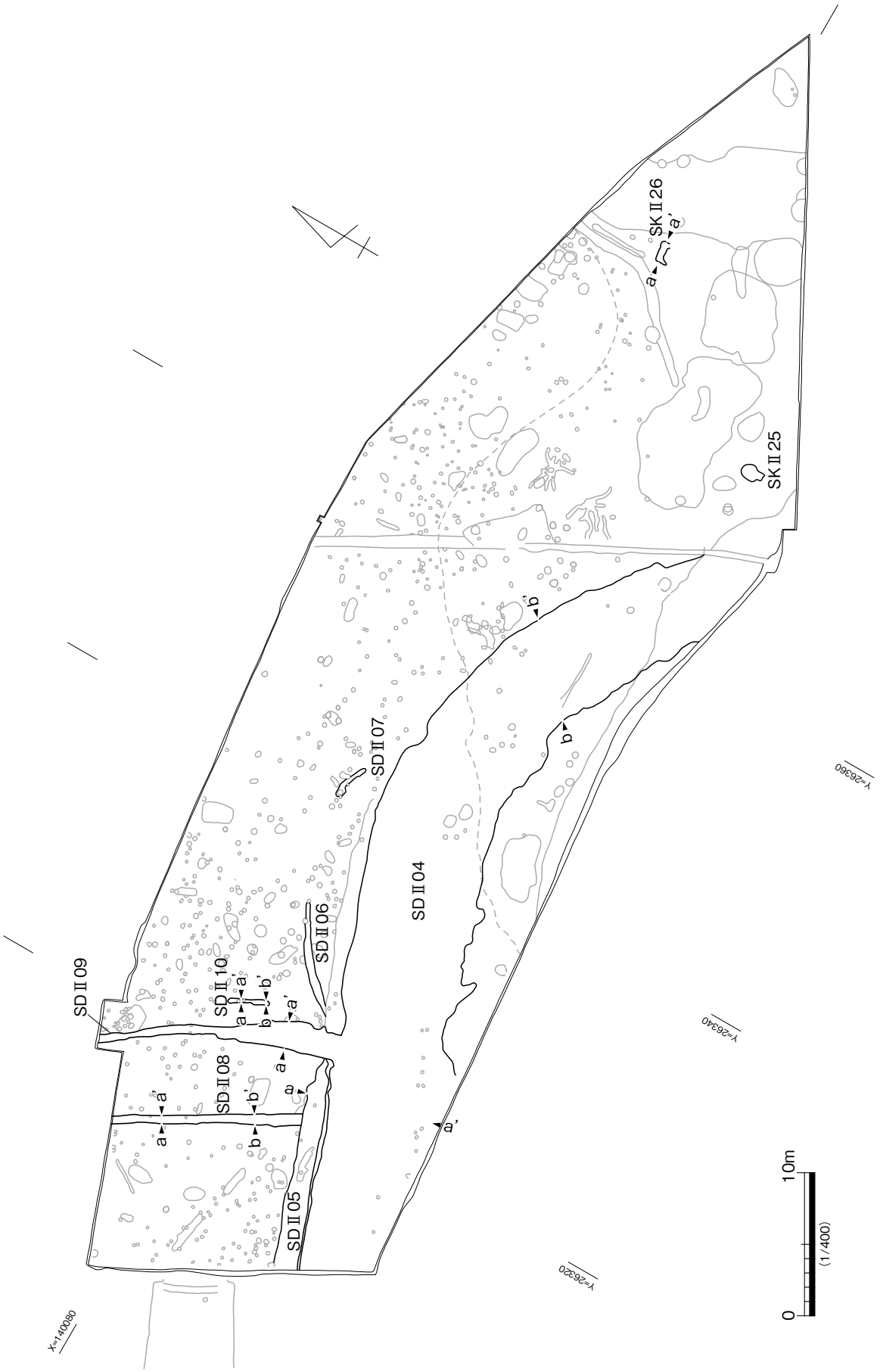
Ⅳ区スタジアム部分で検出した土坑である。長軸 172、短軸 118cmの不整な楕円形で、深さ 50cmの箱形の断面形をもつ。断面図では一度埋没したあとに再掘削されていることが分かる。第 116 図の弥生時代前期の甕（715 ～ 718）、甑（719）、鉢（高杯とすべきかもしれない）（720）、打製石斧（721）が出土しているほかに 70 片あまりの土器細片が散在する状況で出土している。弥生時代前期の遺構である。

SK Ⅳ 06

Ⅳ区スタジアム部分で検出した土坑である。直径 160 ～ 170cmの円形で、深さ 24cm、皿状の断面形である。埋土中に 28㍑コンテナ１／４箱分の遺物と砂岩亜円礫数点が散在する状況で出土している。第 117 図 722 ～ 733 は SK Ⅳ 06 出土の遺物実測図である。722 は外上方に延びる頸部から緩やかに湾曲する口縁をもつ壷で、口縁部内面にヘラ描きの山形文、３条の突帯を付している。723 は胴部中位付近に最大径をもち、縦方向の算盤玉状の胴部から短く開く口縁をもつ壷である。724 ～ 730 は甕、731 は甑、732 は打製石庖丁、733 は円盤状石製品である。未図化遺物も弥生時代前期と考えられるもので占められる。



第 117 図　SK Ⅳ 06　平・断面図、出土遺物実測図



第 118 図　Ⅱ区弥生時代後期遺構　平面図

３　弥生時代中期後半～後期

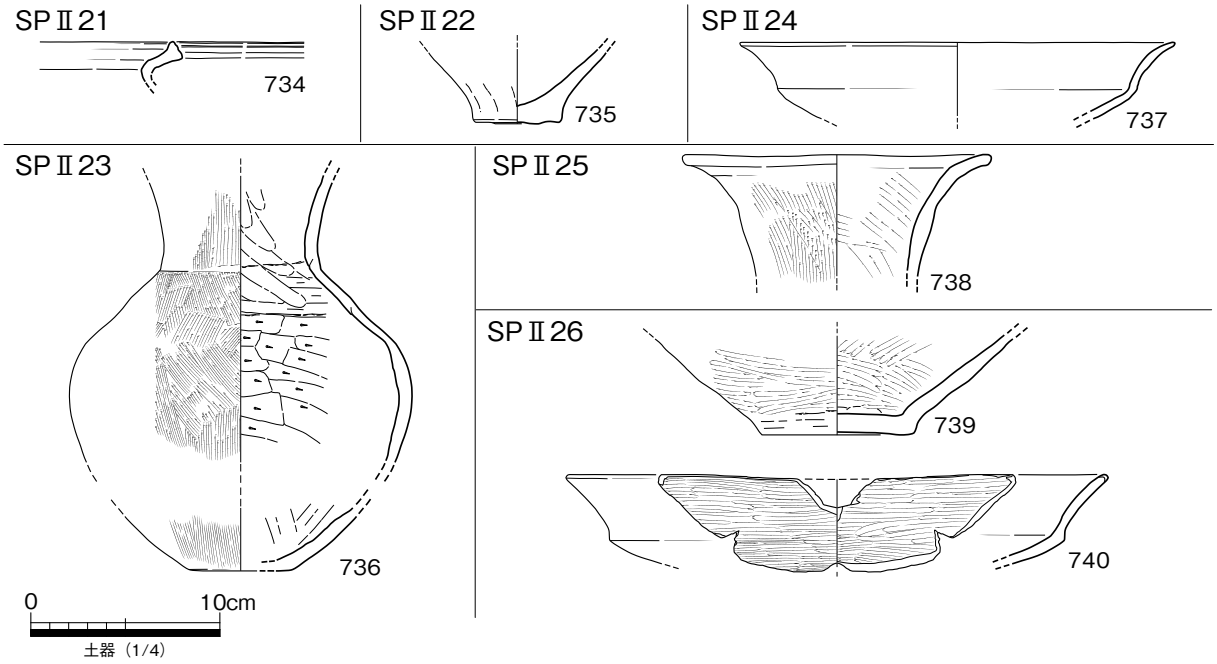
Ⅱ区

柱穴

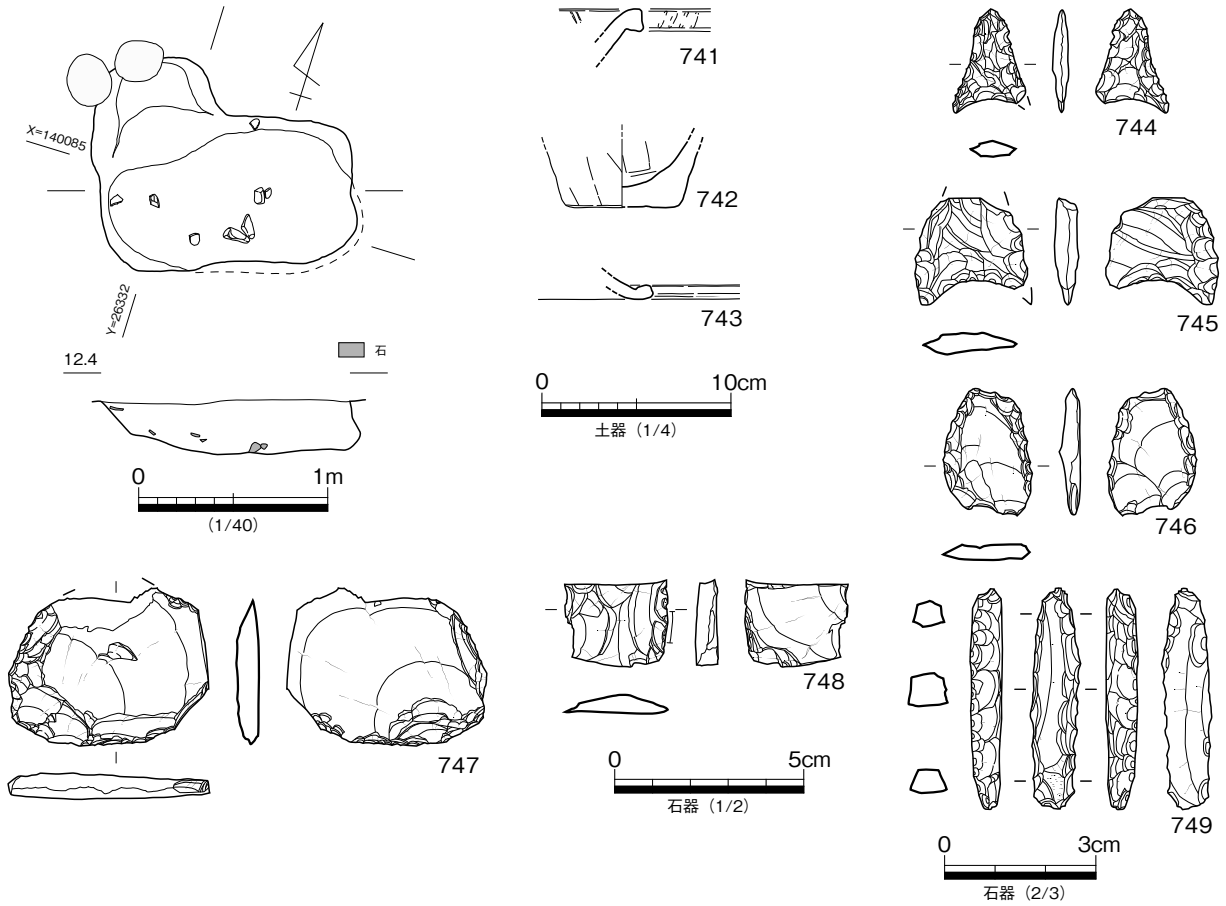
ＳＰⅡ 21 ～Ⅱ 26

第 119 図 734 ～ 737 はⅡ区（平成７年度調査）で検出したピットから出土した弥生時代中～後期の遺物実測図である。734 は SP Ⅱ 21 出土の甕である。「く」字形に屈曲し端部を上に摘み上げ、端面に擬凹線を施す。735 は SP Ⅱ 22 出土の甕底部である。SP Ⅱ 23 では壷が少し斜めに傾いて据えられた状態で出土している。平底で肩の張る胴部から外傾して立ち上がる頸部をもつ。737 は大きく外反する口縁の高杯である。

738 ～ 740 はⅡ区（平成６年度調査）で検出したピットから出土した弥生時代後期の遺物実測図である。738 は SP Ⅱ 25 から出土したもので、長頸壷の口縁部である。739、740 は SP Ⅱ 26 から出土したもので、739 は前期の壷底部と思われる。740 は外反する口縁をもつ高杯である。なお、SP Ⅱ 26 は明瞭なピットではなく、SR Ⅱ 02 付近で検出された不整形な落ち込み状の遺構である。



第 119 図　ＳＰⅡ 21 ～Ⅱ 26　出土遺物実測図

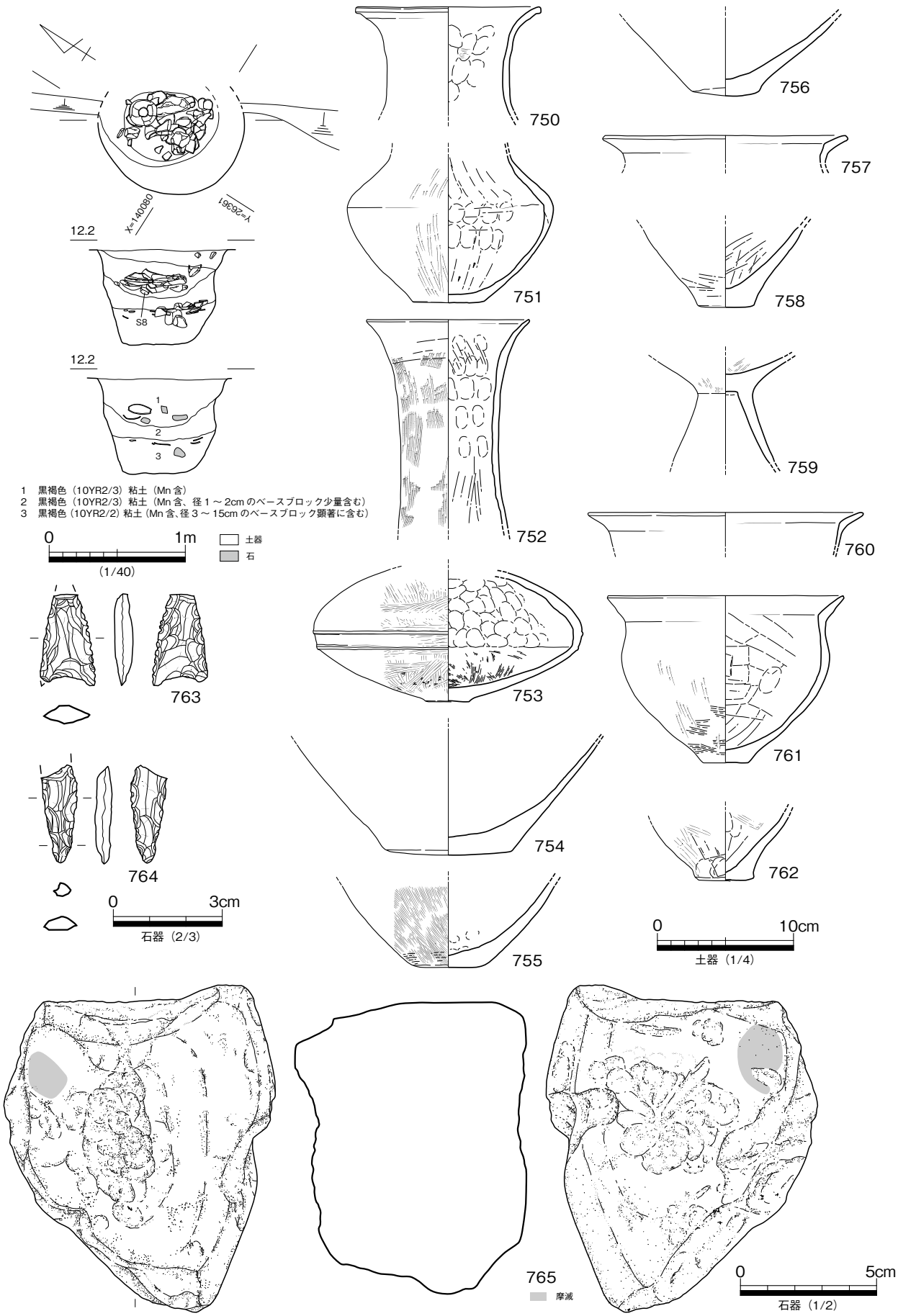


第 120 図　SK Ⅱ 19　平・断面図、出土遺物実測図

土坑

SK Ⅱ 19

Ⅱ区（平成７年度調査区）で検出した土坑である。長辺 130、短辺 77㎝の隅丸長方形の西北に幅 70、長さ 30㎝ほどの突出部を付す形状である。深さ 28㎝、西側は緩やかに立ち上がるが、東側は抉り込む断面形である。微量の弥生土器片が出土している。第 120 図 741 は壷の口縁としたが器台とすべきかもしれない。摩滅が著しいが口縁端面に刻み目が施されるようである。742 は弥生時代前期の甕、743 は高杯の脚端部と考えられる小片である。744、745 は石鏃、746 は石鏃未成品と考える。747 はわずかに摩滅が見られることから削器とした。また、748 は小片のため器種はよくわからない。749 は小型で棒状の角錐状石器である。サヌカイト製の横長剥片を素材とし、素材剥片の周縁から整形加工を加え、棒



第 121 図　SK Ⅱ 20　平・断面図、出土遺物実測図

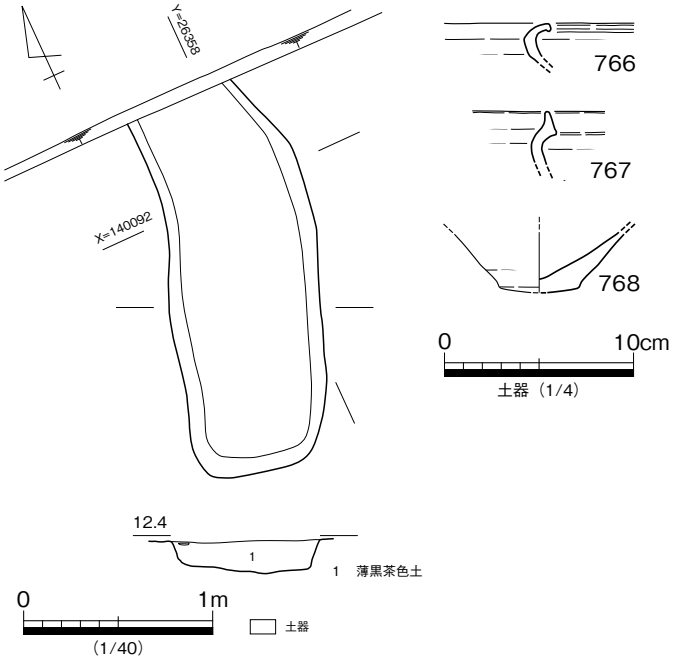
状の形状に仕上げている。

SK Ⅱ 20

Ⅱ区で検出した土坑である。平成６年度と７年度の調査区境に位置し、西側５分の３ほどが遺存する７年度調査区で調査記録が残っている。SK Ⅱ 20 は直径約１ｍの円形で、断面形は筒形をなし、深さ約 70cmの規模である。大きく３層に分層され、下層の上部、上層の下部に遺物および自然礫が集中している。第 121 図 750 ～ 765 は SK Ⅱ 20 出土の遺物実測図である。765 が下層出土、754 の破片の一部が下層出土である以外はすべて上層出土である。このほかの上層出土の遺物は、図化遺物以外は破片が少量、下層出土の遺物は摩滅する破片が少量あるのみである。

750 ～ 753 は壷である。752 は筒状の頸部からラッパ状に開く口縁を有する長頸壷である。753 は長頸壷の胴部で、算盤玉形の胴部最大径付近に２条の突帯を付している。754 は弥生時代前期の壷の底部、755、756 は丸底化の進んだ壷の底部である。このほかに甕の口縁部（757）と底部（758）、高杯（759）、鉢（760 ～ 762）が出土している。765 は下層出土の凹石である。砂岩亜角礫を打ち欠いて犬頭大の台石としたもので、両面に凹みが見られる。

SK Ⅱ 20 出土遺物は、一部前代の混入と考えられるものがある以外は真鍋編年Ⅴ -4 期に収まるものと考えられる。上層の遺物は出土状況図や写真に示すとおり据え置きや投棄（出土状況からは後者の可能性を考える）といった人為によることが明白で、年代を確実に示す遺構である一方、弥生時代前期の遺構の埋土とよく似ており、埋土では前期か後期かを分離できないことがわかる。なお、SK Ⅱ 20 は湧水層までは掘削していないため井戸としての機能は考えにくい。



第 122 図　SK Ⅱ 21　平・断面図、出土遺物実測図

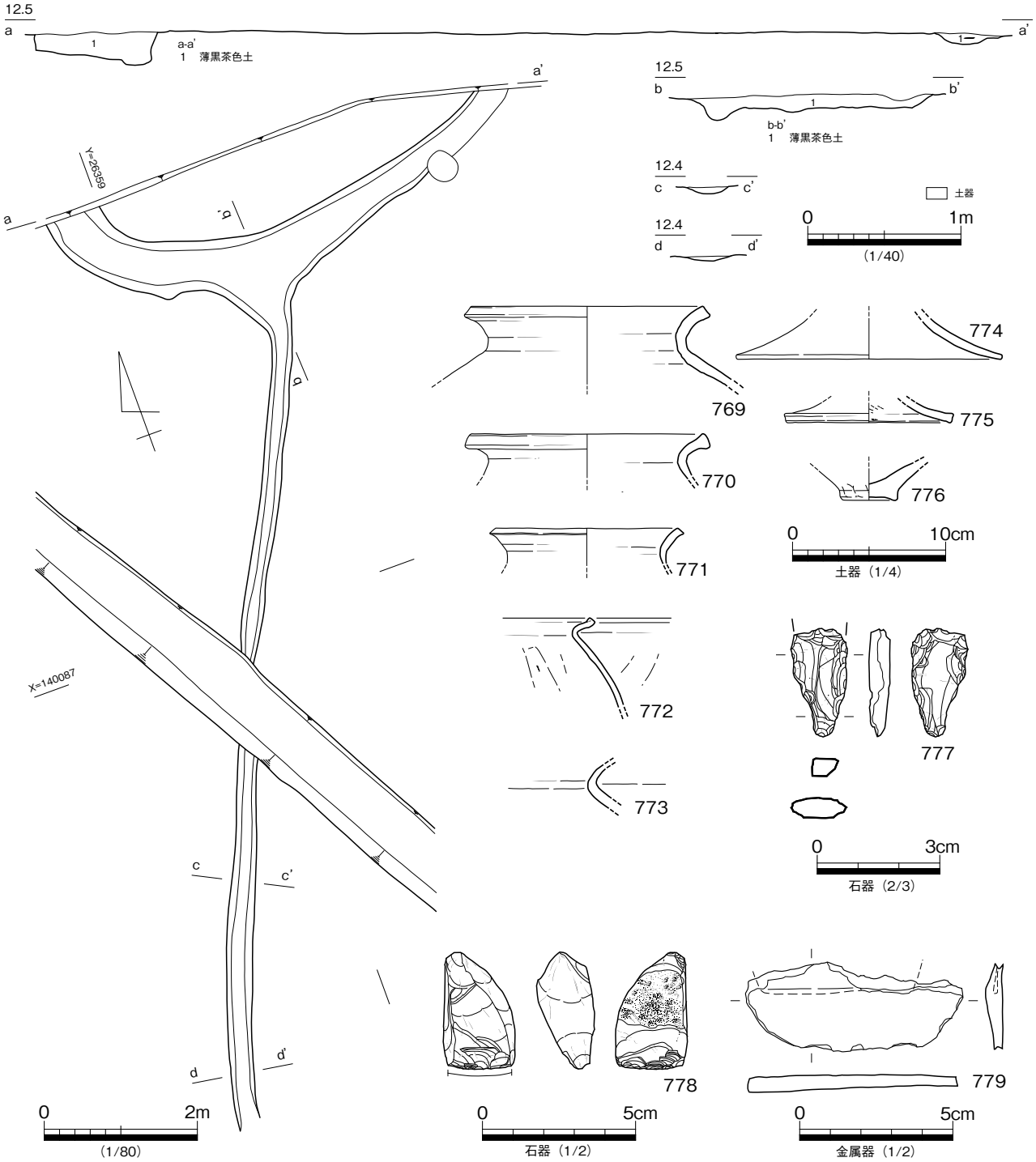
SK Ⅱ 21

Ⅱ区（平成６年度調査）で検出した土坑と考えられる遺構である。長辺２ｍ以上、幅 80cmのわずかに湾曲する隅丸長方形で、北側は調査区外に延びる。断面形は皿形で深さ 18cmを測る。後述の SD Ⅱ 02 に隣接するが前後関係があるかどうかは不明である。28リットルコンテナ５分の１ほどの遺物片が出土している。いずれも小片で、弥生時代後期のものを主体とする。

溝状遺構

SD Ⅱ 02

Ⅱ区で検出した溝状遺構である。平成６，７年度調査区の境界付近を座標北から東へ 24° 振った方向で直線状に流れ、北側で円弧状に流れる溝状遺構と接続する。検出範囲における平面形は「刺又」状を呈する。円弧状の溝状遺構は調査区外に延びる。直線部分は幅 18 ～ 22、深さ４㎝ほどの規模で、断面形は椀状、検出長約７ｍである。南側は中世の SD Ⅱ 04 付近で消滅する。円弧状部分は、幅 40、深さ



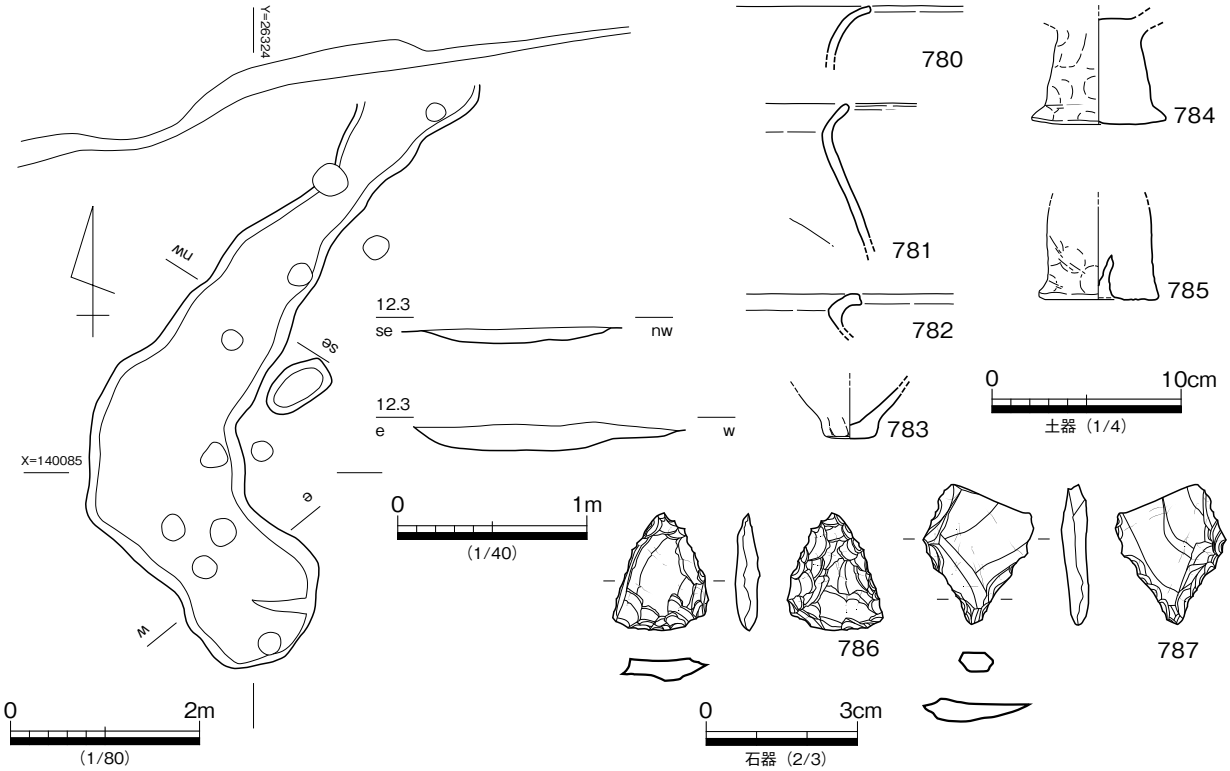
第 123 図　SD Ⅱ 02　平・断面図、出土遺物実測図

10 ～ 16cmほどの規模で、断面形は皿形を呈する。SD Ⅱ 02 からは微量の弥生土器片と青銅製鋤先が出土している。

第 123 図 769 ～ 779 は SD Ⅱ 02 出土遺物の実測図である。769 ～ 773 は甕である。「く」字形に屈曲する短い口縁で、端部はそのままおさめるものとわずかに肥厚させるものがある。774、775 は高杯の脚端部、776 は鉢、777 は石錐、778 は剝片化した楔形石器とした。下辺にわずかに摩滅が見られることから転用品の可能性がある。

779 は青銅製鋤先と考えられる破片である。出土状況は埋土中から出土した以外の詳細はわからない。先端部の破片と見られ、現状では隅丸形の直線刃で現存幅は 6.9cmである。柄を装着するための「袋」（ソケット）に分岐する部分がわずかに遺存している。青銅製鋤先に見られることのある「袋」基部の突帯の有無は不明である。

遺物は破片が散在する状況で出土しており小片が多い。土器は弥生時代後期に限定され、真鍋編年Ⅴ-4 期に属するものと見られる。

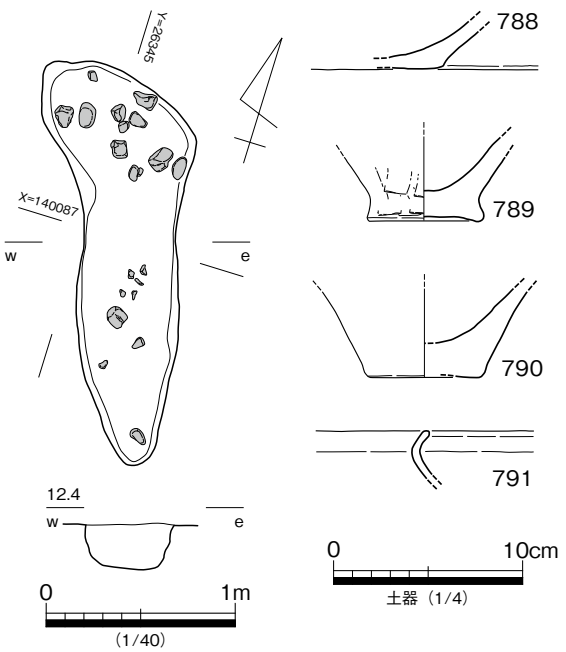


第 124 図　SX Ⅱ 06　平・断面図、出土遺物実測図

その他の遺構

SX Ⅱ 06

Ⅱ区（平成７年度調査）で検出した落ち込みである。座標北から約 35° 東に振った方向の落ち込みが円弧状に南東方向に曲がる平面形をとるが、輪郭は凹凸があり、人為による掘り込みがどうか疑わしい。北側は調査区外に延びる。幅 50 ～ 160、深さ 12cmほどの規模で、断面形は浅い椀状を呈する。28ﾘｯﾄﾙコンテナ１／４箱ほどの遺物片が出土している。小片が主体で、弥生時代前期のものと後期のものが混在している。第 124 図 780 ～ 782 は甕の小片、783 は鉢、784、785 は支脚である。786 は一側縁が未調整

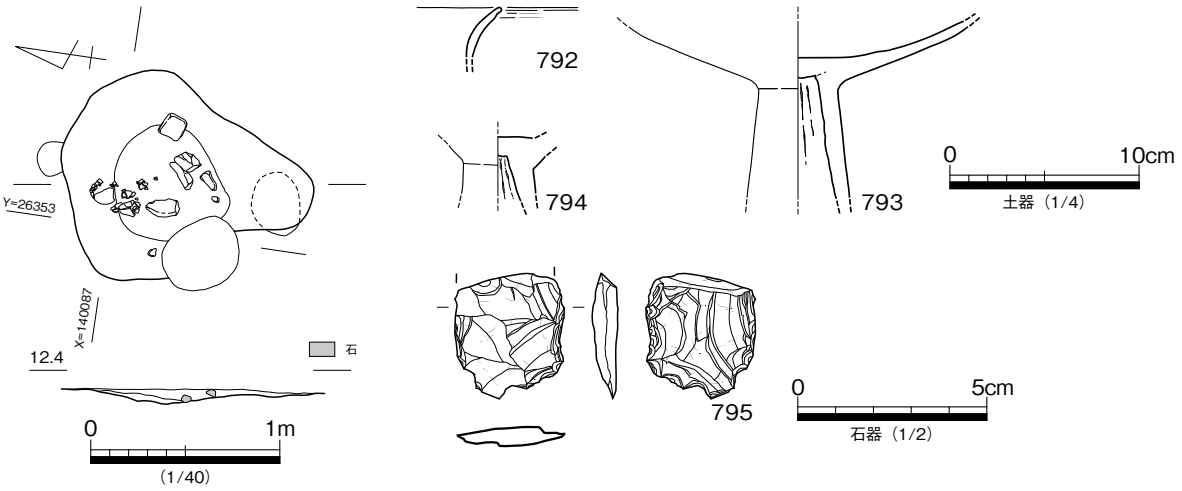


第 125 図　SX Ⅱ 07　平・断面図、出土遺物実測図

のため石鏃の未成品と考える。

SX Ⅱ 07

Ⅱ区（平成７年度調査）で検出した落ち込みである。平面形は長軸 2.2、短軸 0.5 mほどの規模の不整形、断面はＵ字形で 22㎝の深さを測る。微量の弥生時代前期、後期の土器片が出土している。第 125 図 788 は壷底部、789、790 は甕底部で、789 は円盤状でわずかに上げ底となる。791 はかろうじて形態のわかる摩滅する小破片で、弥生時代後期の甕口縁部である。



第 126 図　SX Ⅱ 08　平・断面図、出土遺物実測図

SX Ⅱ 08

Ⅱ区（平成７年度調査区）で検出した落ち込みである。底場は１ｍほどの直径の円形を呈するが、上場は不整形、断面も深さ 12㎝、掘り込みの不明瞭な断面形で、自然形成か遺構か判然としない。小破片となって摩滅した遺物片が微量出土している。第 126 図 792 は甕の口縁部と考えられる。793、794 は高杯、795 は小片のため器種はわからない。

このほかのⅡ区の弥生時代後期の遺構

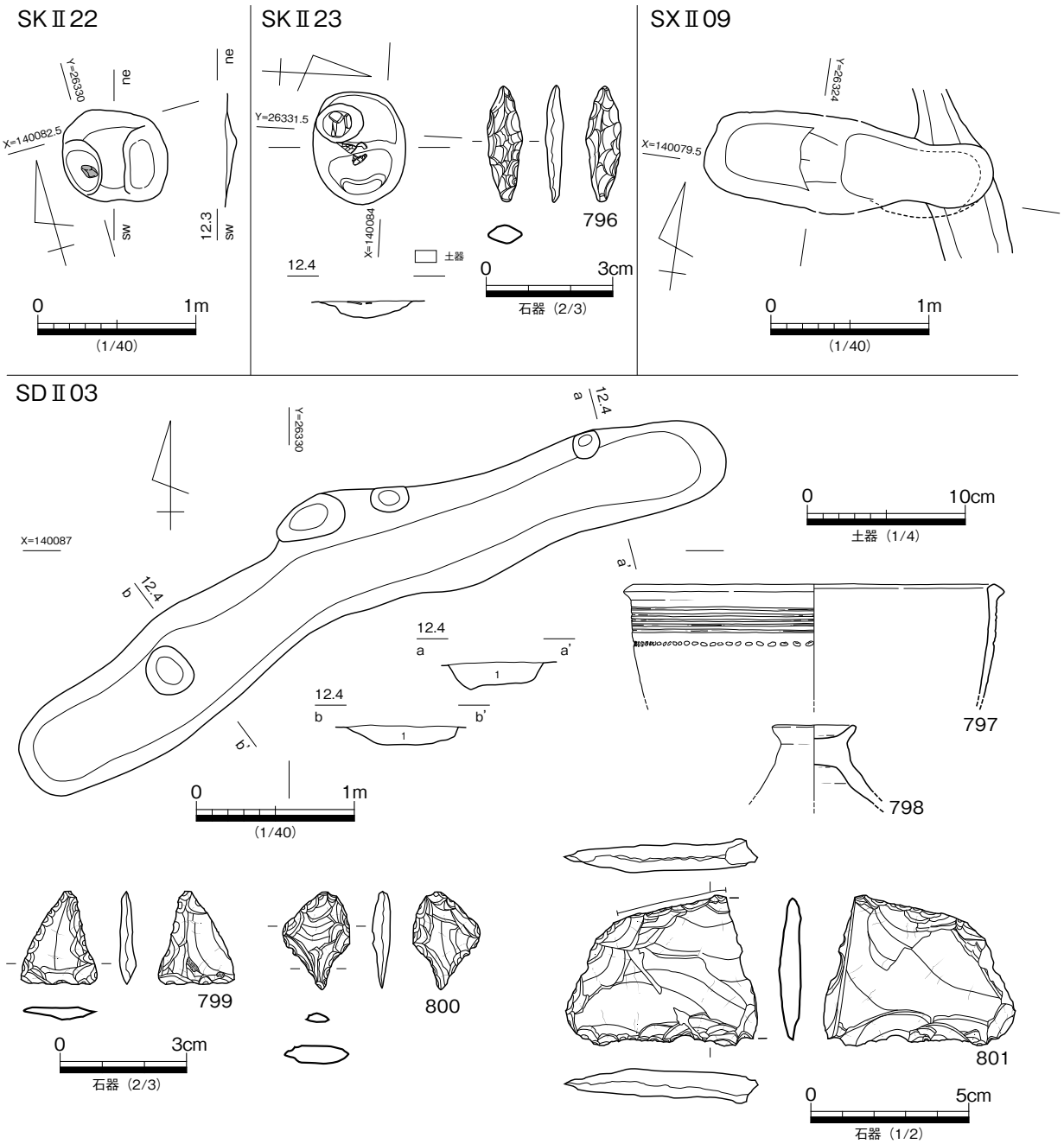
以下の遺構（第 127 図）は弥生時代後期に属すると考えられるものである。

SK Ⅱ 22 は、長径 130、短径 110cmのやや不整な円形で深さ 6 cmの土坑である。きわめて微量の土器小片が出土しているが、弥生時代後期の甕の破片を複数含んでいる。

SK Ⅱ 23 は、長径 142、短径 118cmの円形で、深さ 10cmの土坑である。数点の弥生土器小片が出土しているが、１点は弥生時代後期の甕の口縁部と見られる。

SD Ⅱ 03 は、長さ 4.8、幅 0.6 mほどの規模の、北側にやや凸の平面形の溝状遺構である。深さは 13 cmほどで、断面形は不整形な皿形である。少量の遺物が出土し、図化遺物は弥生時代前期のものであるが、未図化遺物に後期と考えられる小片が含まれる。

SX Ⅱ 09 は、検出長 1.3、幅 0.6 m（東側は後代の遺構に壊される）、西側に深さ 10cmの段があり中央部で 33cmの深さとなる。微量の土器片が出土しているが、弥生時代後期に属すると考えられるものを含む。

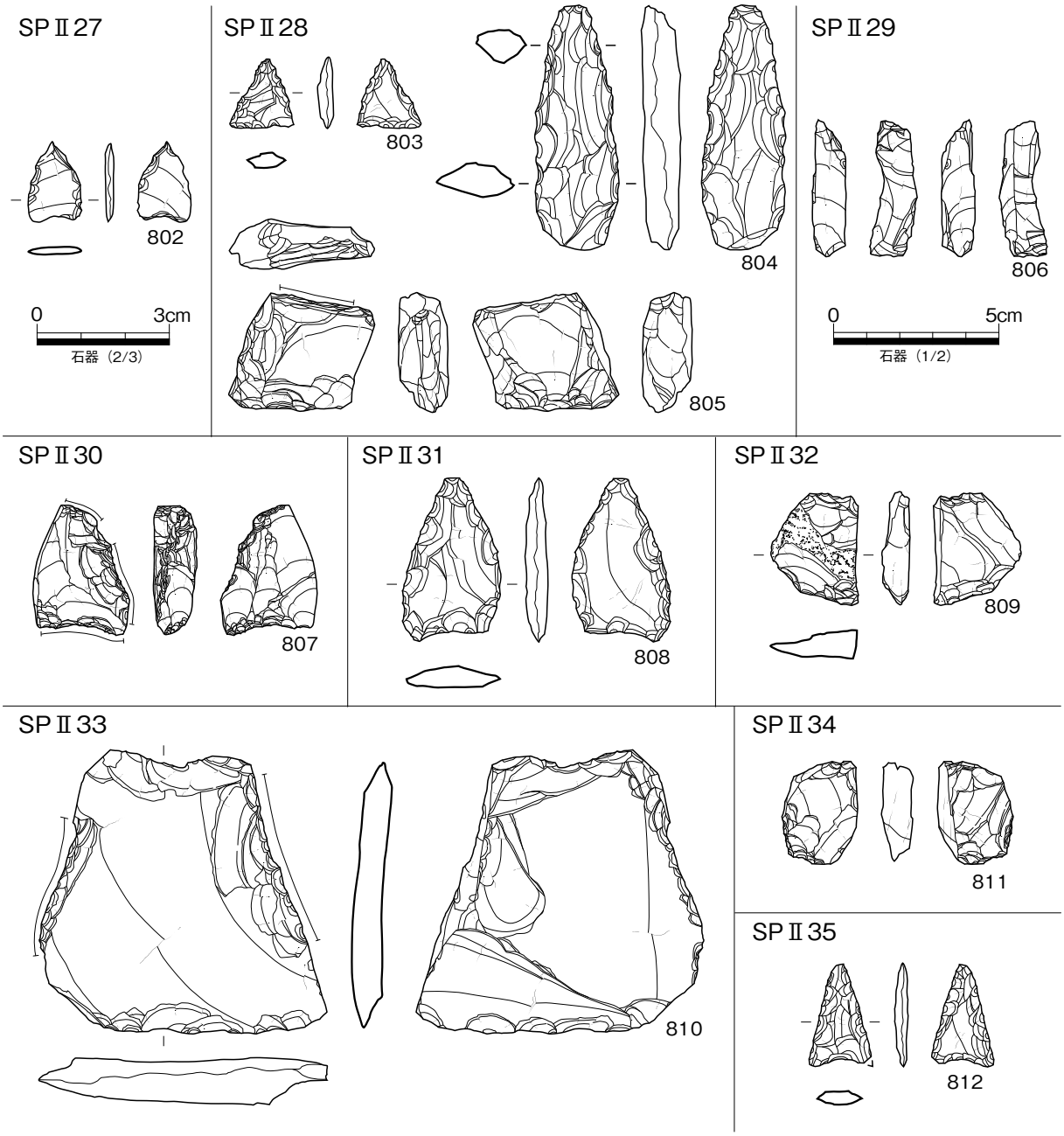


第 127 図　SK Ⅱ 22、Ⅱ 23、SD Ⅱ 03、SX Ⅱ 09　平・断面図、出土遺物実測図

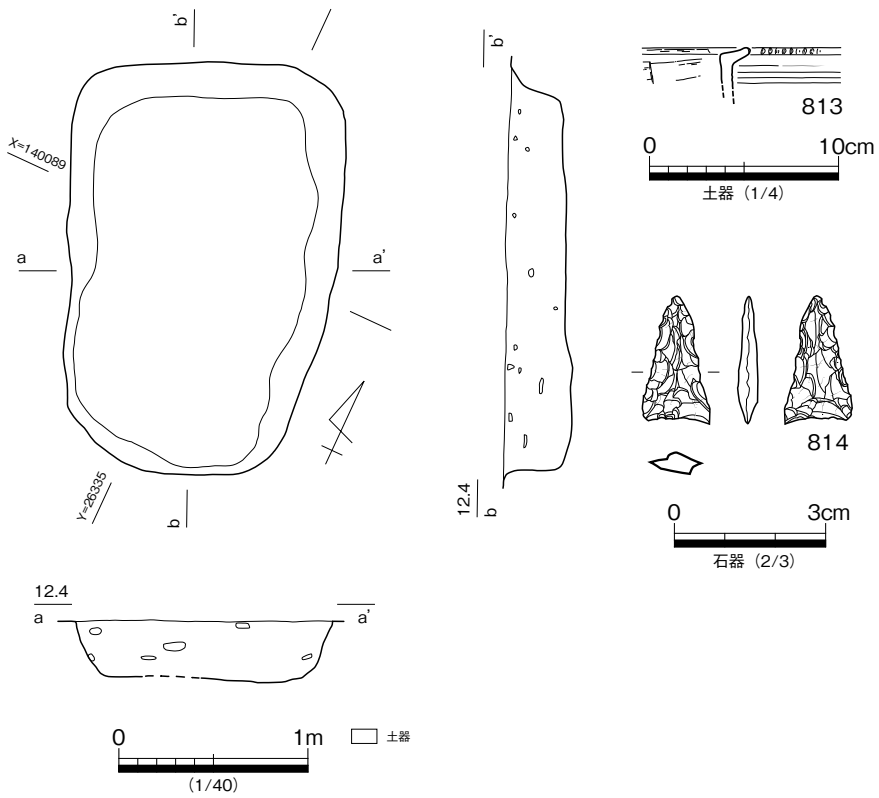
このほかのⅡ区の弥生時代の遺構

以下は、弥生時代の遺構と考えられるものの、詳細な時期の不明な遺構である。第 128 図 802 ～ 811 は、Ⅱ区（平成７年度調査区）で検出したピットから出土した石器の実測図である。SP Ⅱ 27 出土の 802 は、わずかに凹む平基式の石鏃である。薄い剝片を用い簡略な細部調整で整形している。SP Ⅱ 28 から出土した 804 は凸基式石鏃である。剥離は粗く鋭利な利器には仕上がっていない。805（SP Ⅱ 28 出土）、806（SP Ⅱ 29 出土）、807（SP Ⅱ 30 出土）は楔形石器である。上辺に打撃痕や刃潰れ（806 は不明瞭）、下辺に微細な階段状の剥離が見られる。808 は SP Ⅱ 31 出土の石鏃、809（SP Ⅱ 32）は小片のため不明確であるが削器とした。SP Ⅱ 33 出土の 810 は一側縁に抉り、もう一側縁も器壁を薄くし、刃潰しをしていることから打製石庖丁と判断する。811 は SP Ⅱ 34 出土の楔形石器である。

812 は SP Ⅱ 35 出土の石鏃である。SK Ⅱ 24（第 129 図）は、Ⅱ区（平成７年度調査区）で検出した土坑である。長辺 218、短辺 142㎝のやや不整な隅丸長方形で、深さ 32㎝の皿状の断面形をなす。少量



第 128 図　SP Ⅱ 27 ～Ⅱ 35　出土遺物実測図



第 129 図　SK Ⅱ 24　平・断面図、出土遺物実測図

の弥生土器片が出土しているが詳細な時期は特定できない。

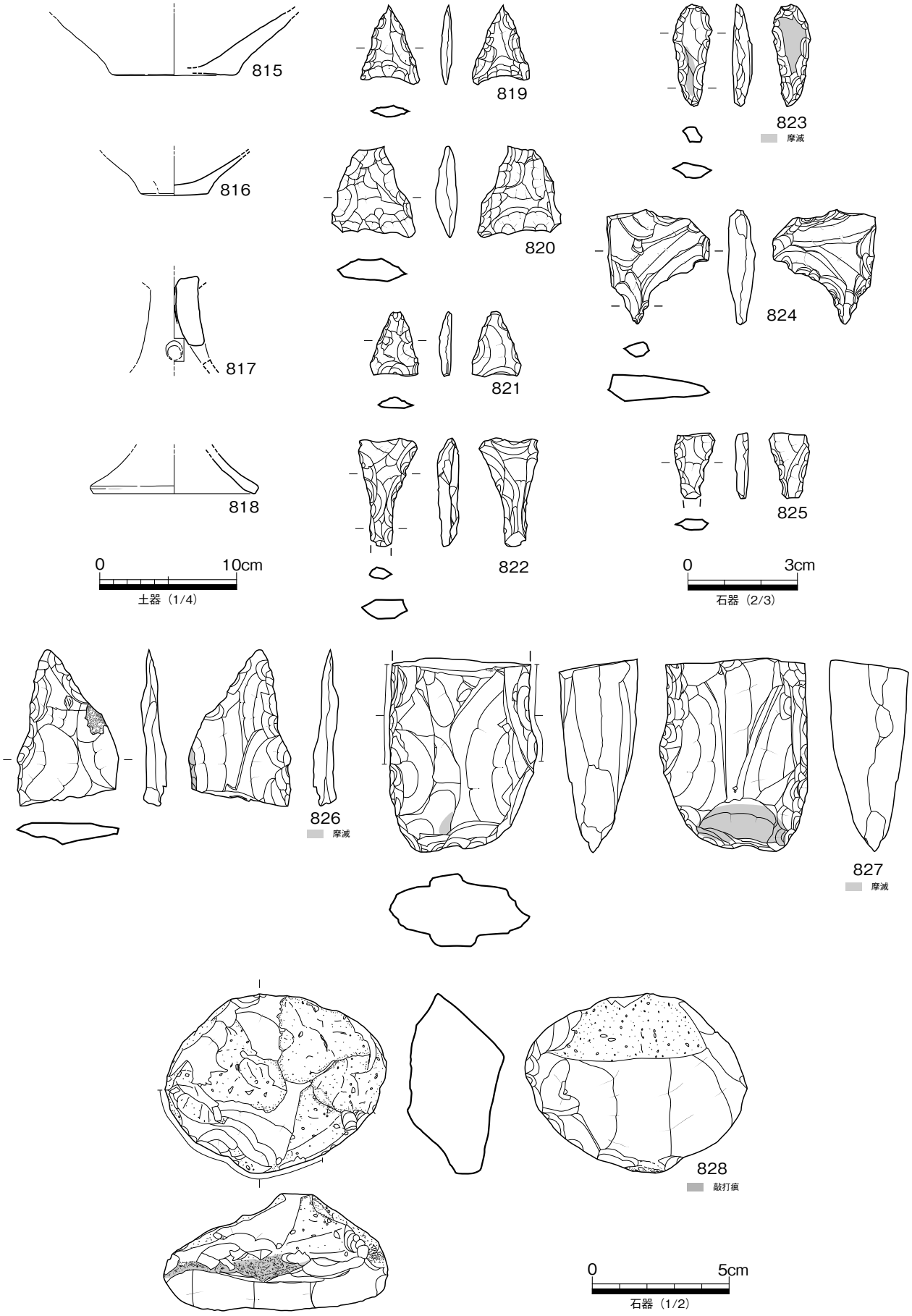
Ⅱ区の弥生時代後期の包含層

Ⅱ区にはSR Ⅱ 03 埋没後に残ったわずかな凹地などに弥生時代後期の包含層が形成されている。第 130 図 815 ～ 828 は平成７年度調査区における包含層出土の遺物実測図である。弥生時代前期と後期の遺物が混在する。石鏃（819 ～ 821）、石錐（822 ～ 825）が出土している。826 は石槍未成品とした。刃部の石材内に異質物の混入箇所があることから作成途中で放棄されたものか。827 は十分な剥離ができず肉厚の打製石斧である。基部を折損する。828 はサヌカイトの敲石である。側縁に敲打痕が認められる。

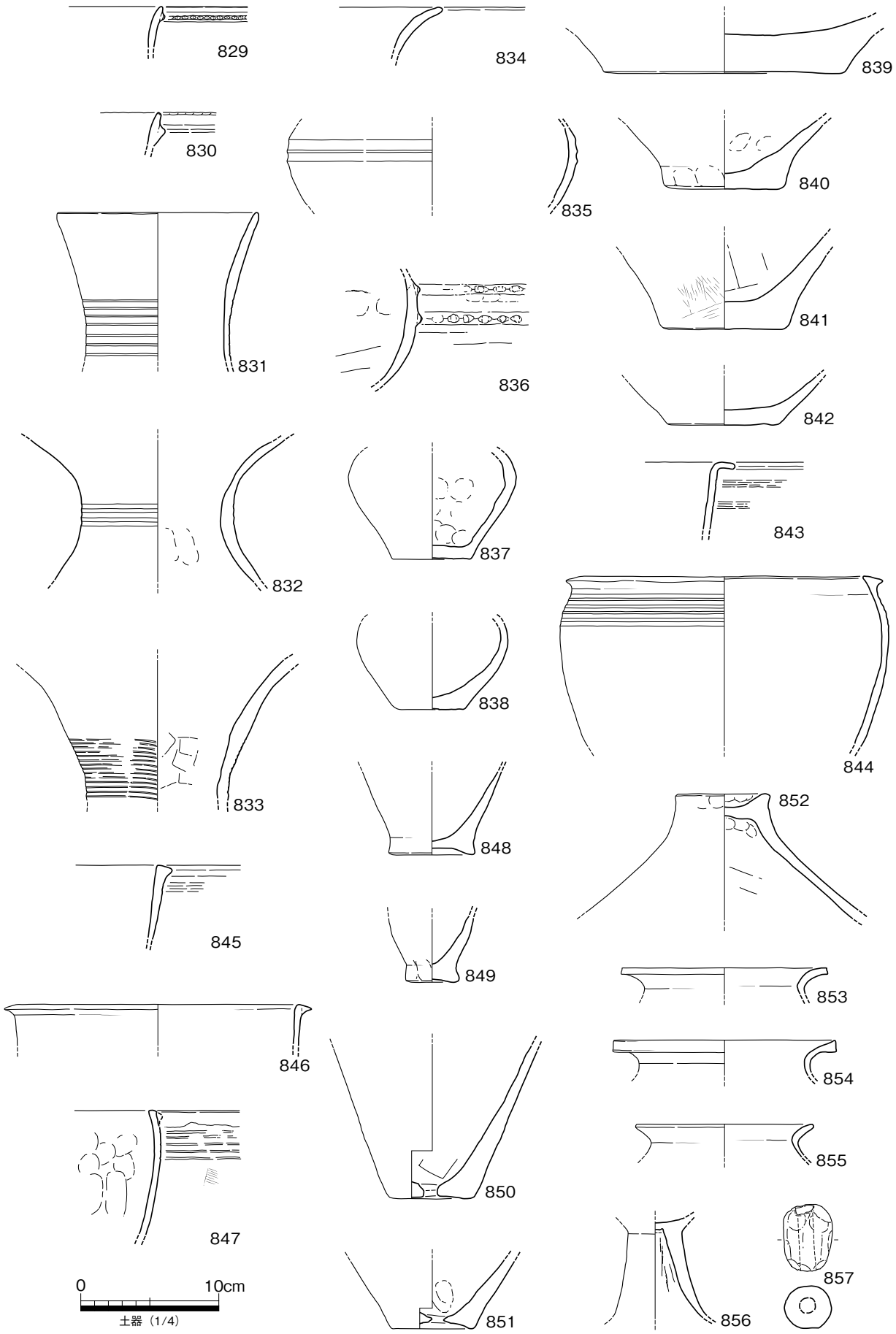
第 131 ～ 133 図は平成６年度調査区においてSR Ⅱ 03 埋没後にわずかに残った凹地に堆積する層中から出土した遺物の実測図である。829、830 は縄文時代晩期の深鉢である。829 は口縁端部より５mm ほど下がった外面に「O」字形の刻み目をつけた突帯が巡る。830 は口縁端部より１㎝下がった外面に突帯を巡らせ、端部に刻み目を施している。831 ～ 834 は弥生時代前期の壺口縁である。831 は頸部に７条以上、832 は頸部に３条のヘラ描き沈線を施す。833 は３条１単位の櫛描文を施す。835 ～ 842 は壺胴部から底部である。胴部最大径付近に 835 は削り出し状の突帯３条、836 は刻み目を付す突帯２条を貼り付けている。843 ～ 847 は甕口縁部である。摩滅するものが多いがヘラ描き沈線を施す個体が多い。848、849 は甕底部、850、851 は甑底部、852 は蓋形土器である。853 ～ 855 は弥生時代後期の甕口縁、856 は高杯、857 は土錘である。

858 ～ 888 は石器の実測図である。858 ～ 871 は凹基式の石鏃である。風化したものが多い。869 は剥片の一側縁のみを細部調整して整形している。870 と 871 は側縁に抉りを入れた五角形鏃である。872、873 は平基式の石鏃、874 は凸基無茎式、875 は凸基有茎式の石鏃である。876 ～ 882 は石錐、883 と 884 は完形の打製石庖丁である。885 は安山岩製（風化する）の打製石斧。刃部に摩滅が見られる。886 は砂岩製の太型蛤刃石斧である。刃部は使用に伴い摩滅している。887 はサヌカイト製の敲石、縁辺が敲打によって潰れている。888 は表裏に砥面の見られる安山岩製の砥石である。

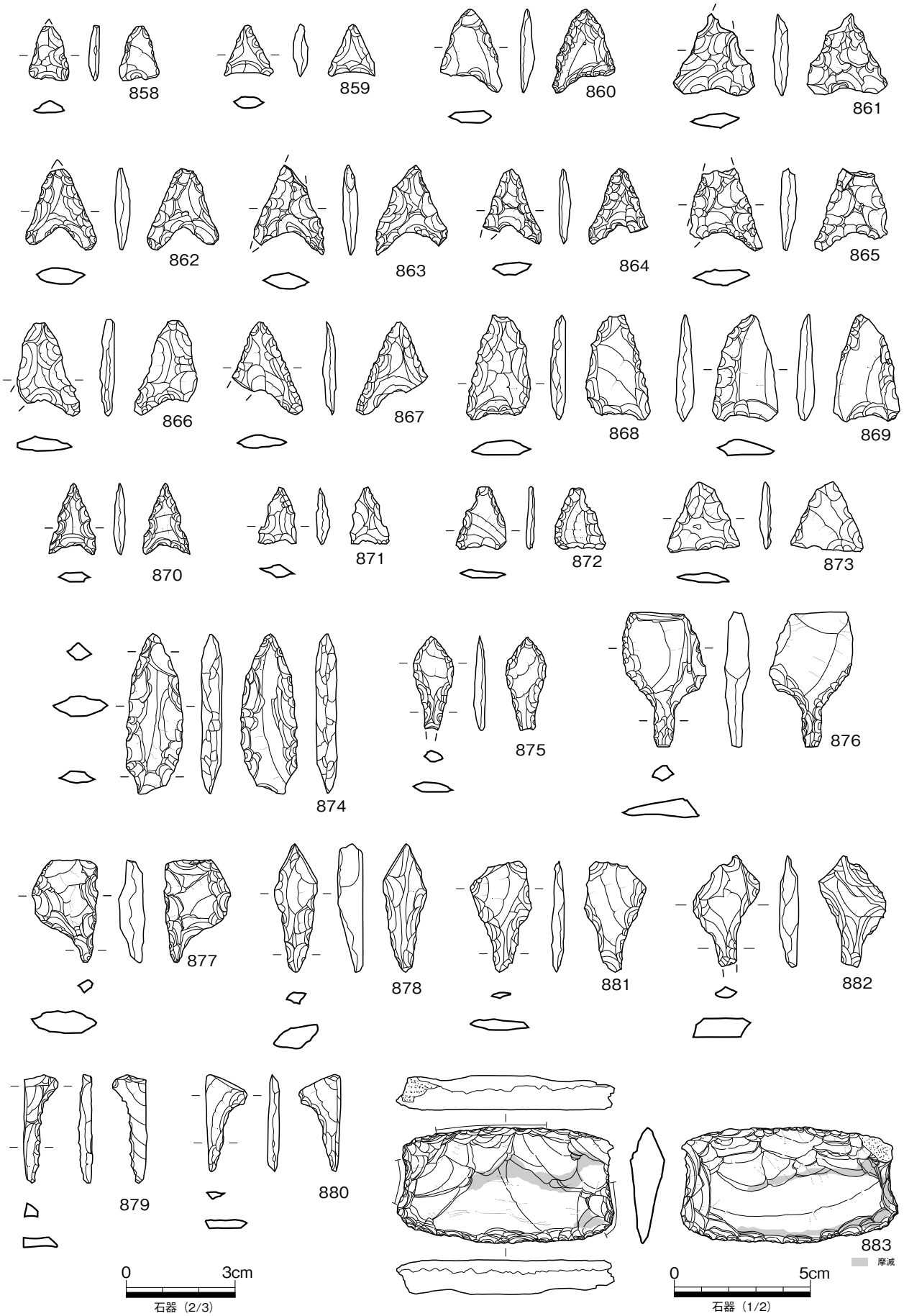
本包含層には縄文時代晩期～弥生時代後期の遺物が包含されている。



第 130 図　Ⅱ区弥生時代後期の包含層　出土遺物実測図 (1)

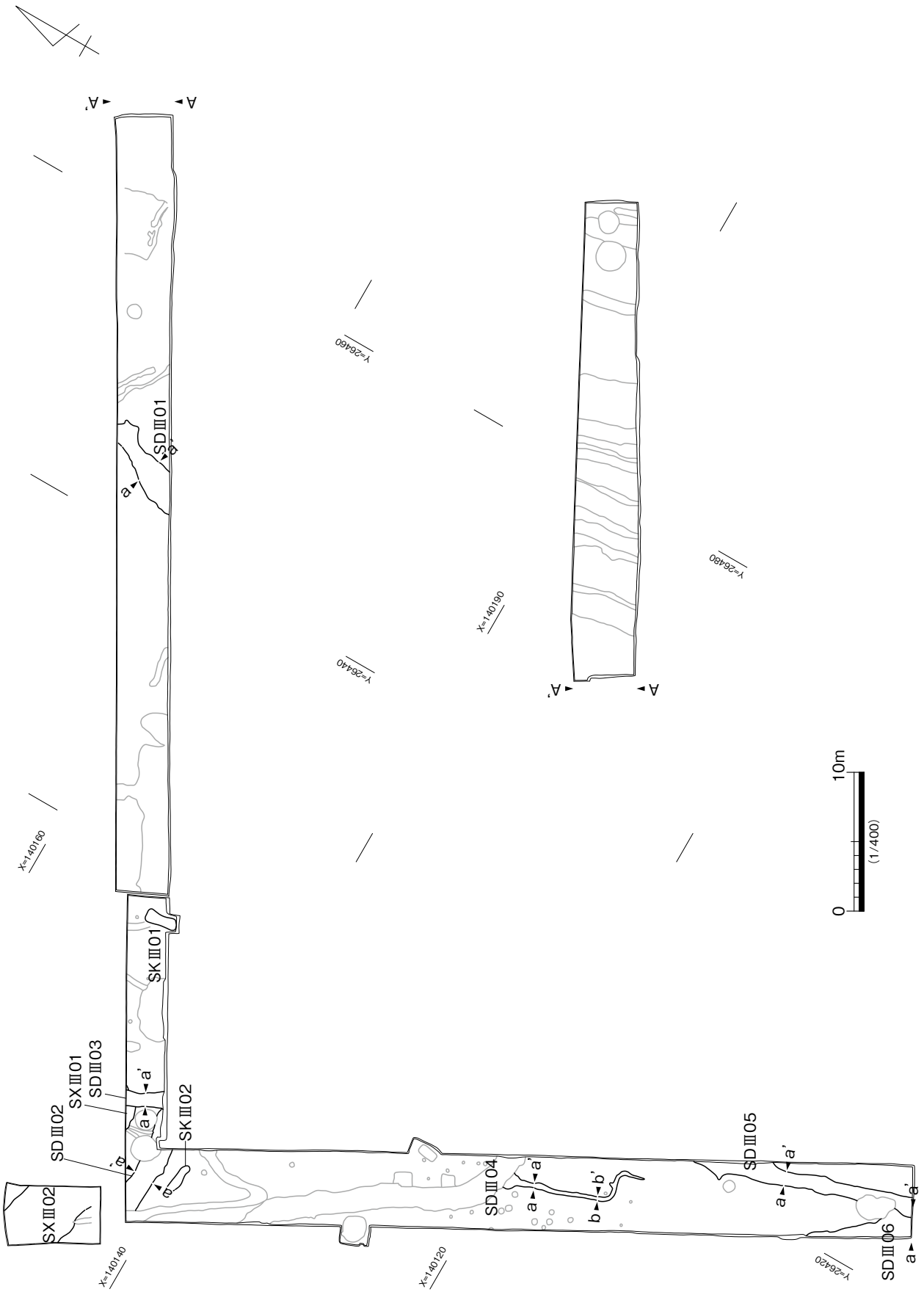


第 131 図　Ⅱ区弥生時代後期の包含層　出土遺物実測図 (2)



第 132 図　Ⅱ区弥生時代後期の包含層　出土遺物実測図 (3)

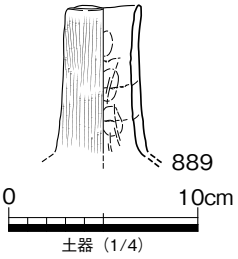
第 133 図　Ⅱ区弥生時代後期の包含層　出土遺物実測図 (4)



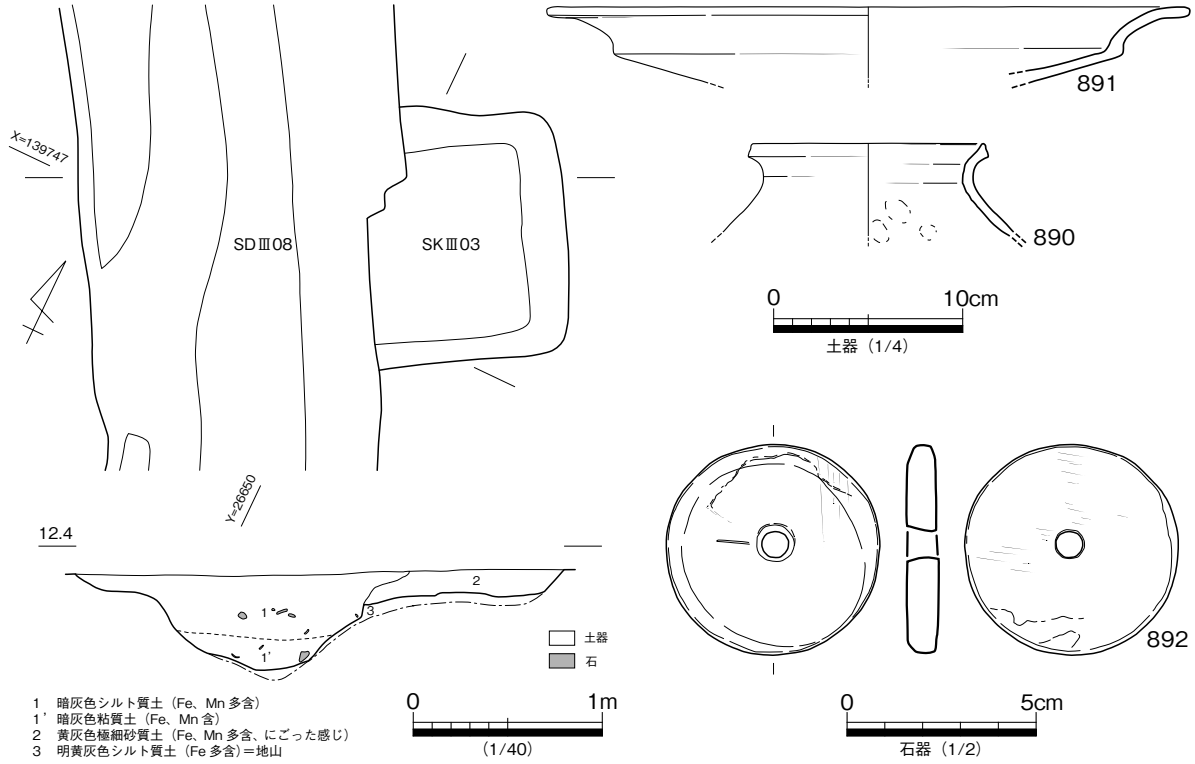
第 134 図　Ⅲ区弥生時代後期遺構　平面図

Ⅲ区（第 134 図）

Ⅲ区の弥生時代後期の遺構について SP Ⅲ 01、SK Ⅲ 03 ～ Ⅲ 06、SE Ⅲ 01、Ⅲ 02、SD Ⅲ 07、Ⅲ 08、次にやや消極的な根拠ながら弥生時代後期の遺構と考えられる SP Ⅲ 02、SD Ⅲ 09 ～ Ⅲ 19 の順で報告する。第 135 図 889 は SP Ⅲ 01 から出土した。Ⅲ区からは 12 基ばかりのピットが検出されているが、明確な時期のわかるものはほとんどない。



第 135 図　SP Ⅲ 01　出土遺物実測図

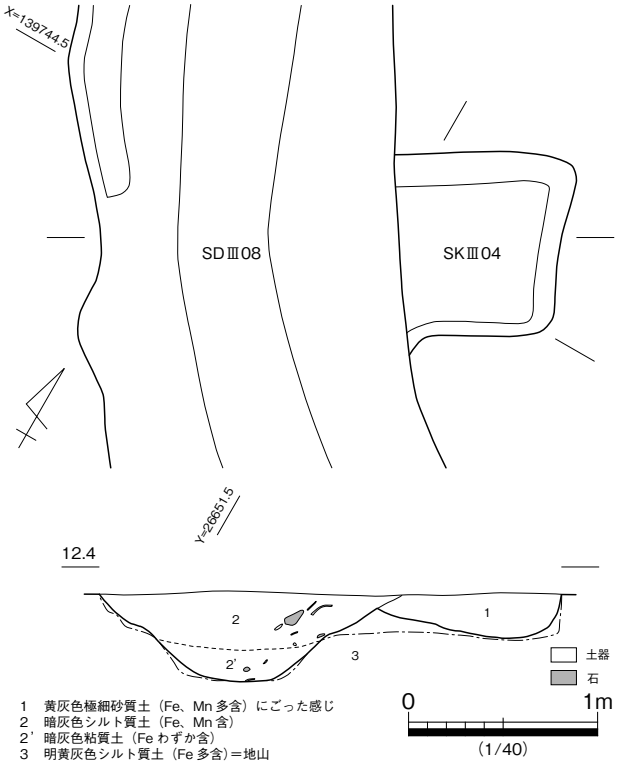


第 136 図　SK Ⅲ 03　平・断面図、出土遺物実測図

土坑

SK Ⅲ 03

Ⅲ区で検出した土坑である。SD Ⅲ 08 に一部を壊される。平面形は矩形と考えられ、残存部の東西幅は 1.1 m、南北幅 1.3、深さ 0.2 mの規模である。断面形は皿状である。遺物小片が微量出土している。第 136 図 890 は明瞭な稜をもたずに緩やかに外湾する口縁で、端部をそのままおさめる甕、891 は大きく外湾する口縁部をもつ高杯である。892 は緑泥岩製の紡錘車である。穿孔は片面からなされている。



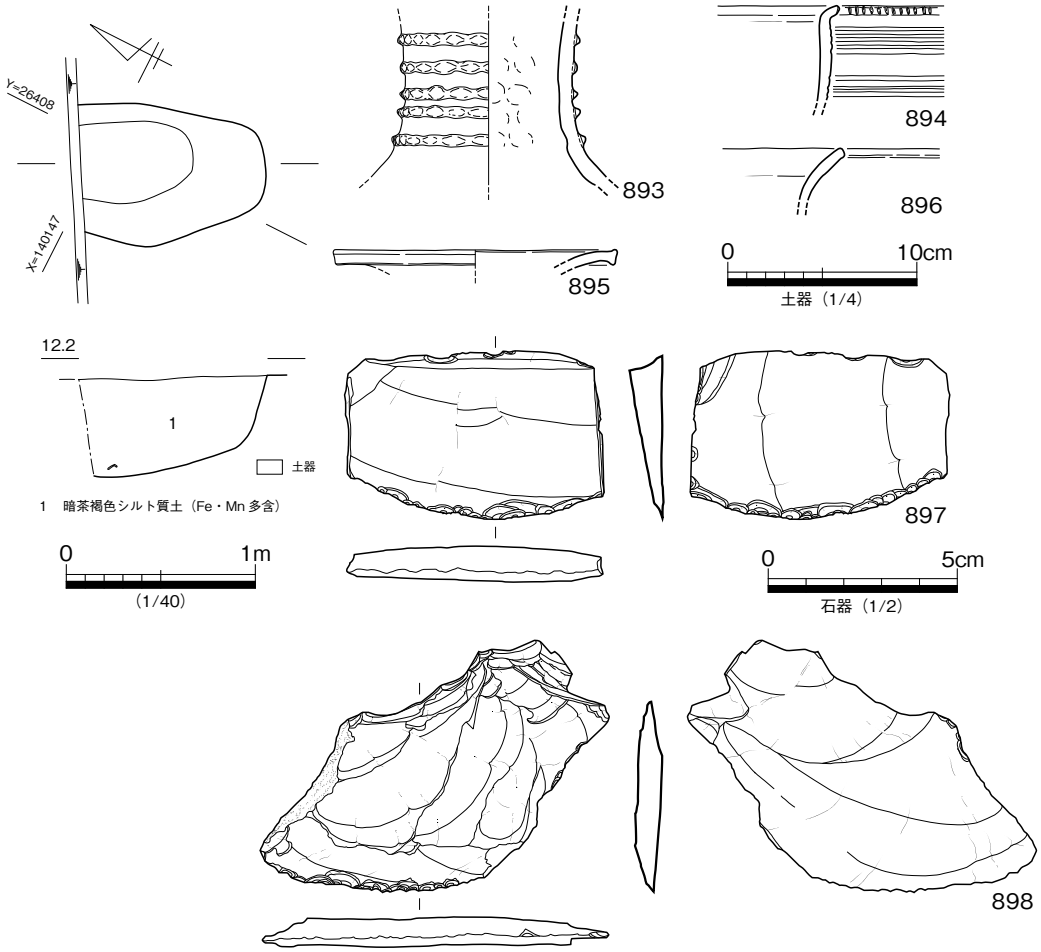
第 137 図　SK Ⅲ 04　平・断面図

SK Ⅲ 04

Ⅲ区で検出した土坑（第 137 図）である。SD Ⅲ 08 に壊される。平面形は矩形と考えられ、残存部の東西幅 1.0 m、南北幅 0.8、深さ 0.24 mの規模である。断面形は東側では急で西に向かって緩やかに浅くなる形状である。遺物片数点が出土したのみであるが、規模・形状、埋土の類似性から２mほど北に所在する SK Ⅲ 03 と同時期の遺構と考える。

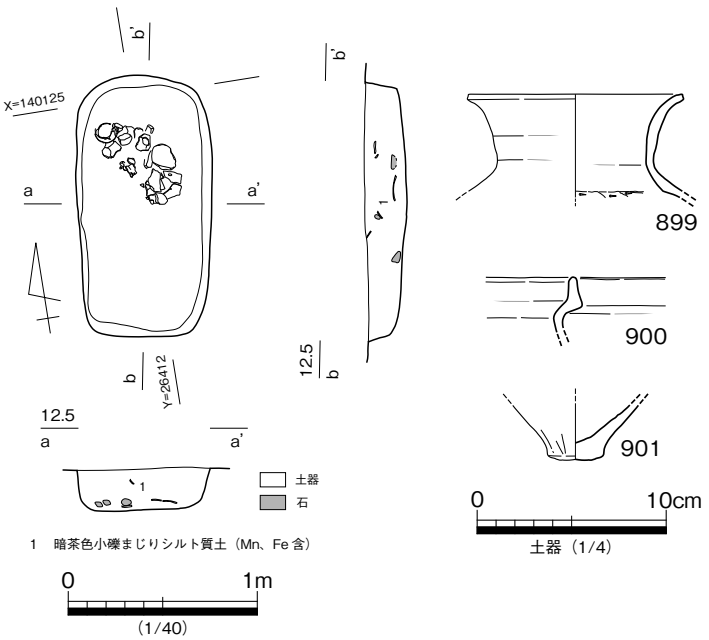
SK Ⅲ 05

Ⅲ区で検出した土坑と考えられる遺構、北側は調査区外に延びる。長辺 1.0 以上、短辺 0.7、深さ 0.5 mの規模で、断面形は



第 138 図　SK Ⅲ 05　平・断面図、出土遺物実測図

箱形を呈する。弥生時代前期を中心に少量の弥生時代後期の遺物の破片が28㍑コンテナ１／８箱分出土している。第138図893は頸部に「O」字形の押捺文のある突帯を５条貼り付けた壷、894は如意状口縁で端部に刻み目、胴部に多条のヘラ描き沈線を巡らせた甕である。895は壷口縁、896は甕口縁の破片である。897、898は削器、898は片面からのみ細部調整を施して刃部としている。SK Ⅲ 05は895、896から弥生時代後期の遺構と判断する。



第139図　SK Ⅲ 06　平・断面図、出土遺物実測図

SK Ⅲ 06

Ⅲ区で検出した土坑である。平面形は隅丸長方形で、長辺方向は座標北から９°東に振る方向である。長辺1.4、短辺0.7、深さ0.2ｍの規模で、断面形は箱形を呈する。底面には接さずに浮いた位置から土器の破片少量、自然礫少量が出土している。弥生時代前期のものを中心とし、後期の遺物が少量含まれる。第139図899は外反気味に立ち上がる頸部から緩く屈曲する短い口縁の壷、900は甕口縁部の小片、901は円盤状に突き出す平底の鉢である。形状から墓の可能性を考え埋土の水洗選別を行ったが、特記する情報は得られなかった。

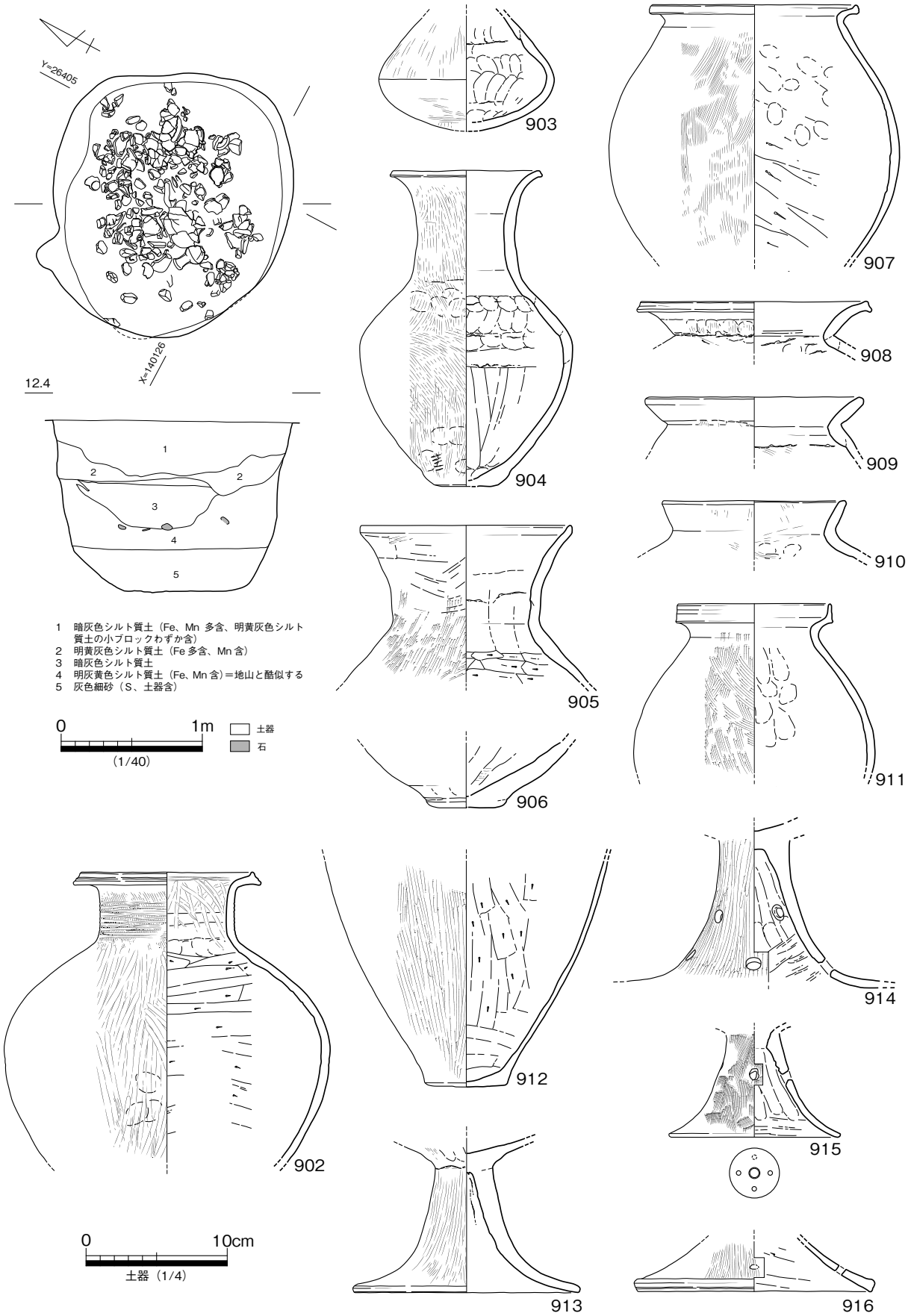
井戸

SE Ⅲ 01

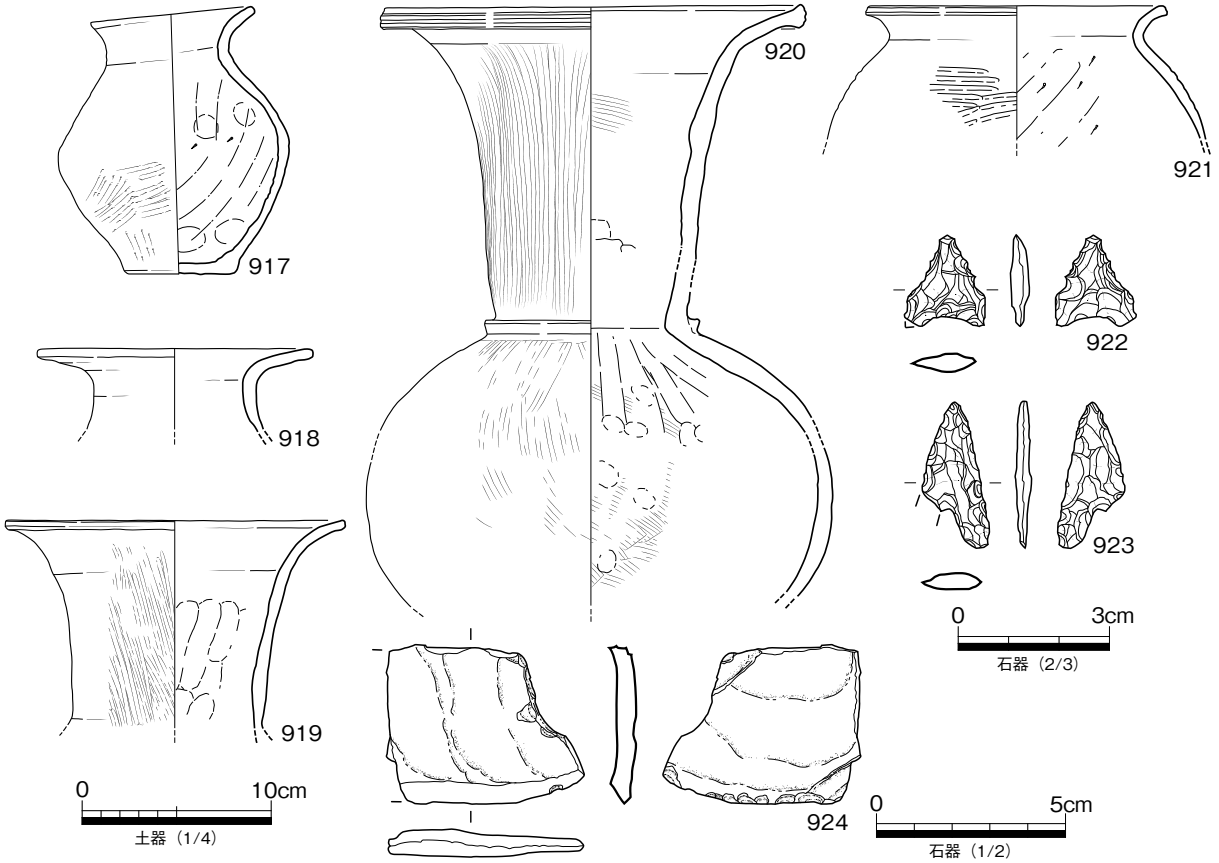
Ⅲ区で検出した井戸である。長径2.0、短径1.8ｍの円形で、深さ1.2ｍ、断面形は筒形を呈する。底は扇状地の基盤層と考えられる砂礫層を掘り込んでおり、調査時でも湧水が見られたことから井戸と判断する。断面図１～３層を上層、４，５層を下層として遺物を取り上げ、28㍑コンテナ２箱分が出土しているが、遺物が集中するのは底と２層下面で、底付近では拳大の砂岩礫と共に、比較的大きな破片の土器が出土し、井戸の機能を喪失し土坑状になった段階で完形近くに復元可能な土器片が集中して投棄されたと考えられる。

第140図902～916は下層出土の遺物実測図である。902の広口壷は口縁端部を肥厚させ、頸部にはハケの後に半裁竹管による沈線が施される。903は長頸壷のイチジク形の胴部である。904の壷は、平底の底部から丸味をおびた肩の少し張る胴部、「ハ」字形にすぼまりながら明瞭な稜を持たずに筒状の頸部に移行し、緩く外反して口縁部をつくる。端部はそのままおさめている。907～911は甕の口縁部である。端部をわずかに上に摘み上げるもの（907）、四角におさめるもの（908）、外湾して開いてから垂直方向に立ち上がる口縁部を有するもの(911)がある。913～916は高杯の脚部である。913、915は「ハ」字形の脚部が大きく開きながら脚端に至る。端部は丸くおさめている。916は香東川下流域産である。

第141図917～924は、上層出土の遺物実測図である。917は弥生時代前期の壷、完形に近いが混入と考えられる。918は広口壷、919、920は長頸壷である。918、919の口縁端部はそのままおさめるが、



第 140 図　SE Ⅲ 01　平・断面図、下層出土遺物実測図



第 141 図　SE Ⅲ 01　上層出土遺物実測図

920 はわずかに肥厚させ沈線２条を巡らす。また、920 は頸胴部の境界に突帯をめぐらせている。921 の甕は、外面にタタキ目を残し、内面は頸部付近までヘラ削りを施している。924 は安山岩製の打製石庖丁である。

SE Ⅲ 01 は、上下層で大きな時期差は見られず、真鍋編年Ｖ－４期に属すると考えられる。

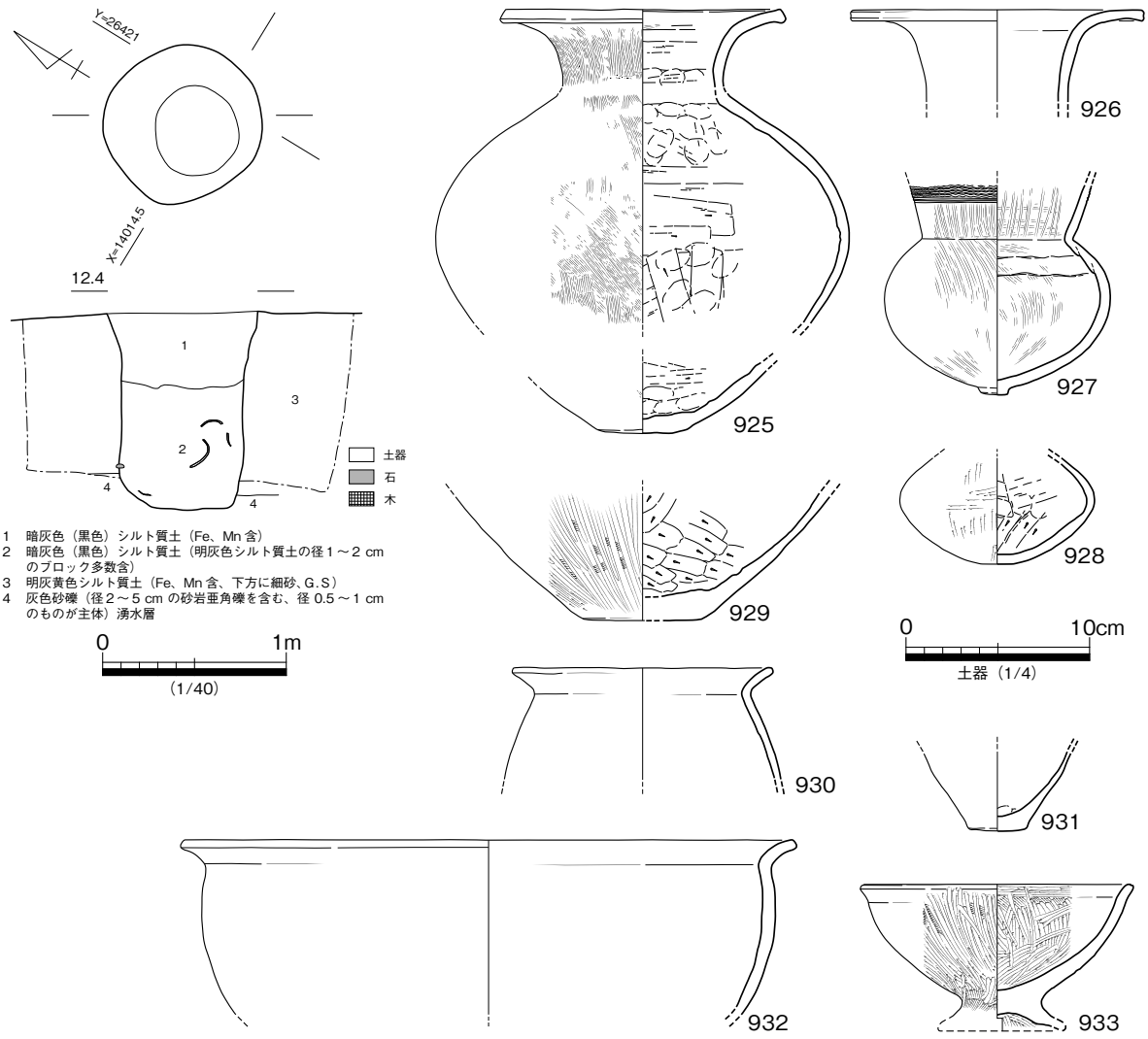
SE Ⅲ 02

Ⅲ区で検出した井戸である。直径 0.8 ｍの円形の平面形で、深さ 1.1 ｍの筒状の断面形である。底面が砂礫層を 15㎝ほど掘り込んでおり、湧水が見られることから井戸と判断する。28㍑コンテナ１箱弱の遺物が出土している。このうち第 142 図 927 を底面直上で検出した以外は、埋土中から接合できない破片となって出土している。925 は緩やかに外反する口縁で、端部をそのままおさめる広口壷である。底部の丸底化が進んでいる。927 はやや偏平な球状の胴部で、底部に径 1.5㎝ほどの痕跡的な円盤を付す。頸部は外上方に立ち上がり、ヘラ描き沈線と櫛描き波状文が巡る。932 の鉢は「く」字形に屈曲し、外上方に向く短い口縁部をもつ。933 は内外面ハケの後にヘラミガキを施した台付鉢である。SE Ⅲ 02 は弥生時代後期終末に下る遺構と考えられる。

溝状遺構

SD Ⅲ 07

Ⅲ区で検出した溝状遺構（第 143 図）である。Ｎ－ 36°－ Ｗ と Ｎ－３°－ Ｗ の方向に Ｖ 字形に屈曲



第 142 図　SE Ⅲ 02　平・断面図、出土遺物実測図

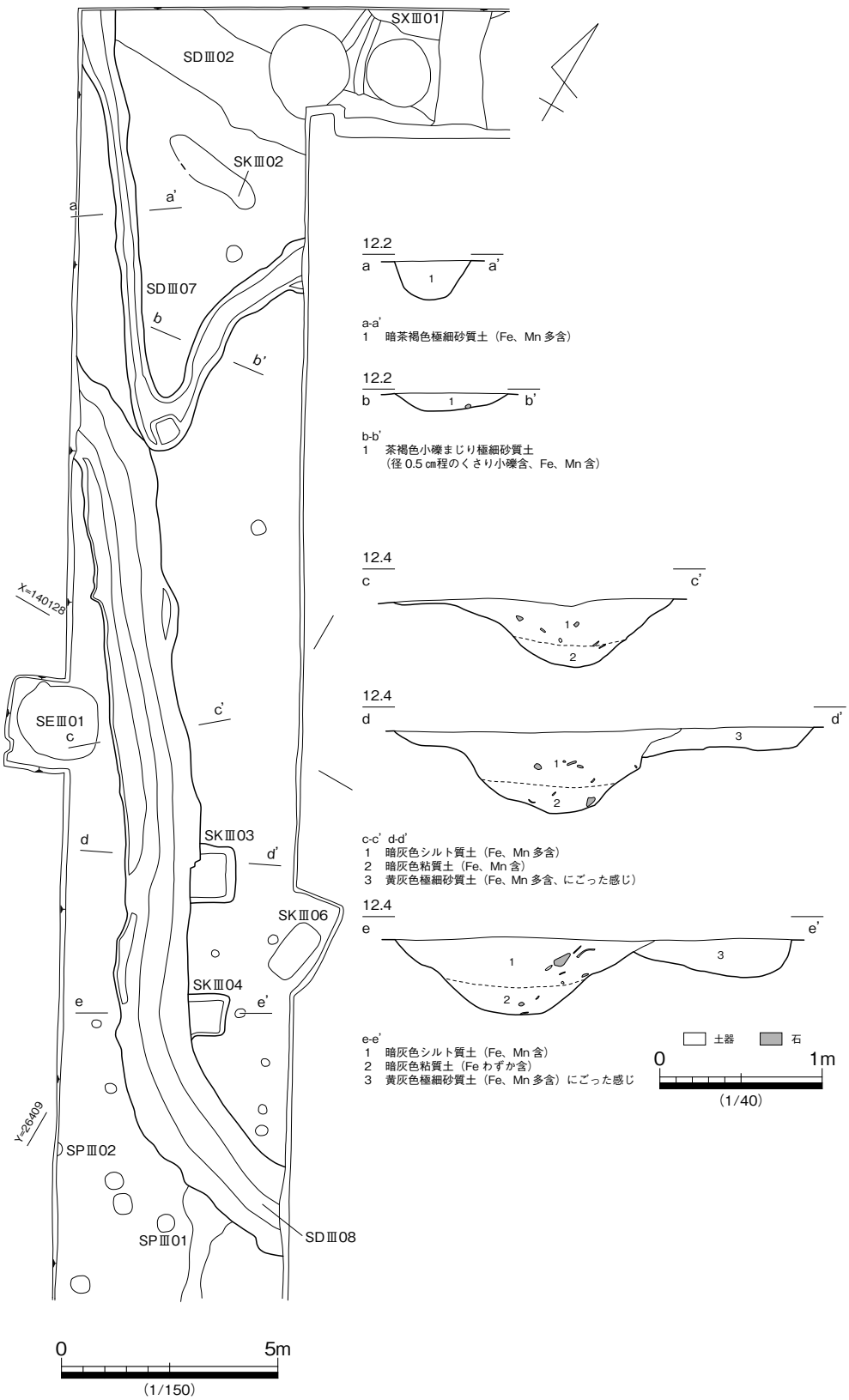
する流路をとる。SD Ⅲ 02 より新しいが、SD Ⅲ 08 との前後関係は不明である。検出長は 15.2 mで、西の流れは幅 0.5、深さ 0.24 m、東の流れは幅 0.7、深さ 0.1 mを測る。断面形は西側では U 字、東側は皿状を呈する。遺物細片が散在する状況で出土している。出土量は小ザル 1 杯ほどである（第 144 図）。

SD Ⅲ 08

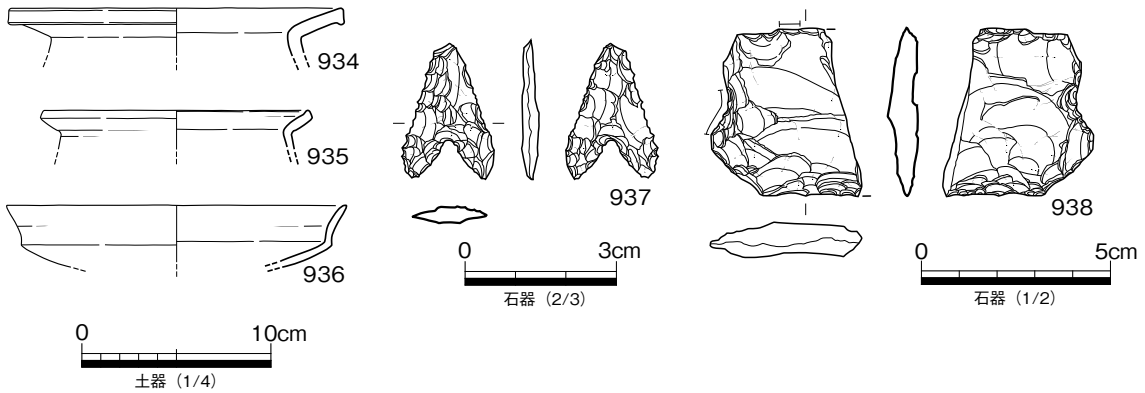
Ⅲ区で検出した、やや蛇行しながら東南から西北方向に流れる溝状遺構（第 143 図）である。検出長は 20.3 mで、幅 1.8、深さ 0.5 mの規模で断面形は椀状を呈する。埋土は暗灰色シルト質土の上層と暗灰色粘質土の下層に分けられ、上層（一部下層も混じる）で 28ﾘｯﾄﾙコンテナ 6 箱、下層で 2 箱の遺物が出土している。遺物は溝の底や斜面などに集中するのではなく、埋土中に破片が散在する状況である。

第 145 図 939 ～ 958 は下層出土の遺物実測図である。939 ～ 944 は壺とした。939 の壺は口縁端部を拡張し竹管文を施す。941 は胴部内面を頸部付近までヘラ削りしており、新しい様相を持つ。942 も新しい様相を持つ。945 ～ 947 は甕、948 ～ 952 は高杯である。953 は石鏃未成品、956 ～ 958 は楔形石器と考える。957 は折損した打製石斧を転用したと考える。

第 146、147 図 959 ～ 993 は上層出土の遺物実測図である。959 は頸部に 2 条のヘラ描き沈線を巡ら



第 143 図　SD Ⅲ 07、Ⅲ 08　平・断面図



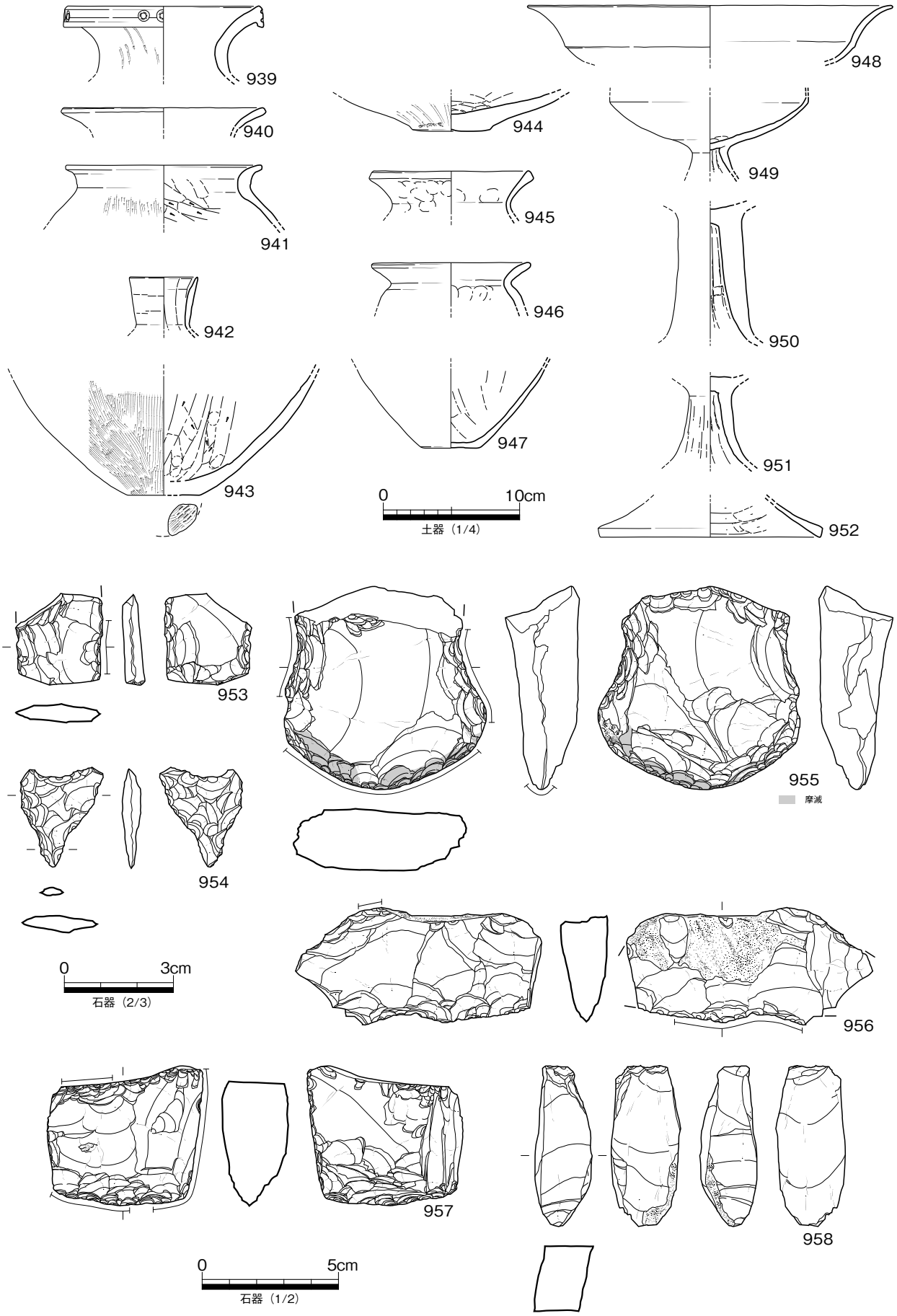
第 144 図　SD Ⅲ 07　出土遺物実測図

す弥生時代前期の壷である。960 ～ 963 は広口壷。口端部の拡張は見られない。960 は頸部に刺突文を巡らす。964 は長頸壷の頸部片である。頸部と胴部の境界に刻み目を施した突帯を貼り付けている。965 は、やや内傾する立ち上がりの二重口縁の壷で、外面に鋸歯文が認められる。SD Ⅲ 08 出土遺物の中では新しい様相をもつ。969 ～ 971 は平底であるが丸底化が進む底部である。973 は香東川下流域産の甕、974 の甕は小さな平底、砲弾形の胴部から緩く折り曲げる、折り曲げ口縁である。976 は尖底頂部に一孔を穿つ独立した器種としての甑である。977 ～ 979 は高杯の口縁部、978、979 は外反する口縁部である。983 は透かし穴を２段に持つもので器台と考える。984 は浅めの半球状の胴部の鉢、底部は欠損するが少し突出した平底の底部がつくと思われる。987 は石匙、988 の削器は刃部にわずかに摩滅が見られる。989 は一部に２㎝近い厚みを残した素材の一辺に刃部をつくった削器である。993 は安山岩製の敲石である。上下端に敲打による割れ、潰れが見られる。

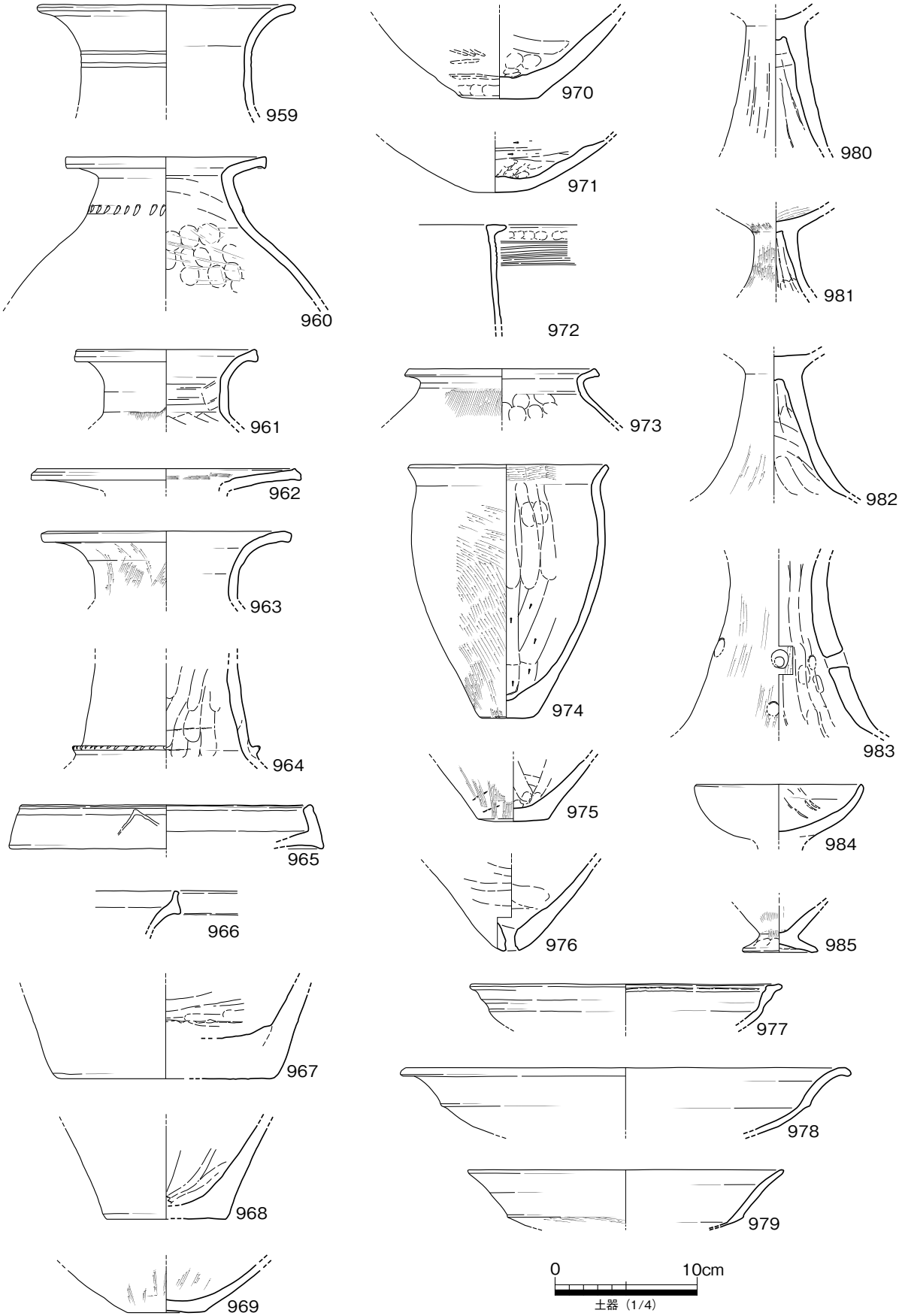
第 148､149 図 994 ～ 1012 は､上下層の分離ができなかった出土遺物の実測図である。994 ～ 996 は壷、997 ～ 999 は甕である。997 は香東川下流域産、998、999 は肉厚の胴部から緩く屈曲する短い口縁である。1000 は不明瞭ながら平底を有する鉢、1001 ～ 1003 は高杯である。1001 は浅く内湾気味に立ち上がる杯部から屈曲して外上方に湾曲する口縁部、脚部は円柱から「ハ」字形に広がり脚端部はそのままおさめている。複数の円形透かし穴がある。1103 は杯接合部から屈曲をもたずに外反して裾端部に至る。端部は外側にやや摘みだすように仕上げている。1004 は器台である。ラッパ状に開く口縁を焼成前に円弧状に切り取り受け部を成形している。

1008 は緑泥岩製の磨製石斧片である。小片のため器種はわからない。1009 は剝片化した楔形石器とした。SD Ⅲ 04 出土の 651 と遺構間で接合している。1010 は石核、1011、1012 は２次加工のある剝片とした。

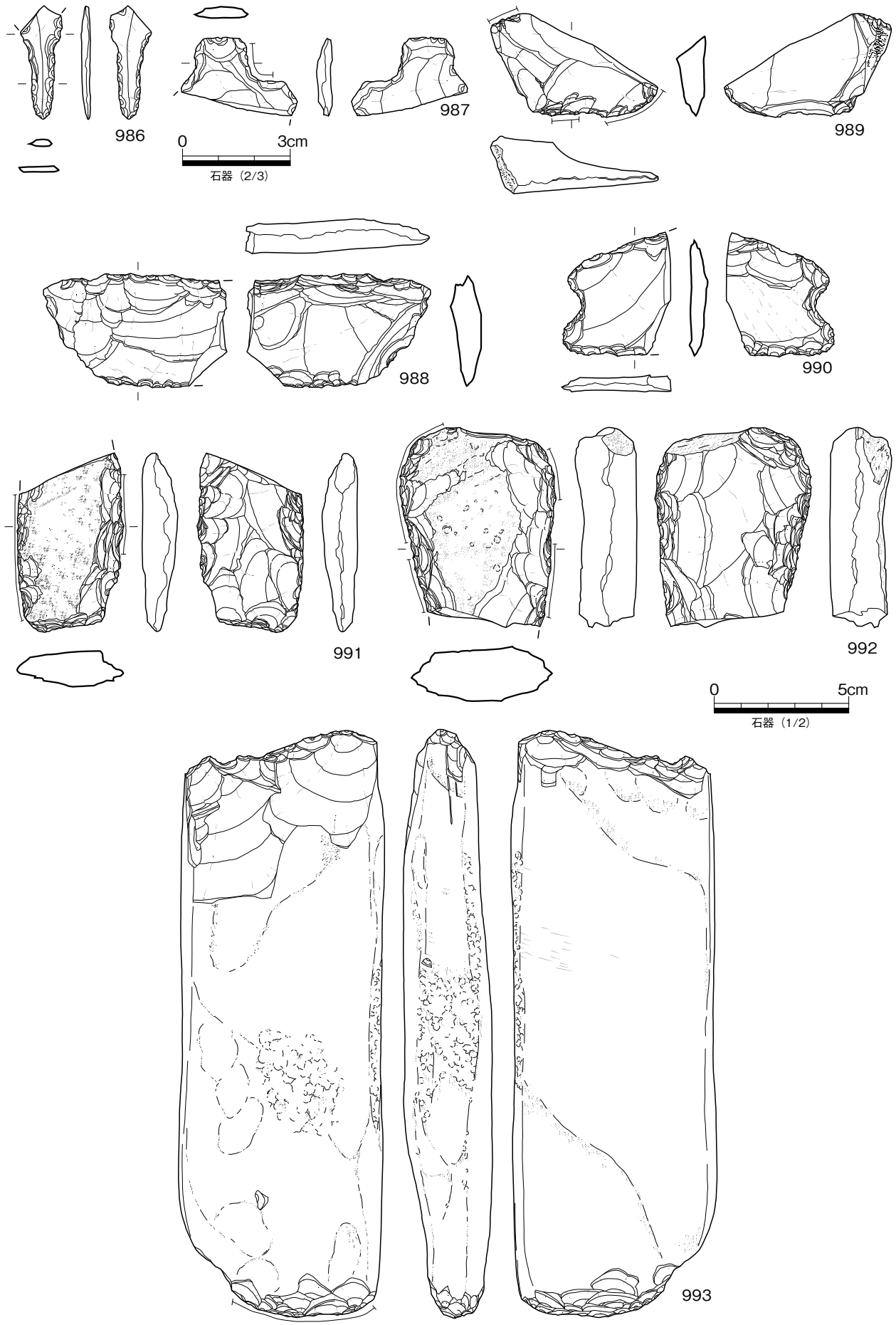
SD Ⅲ 08 出土遺物は真鍋Ⅴ－４期ころの良好な資料と見られたが、新しい様相の遺物が微量混在し、下層から出土している。本遺構は２ｍグリッドで遺物を取り上げているが、新しいものは集中するのではなく、広範な位置から出土しており、当該期の遺構を見落として一緒に掘りあげたということではないようである。また、古い様相の遺物も相対的に大きな破片ではあるものの、埋土中に浮いた位置で出土していることから、SD Ⅲ 08 の埋没時期は新しく考えるべきで、真鍋Ⅴ－７期に下る時期と考える。



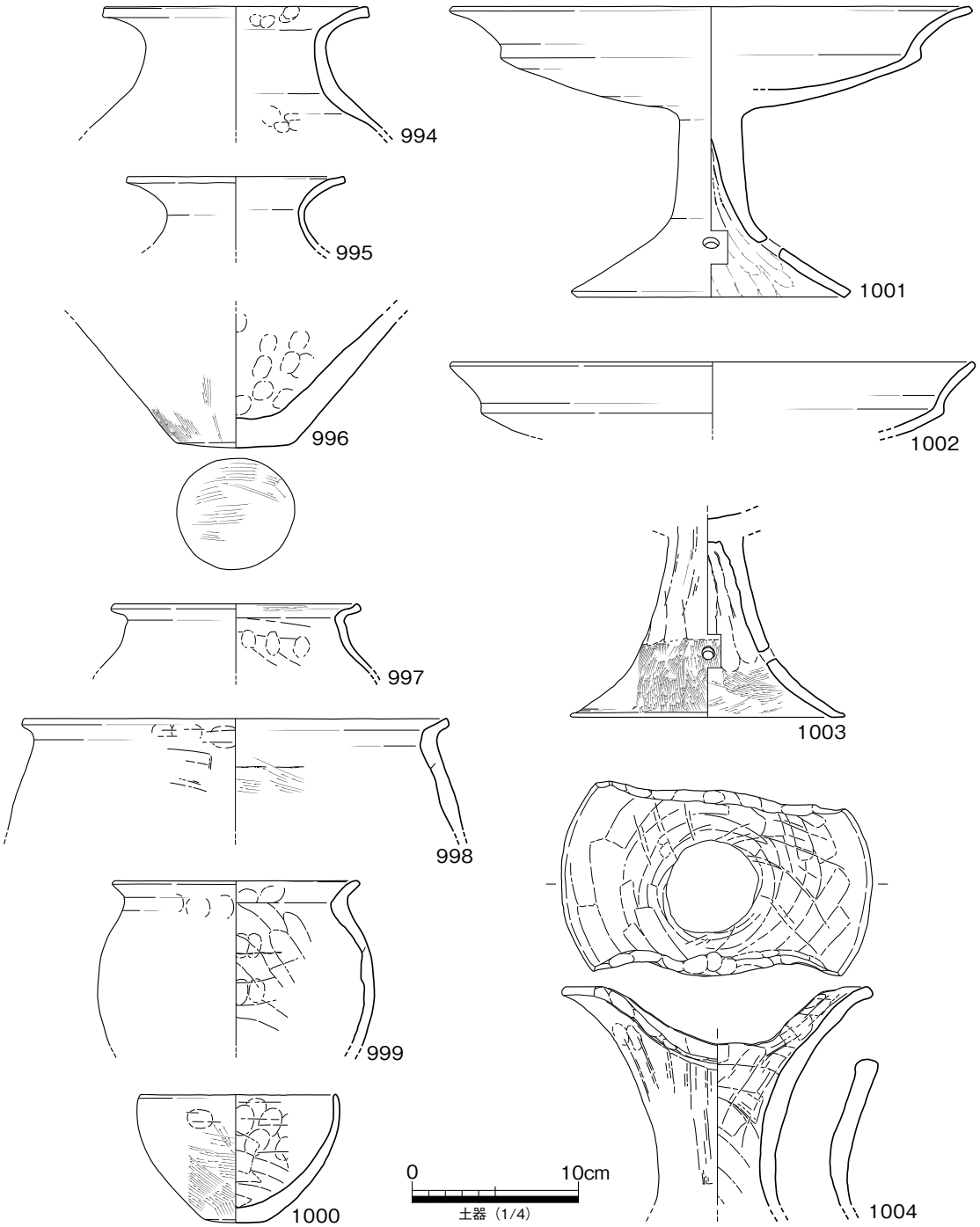
第 145 図　SD Ⅲ 08　下層出土遺物実測図



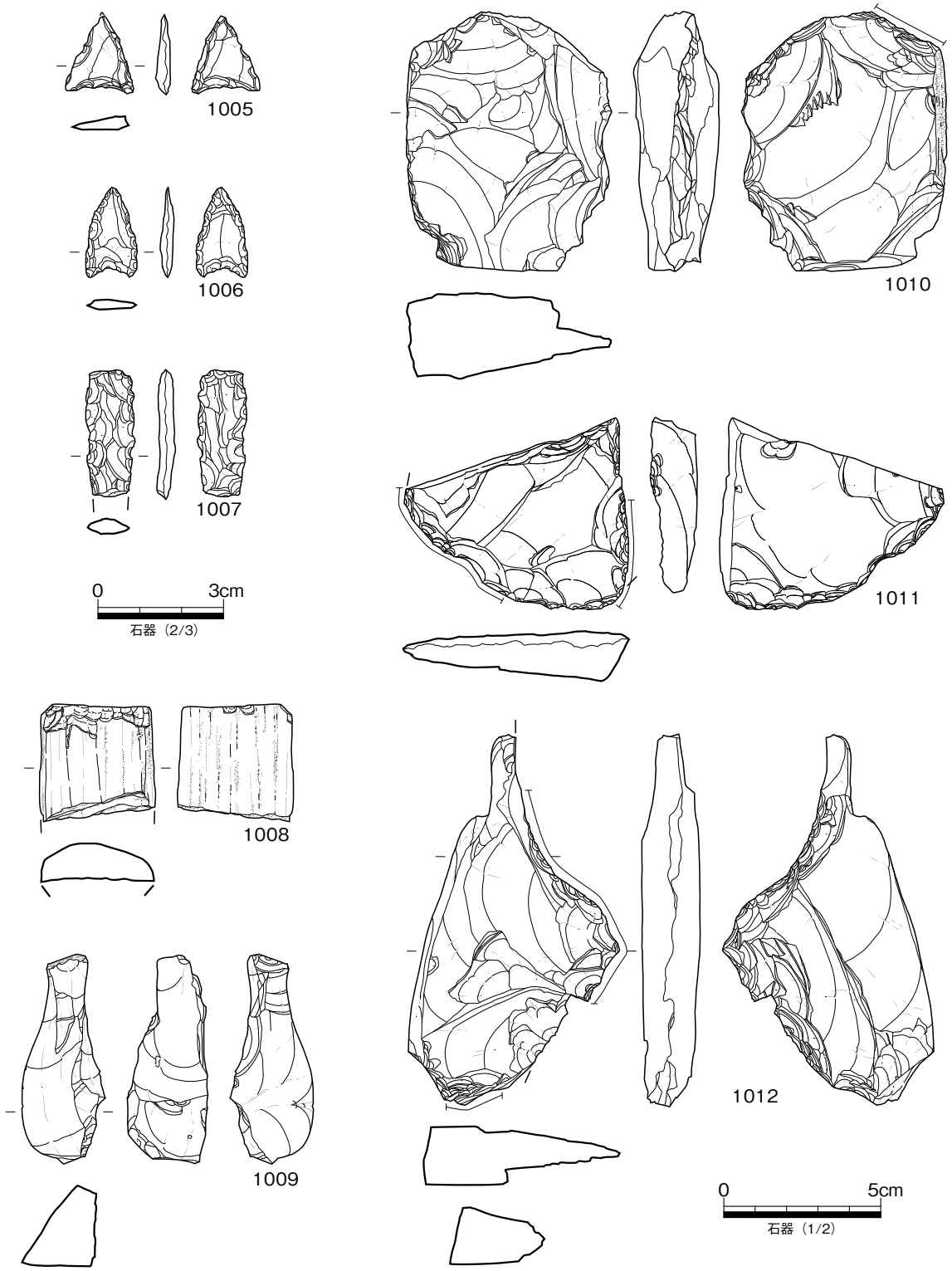
第 146 図　SD Ⅲ 08　上層出土遺物実測図 (1)



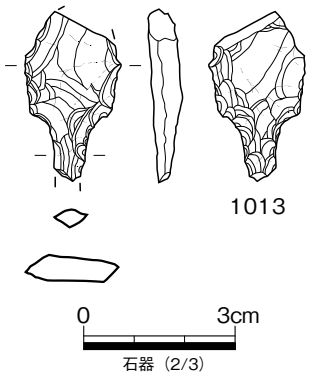
第 147 図　SD Ⅲ 08　上層出土遺物実測図 (2)



第 148 図　SD Ⅲ 08　出土遺物実測図 (1)



第 149 図　SD Ⅲ 08　出土遺物実測図 (2)



第 150 図　SP Ⅲ 02　出土遺物実測図

このほかのⅢ区の弥生時代後期の遺構

以下に消極的な根拠ではあるが、弥生時代後期と考えられる遺構を報告する。

SP Ⅲ 02

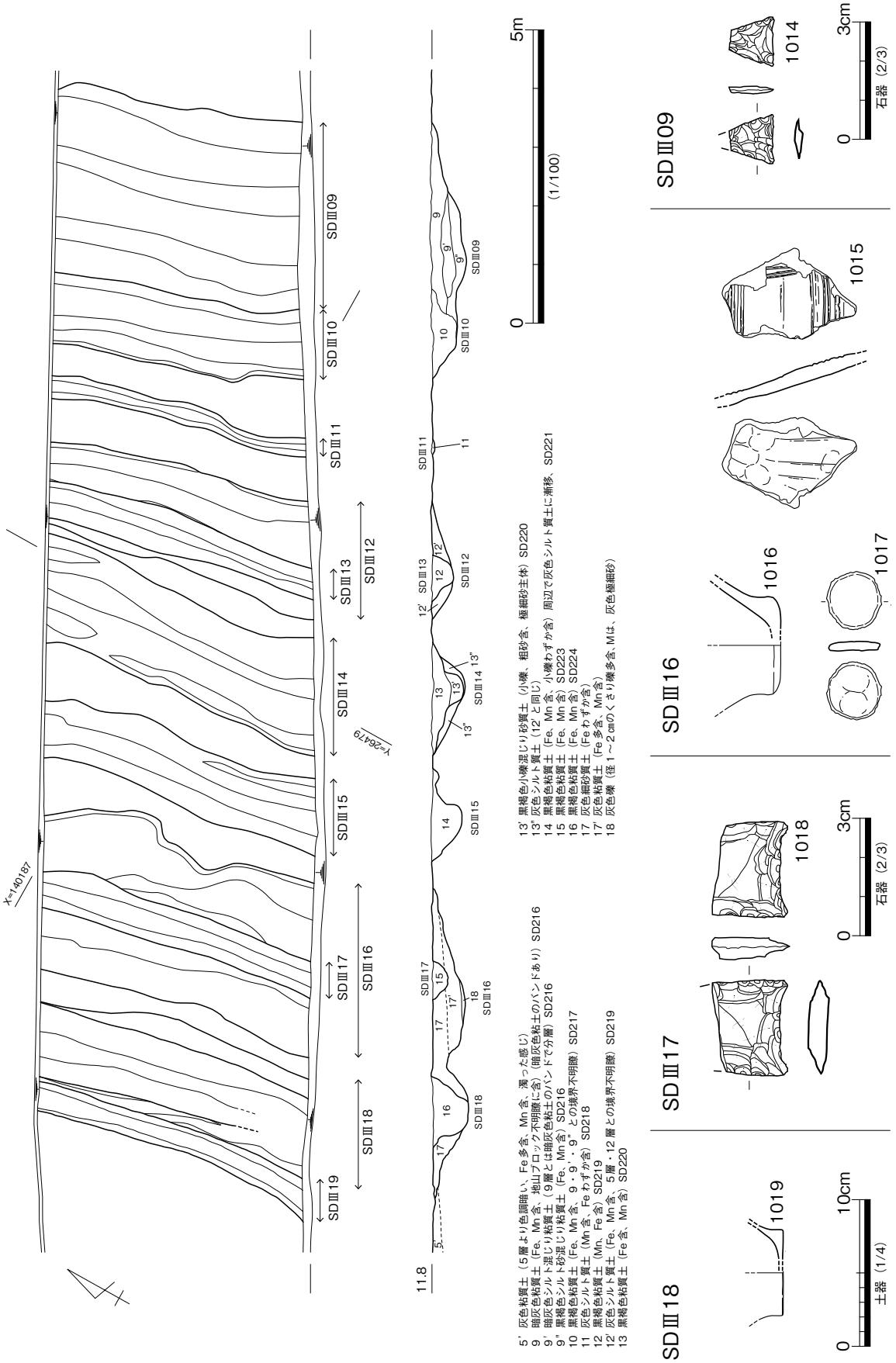
Ⅲ区の SP Ⅲ 02 から石錐（1013）が出土している。Ⅲ区 SP はほぼすべて弥生時代の遺構と考えられる。

SD Ⅲ 09 ～ SD Ⅲ 19

Ⅲ区東端付近で検出した溝群である。18 mの幅の中に複数の溝が座標北から 11 ～ 20° 西へ振ったほぼ同一の方向に掘られている。これらはある溝が埋没したあとに再掘削されたもの、見かけの上で平行して流れるものがある。埋土の様相が類似することから短い時期幅でとらえられると考えるが、遺物の出土量は極めて少なく、並存状況はよくわからない。

SD Ⅲ 09 は幅 4 、深さ 0.55 m、断面形は浅い椀形、40 点あまりの土器細片が出土している。図化可能な破片はない。胎土は弥生時代前期の特徴を示すものが多いが特定できない。平基式の石鏃（1014）が出土している。SD Ⅲ 10 は SD Ⅲ 09 の埋没後に掘られた溝状遺構である。幅 0.9、深さ 0.4 mで椀形の断面形、遺物細片若干量が出土したのみである。SD Ⅲ 11 は幅 30、深さ 4 ㎝ほどの小溝。遺物は出土していない。SD Ⅲ 12 は幅 1.2、深さ 0.4 m、椀形の断面形、遺物細片若干量が出土したのみである。SD Ⅲ 13 は SD Ⅲ 12 埋没後に掘られたもので、幅 0.7、深さ 0.3 m、椀形の断面形、遺物は出土していない。SD Ⅲ 14 は幅 1.5、深さ 0.5 m、下層では U 字形の断面形、同一個体と見られる弥生土器片が若干量出土している。図化不能であるが、弥生時代後期の可能性がある。SD Ⅲ 15 は幅 1 、深さ 0.5 m、椀形の断面形、弥生時代後期の甕口縁と考えられる破片（図化不能）ほか若干量の遺物が出土している。SD Ⅲ 16 は幅 2.6、深さ 0.7 m、浅い椀状の断面形の溝状遺構で、SD Ⅲ 18 と共通する埋土である。小ザル１つ分の遺物片が出土している。1015 は壺胴部で数条からなるヘラ描き沈線帯が２帯巡り、その間に垂直方向のヘラ描き沈線（３条以上）が施される。1017 は土器片を加工した円盤状土製品である。SD Ⅲ 17 は SD Ⅲ 16 埋没後に掘られた溝状遺構で、幅 0.7、深さ 0.3 m、U 字形の断面形、平基式石鏃の基部片が出土しているが、土器は数点の細片が出土したのみで時期はわからない。SD Ⅲ 18 は幅 1.5、深さ 0,6 m、椀形の断面形の溝で、SD Ⅲ 16 と溝内の盛り上がりによって区別されるものである。258 以外は数点の土器細片が出土したのみである。1019 は甕底部の摩滅する小片である。弥生時代後期のものと考えられる。SD Ⅲ 19 は SD Ⅲ 18 埋没後に掘られた溝状遺構で、幅 0.5、深さ 0.25 m、浅い椀状の断面形、遺物は出土していない。

SD Ⅲ 09 ～ Ⅲ 19 は遺物の出土が僅少で、時期の特定が難しいが、溝群のなかでは古いと考えられる SD Ⅲ 14 や SD Ⅲ 18 から弥生時代後期の遺物片が出土していることから、弥生時代後期の溝群と判断する。

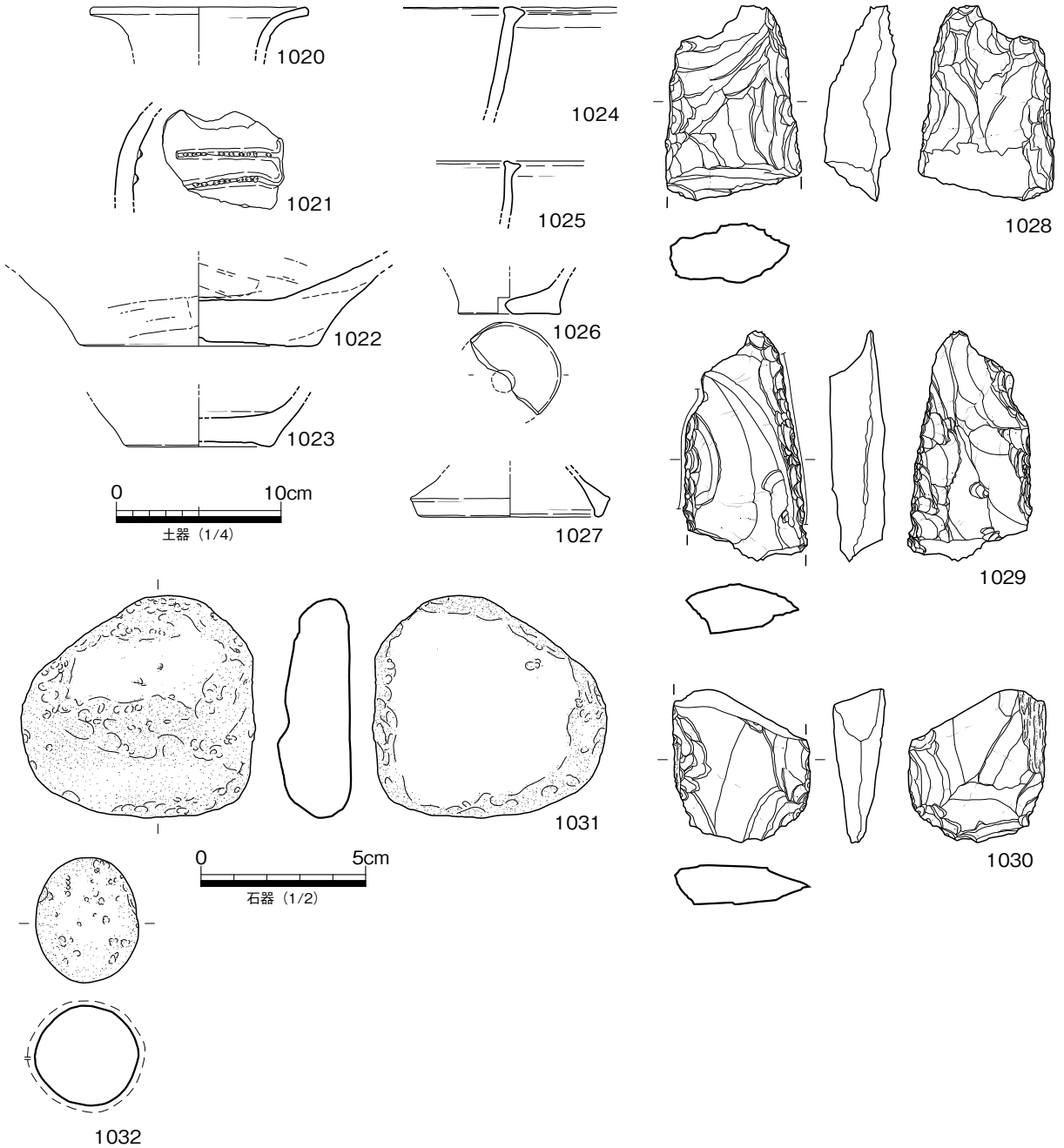


第 151 図　SD Ⅲ 09 ～Ⅲ 19　平・断面図、出土遺物実測図

Ⅳ区

弥生時代後期の包含層

Ⅳ区には弥生時代後期の遺構は確認されていないが、Ⅳ区（スタジアム部分）の SD Ⅳ 01 付近に、弥生土器を包含する黒色の包含層の存在が記録されている（平面的な広がりについては記録を欠く）。28㍑コンテナ１箱分の遺物が出土しているが、土器の多数は弥生時代前期のものと見られ、少量の弥生時代後期と考えられる土器片が含まれる。本層はⅡ区で報告した弥生時代後期の包含層と類似するものと把握できる。第 152 図 1020 ～ 1027 は摩滅する小片である。1021 は弥生時代前期の壺であるが、刻み目をもつ２条の突帯と縦方向の突帯を付している。1027 は脚端部を下方に突出させる高杯である。1028 ～ 1030 は打製石斧。1028 は安山岩製で、剥離が意図的にできず敲打によって整形している。1031 は砂岩亜円礫の敲石。側縁に敲打痕が認められる。1032 は長断面は楕円形、短断面は円形を呈する磨



第 152 図　Ⅳ区弥生時代後期の包含層　出土遺物実測図

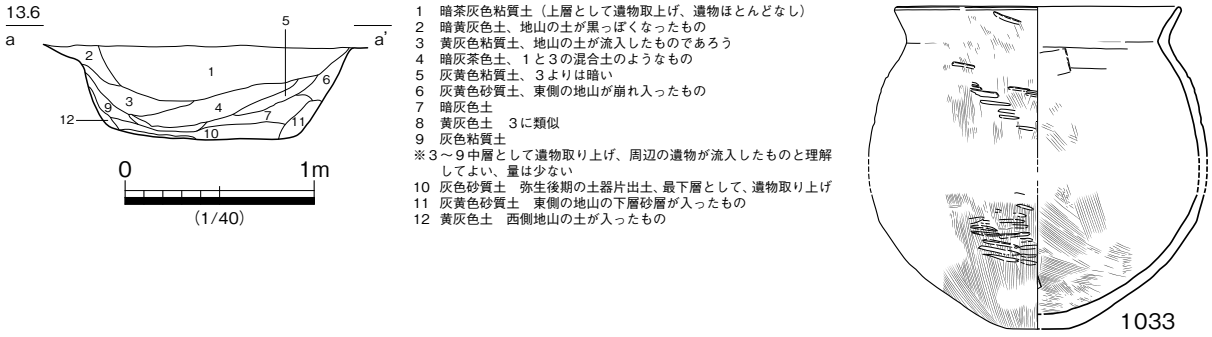
石である。

Ｖ区

溝状遺構

SD Ｖ 01

Ｖ区（水路部分）で検出した溝状遺構である。幅1.6、深さ0.5ｍほどの規模で、断面形は深いⅢ形である。埋没と掘り直しを繰り返したようで、複雑な堆積構造をしている。少量の遺物片が出土しているが、弥生時代後期に属すると考えられるものが多い。1028は、ほぼ丸底化が進み痕跡的な平底の底部から球状の胴部をもつ。胴部外面はタタキ目を十分に消さないハケ、ハケ後に口縁部を折り曲げる折り曲げ口縁である。真鍋Ⅵ期に下る資料である。



第153図　SD Ｖ 01　断面図、出土遺物実測図

Ⅶ区（第154図）

Ⅶ区からは、弥生時代中期、後期の遺構を検出した。Ⅶ区北側に東西10、南北20ｍほどの範囲に砂礫層の堆積が見られ、遺物を包含していた。掘り下げると土器棺と考えられる土器が現れはじめたが、精査しても掘り方の輪郭を把握できなかった。この段階で、砂礫層中に完形に近い弥生時代中期の土器が見えはじめた。遺構の掘り方を把握しようと精査を繰り返したが、結果的に砂礫を掘りあげて、地山である茶灰色細砂層の凹凸で土坑や溝状遺構として把握した。なお、砂礫層には級化構造は認められず、また、淘汰不良であることから人為的に埋められたものと考えられる。

以下に弥生時代中期後半の遺構（SK Ⅶ 01 ～Ⅶ 03、SD Ⅶ 01、Ⅶ 02）、弥生時代後期の遺構（ST Ⅶ 01 ～Ⅶ 05、SD Ⅶ 03 ～Ⅶ 05）、詳細な時期は不明であるが、埋没過程の弥生時代後期に土地利用（SX Ⅵ 01）がなされているSR Ⅵ・Ⅶ 01の順に報告する。